



表8 1990年度 平城京・京内寺院発掘調査地一覧

調査次数	調査地区	地区名	面積(m <sup>2</sup> )	調査期間	調査担当者	備考	掲載頁
212	西隆寺旧境内	6BSR	600	5. 7 ~ 6. 19	杉山 洋	奈良ファミリー建設地Ⅲ	106
218	薬師寺講堂・北面回廊	6BYS	700	7. 5 ~ 8. 25	島田 敏男	伽藍復興	97
219	西隆寺旧境内	6BSR	1,030	11. 16 ~ 11. 23 1. 22 ~ 3. 29	玉田 芳英 松本 修自	奈良ファミリー建設地Ⅳ	111
221	西隆寺旧境内	6BSR	585	1. 22 ~ 3. 14	小野 健吉	奈良市都市計画道路Ⅰ	120
215- 1	左京二条三坊六坪	6AFE	320	4. 3 ~ 5. 11	浅川 滋男	川崎ビル	74
215- 2	右京一条二坊四坪	6AGA	200	5. 15 ~ 5. 23	高瀬 要一	歯科医師会館	
215- 3	左京三条二坊九坪	6AF I	430	6. 19 ~ 7. 12	杉山 洋	武田丈夫宅	92
215- 4	西一坊大路	6AGF 6AGG	142	7. 7 ~ 7. 13	小池 伸彦	ケンタッキーフライドチキン	94
215- 5	左京一条三坊二坪	6AFB	95	7. 26 ~ 8. 8	本中 真	金田旬吉宅	68
215- 8	左京一条四坊三坪	6AFA	250	8. 27 ~ 9. 10	小池 伸彦	青山商事	70
215-12	右京一条二坊二坪	6AGA	16	10. 15 ~ 10. 17	森 公章	竹田キヨ子宅	
215-14	右京一条二坊二坪	6AGA	25	10. 22 ~ 10. 25	玉田 芳英	新大	
215-15	法華寺境内	6BFO	205	10. 29 ~ 12. 6	上野 邦一	境内改修	126
215-16	左京三条二坊四坪	6AF I	400	11. 21 ~ 12. 26	小沢 毅	大一車輛	81
215-18	法華寺旧境内	6BFO	17	1. 16 ~ 1. 17	松本 修自	東口酒店	
215-19	西一坊大路	6AGA	10	2. 25 ~ 2. 26	金子 裕之	大久保喜八郎宅	
215-20	左京一条二坊十坪	6AFC	18	3. 12	金子 裕之	塚本奈良次郎宅	

# 1 左京一条三坊二坪の調査 第215 - 5 次

## 1 はじめに

平城宮東方の法華寺町において事務所の新築工事があり、これに先行して調査を実施した。調査面積は95㎡、調査期間は7月26日から8月8日までである。

**基本層位** 地表面下約1.2mには北から南に向かって緩やかに下る青灰色粘土の地山があり、調査区南半部には地山の上面に奈良時代の整地土が薄く存在する。調査区北半部は地山の上面で、南半部では整地土の上面で奈良時代の遺構を検出した。これらの層の直上には厚さ約30cmの黒色腐食土層の堆積がある。この黒色土の堆積土層は、調査区全体が中世に沼沢地であったことを示す。層中には夥しい量の輝石安山岩（通称カナンボ）の玉石を含み、若干量の中世の土器片等が出土した。黒色土中に含まれる多量の玉石群は、本調査区の北方に存在した建物回りの化粧材か溝の護岸に用いられていたものであろう。なお、黒色土の上には厚さ約15～25cmの耕作土があり、それより上は厚さ約60cmの現代の盛土層である。

## 2 遺 跡

**遺 構** 奈良時代の掘立柱建物1棟、玉石列1条、土坑1基等を検出した。

**SB01** 調査区北半部で検出した掘立柱建物である。桁行3間以上、梁間2間以上で、柱間寸法は、桁行が3.9m（13尺）等間、梁間が3.0m（10尺）である。柱掘形の深さは約60～70cmと浅く、遺構面が削平されていることが推定される。

**SX02** 調査区南端付近で検出した玉石列。幅約0.3～0.5m、延長約2.5m分を検出し、奈良時代の整地土上面に据えられている。東西溝の側石が、北方から流れてきた中世の流水によって大半が削り取られた後にかろうじて遺存したものであろう。

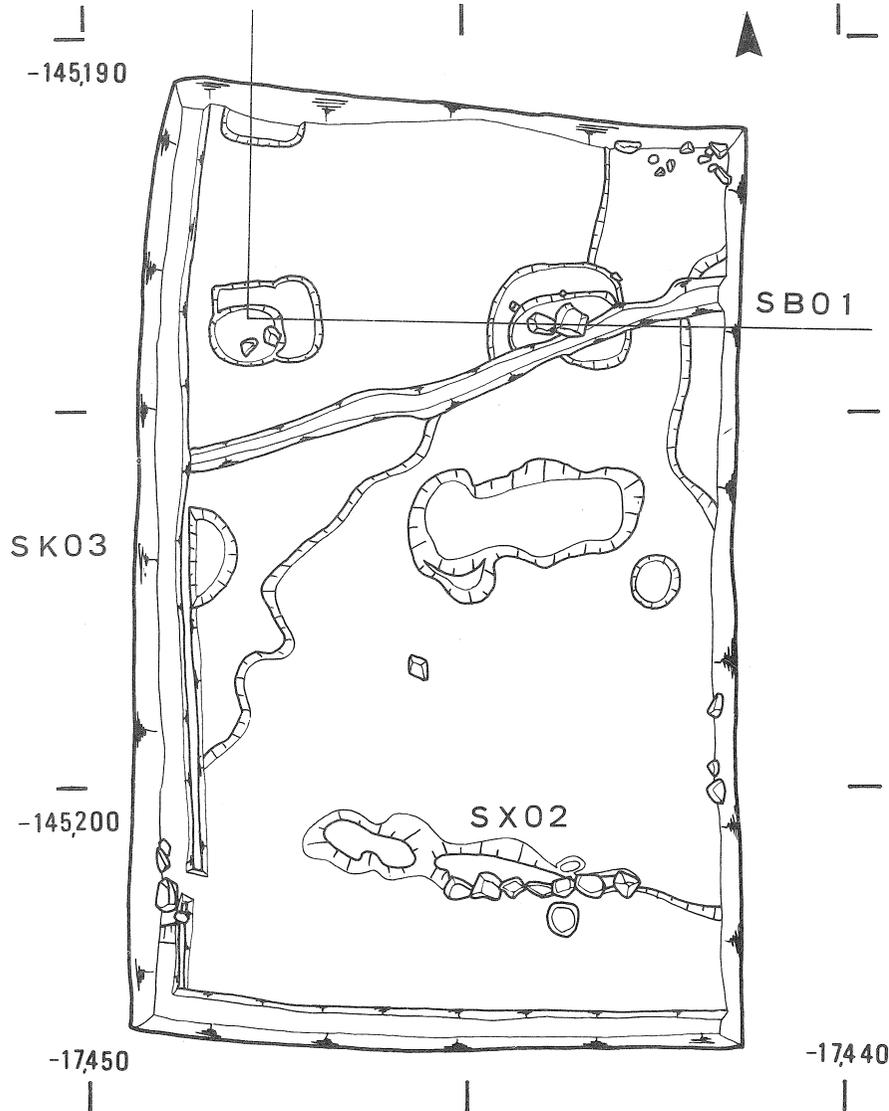
**SK03** 調査区中央西端で検出した土坑。西半部は調査区外に延びるため、東半部のみ掘り下げた。直径約1.5m、深さ約0.85mある。単なる土坑ではなく井戸である可能性もあるが、井戸であるとすれば、側板は抜き取られて残らない。

**遺 物** 瓦では奈良時代の軒丸瓦5点、軒平瓦8点と、中世の軒瓦が24点ある。土器は奈良時代の土師器、須恵器と、若干量の中近世の土器がある。遺物はすべ

て黒色腐食土層から出土した。

### 3 まとめ

本調査区は左京一条三坊二坪の西南隅にあたり、調査前には二坪と三坪の坪境小路に関連する遺構が想定された。しかし調査の結果これに該当する遺構は確認していない。ただSX02は東西溝の側石である可能性があり、小路側溝の痕跡を



示すものとも理解できる。

しかし従来の平城京域の調査によれば、小路側溝が玉石で護岸された例は皆無であるから、SX02が小路側溝の痕跡であると考えよりも、二坪南端を画する築地の北側溝の痕跡と考えるほうが自然であろう。

(本中 真)

図30 第215-5次調査遺構図(1:100)

## 2 左京一条四坊三坪の調査 第215-8次

奈良市法蓮町にある洋装店の倉庫増築にともなう調査である。調査は1990年8月27日から9月10日まで実施した。面積は250㎡。調査地の旧状は、JR関西本線と店舗とに挟まれた三角形の狭い駐車場であった。

調査地の土層は、駐車場のアスファルト路面から約30cmの深さまで碎石を主体とする造成土があり、その直下で砂礫混じりの黄褐色粘土の地山面に達する。調査区内では遺物包含層はまったく見られなかった。これは店舗建設の造成工事の際に、本来の遺構面よりかなり下まで削平したためとみられる。また、建築廃材を埋めた土坑が調査区内に点在していたり、外灯用電灯線の配線やコンクリートU字溝埋設のための素掘溝が調査区内を横断していた。これらの削平と攪乱により遺構は既にかかなり破壊を受けていたが、部分的には非常によく遺構の残っていることが調査により確認できた。

調査地は平城京左京一条四坊三坪にあたり、坪の中央南部に位置する。調査の

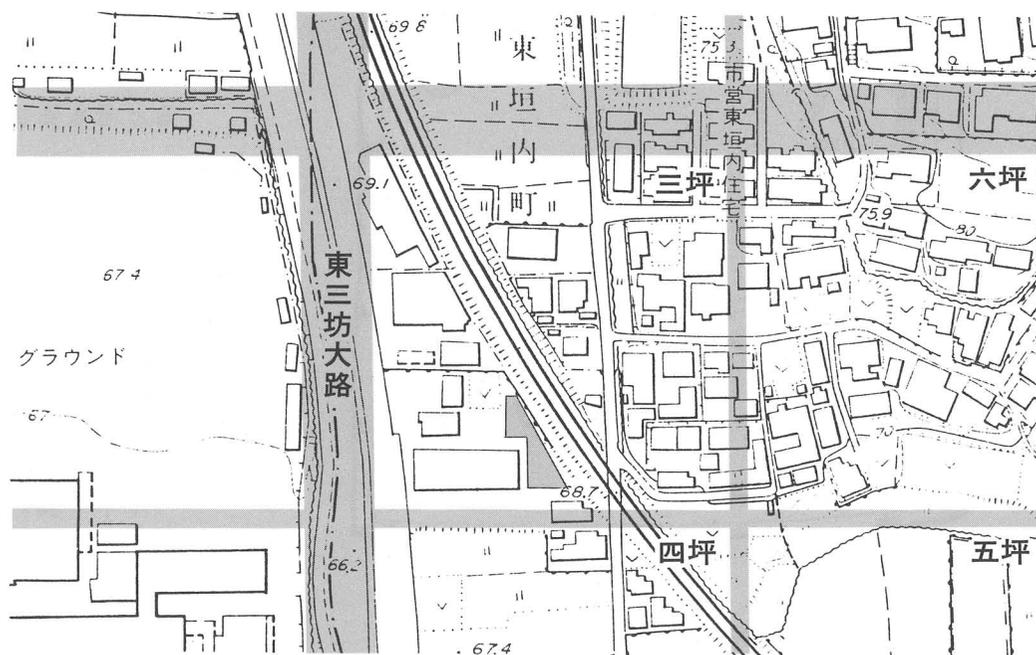


図31 第215-8次調査位置図

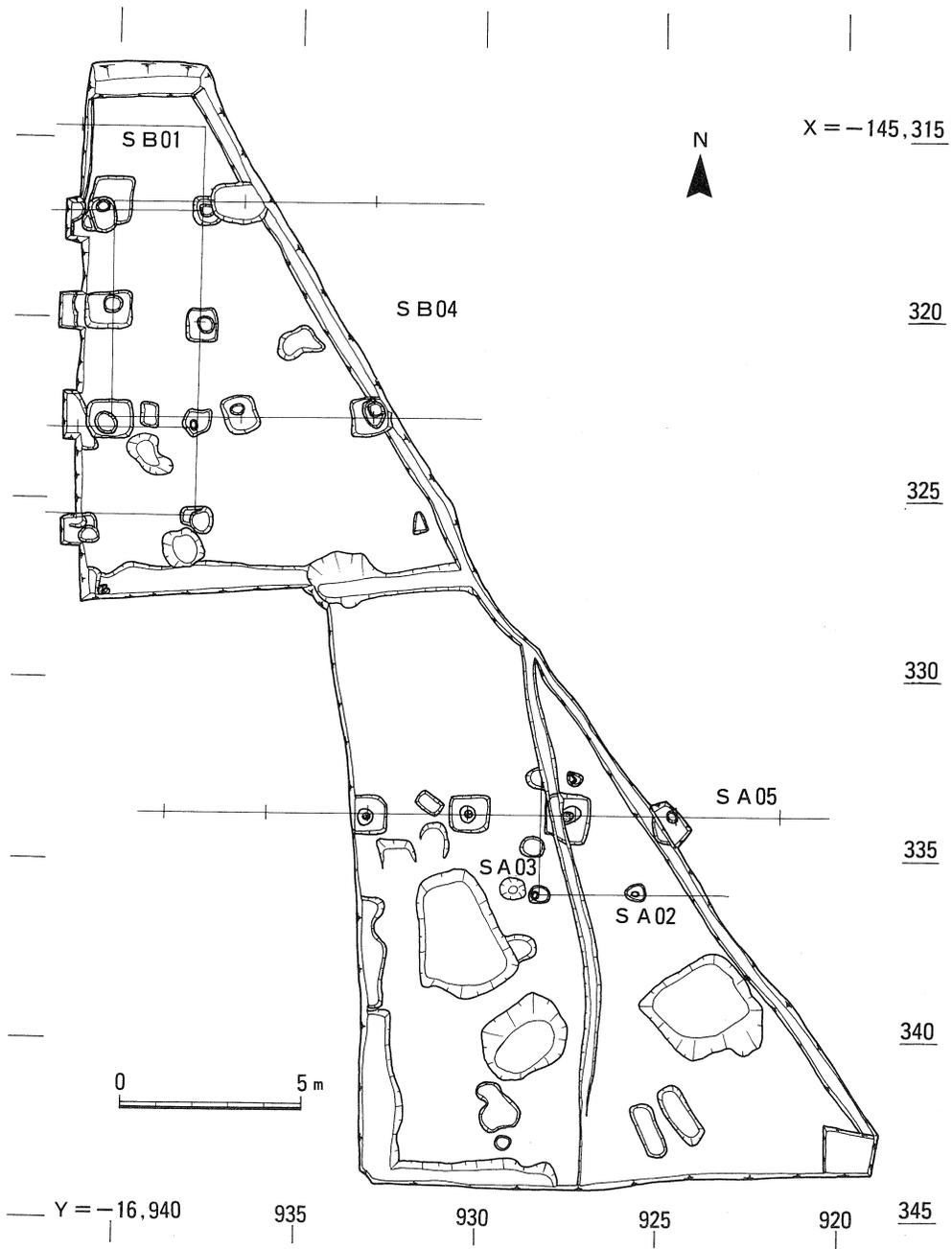


図32 第215-8次調査遺構図 (1 : 200)

結果、奈良時代の掘立柱建物2棟、東西塀2条、南北塀1条が見つかった。遺構の重複から2時期に分けることができる。

**A 期** 掘立柱建物SB01、東西塀SA02、南北塀SA03がある。いずれも柱穴の残りは悪い。SB01は南北に底をもつ東西棟建物で、北東隅の柱穴は既に削平されていたが、その西側の柱穴を調査区の西壁面で確認した。身舎の梁間2間（柱間約3m）、桁行は1間分（柱間約3.3m）を検出した。底の出は約2.4mである。2条の塀はL字形をなし、南の東西塀1間分（柱間約2.7m）と、その西端で北へ折れる2間分（柱間約1.5~1.8m）を検出した。東西棟建物SB01の東妻と南北塀の間は約9.6m（32尺）ある。

**B 期** 掘立柱東西棟建物SB04、東西塀SA05がある。削平を受けているにもかかわらず、両者とも柱掘形は一辺1m以上あり、大きい。SB04は梁間2間で、桁行は2間分を検出した。梁間の柱間は約3m等間、桁行の柱間は約3.6m等間であり、平城京内の掘立柱建物のなかでは大型に属する。また、北側柱列の東の柱穴では礎板が、西妻中央の柱穴では礎板と根石がそれぞれ出土した（図34-1・2）。

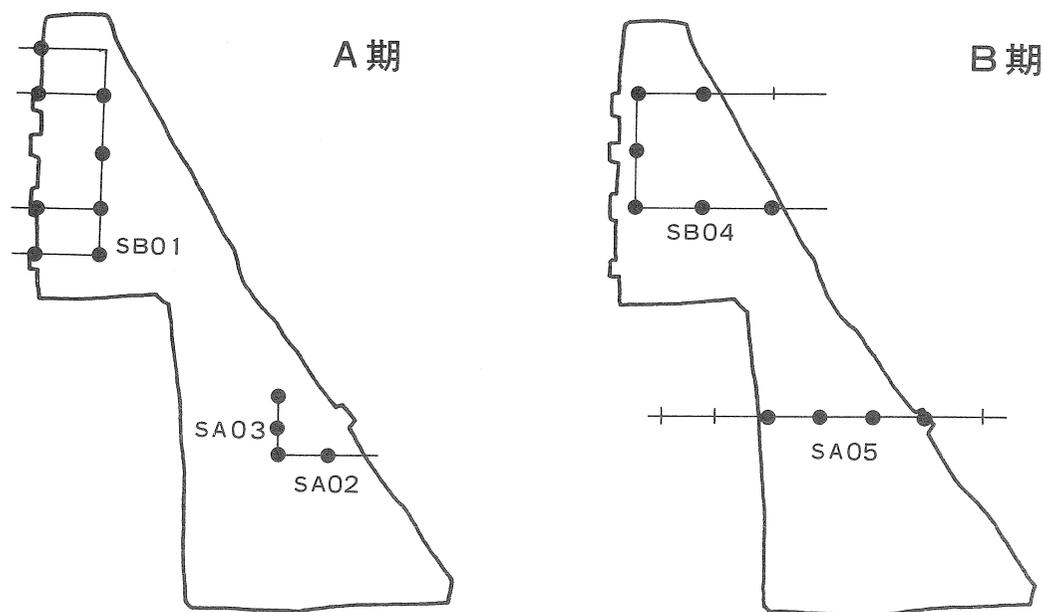


図33 遺構変遷図（1：400）

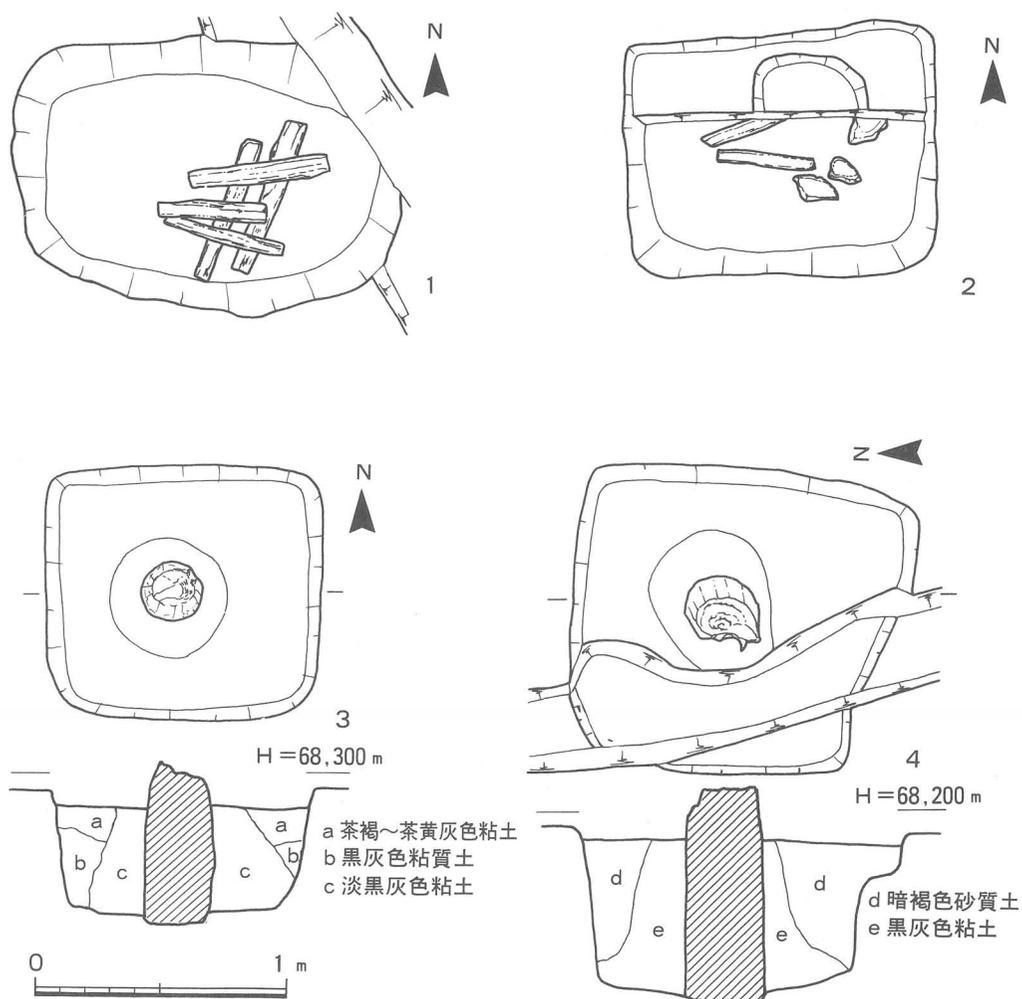


図34 SB04礎板・根石出土状況, SA05柱穴断面図(1:30)

SB04の南側柱列から約11m(37尺)南に東西塀SA05がある。SA05は柱間が約2.7mで、3間分を検出し、西側3個の柱穴には柱根が残っていた。西から2本目、3本目の柱穴の断面を見ると、柱を立てる際に根元の周囲を円錐状に粘土で固めて埋めた様子をはっきりと分かり、掘形も削平を受けた割には深く(約0.5~0.8m)、造作のしっかりした塀であったことがうかがえる(図34-3・4)。

出土遺物は皆無に近く、遺構の各時期の年代は不明である。また、遺構の坪内での位置の詳細な検討も今後の課題である。しかし、平城京内では大型に属する掘立柱建物を発見したことは、大きな成果であった。(小池伸彦)

### 3 左京二条三坊六坪の調査 第215-1次

#### 1 はじめに

事務所建設にともなう事前調査である。調査面積は320㎡。調査地は、左京二条三坊六坪の東南隅にあたり（図35）、1985年度には第164-12次調査として西隣の一画（現トヨタ・ヴィスタ）を発掘している。本調査では、坊間路・坪境小路の側溝をはじめ、六坪の敷地内において掘立柱建物2棟、掘立柱塀3条、井戸2基などの遺構を検出した（図36）。なお、条坊遺構の推定座標値は、①条坊の振れが15' 41"、②坪境小路の幅は側溝心々で20大尺、③坪一辺の規模は道路心々距離で450小尺、1小尺=0.296mとする3つの仮定にもとづき、これまでの周辺における調査成果を基礎として換算したものである。

#### 2 遺構の変遷

検出した遺構は、A期～C期の3期にわたる変遷をしている（図37）。

**A期（奈良時代初期）** 二条条間南小路北側溝SD03と東三坊坊間路西側溝SD04によって、六坪の敷地を区画する。SD04は発掘区を貫流する素掘りの南北溝で、幅が1.9～2.2m。トレンチ東南隅でわずかに東の肩を検出した。深さは遺構検出面下20cm～50cmで、溝底の凹凸が著しい。西の肩は、トレンチの中央付近にわずかな張出しがあり、その前方の溝中には橋脚と思われる杭が1本遺存する。つまり、六坪の敷地は坊間路西側溝に橋をかけて道路に連絡していたことになる。

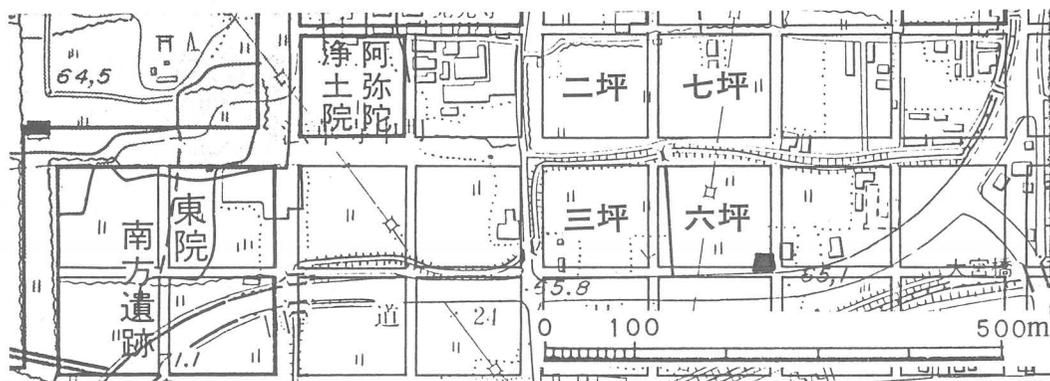


図35 第215-1次調査位置図

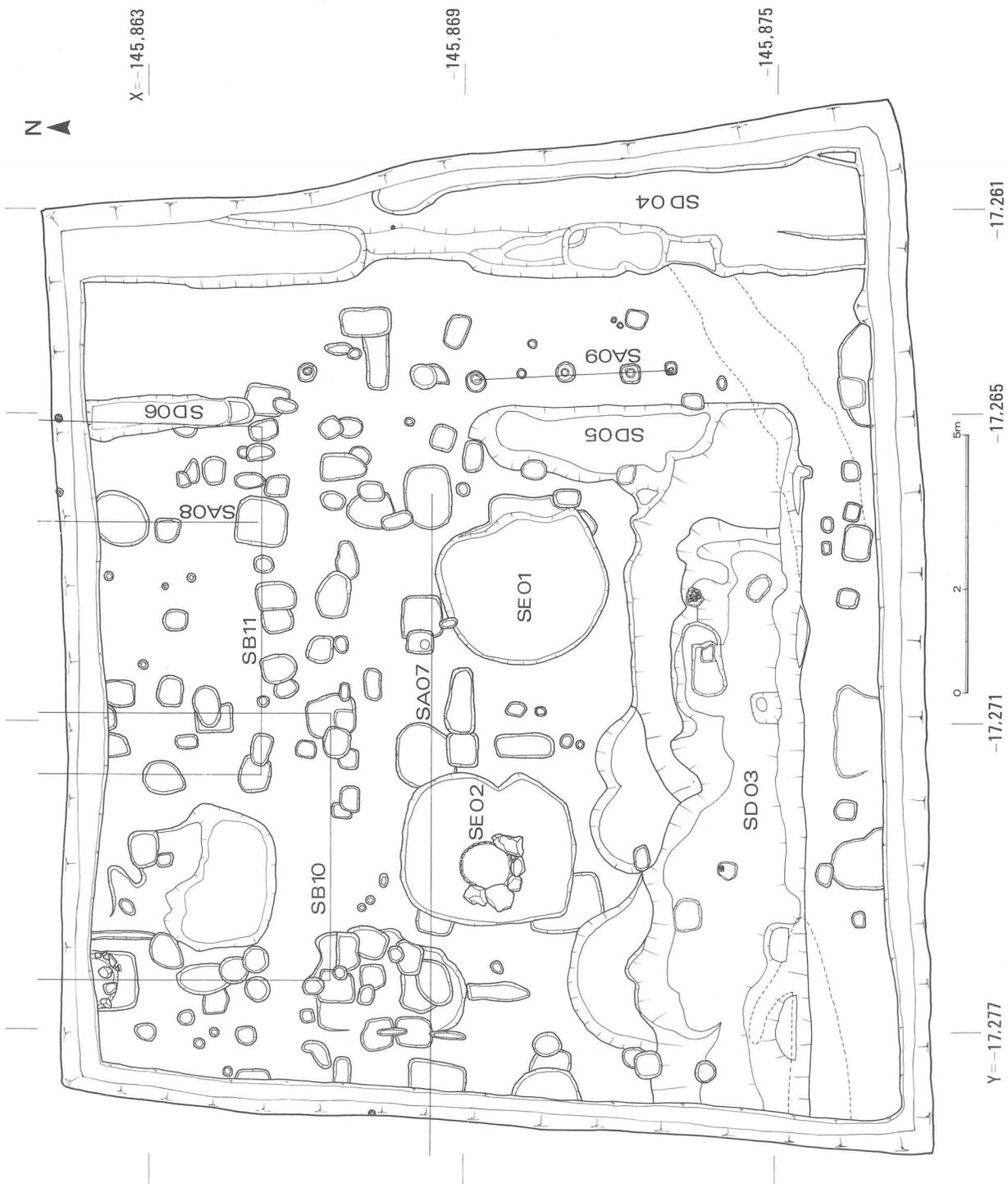


図36 第215-1次調査遺構図 (1 : 120)

SD03は幅3.0～3.3mの素掘りの東西溝で、深さは遺構検出面下30～36cmである。この溝は発掘区を貫流せず、SD04の手前約2.5mのところまで途切れる。すなわち、六坪の敷地は、その東南隅で、五坪との坪境小路と地続きになっていた。

SD03とSD04によって区画された六坪の東南隅には、掘立柱建物SB10がたち、その南方には井戸SE01がある。SB10は桁行2間以上×梁間2間の南北棟で、柱間寸法は桁行が7尺、梁間が11尺である。梁間中央の柱穴は、妻壁面よりもやや前方に位置しており、直接棟木をうける棟持柱であった可能性が大きい。SE01はすでに井戸枠が抜きとられていたが、抜き取り穴の底から多量の土器が出土した。土器はいずれも平城宮土器Iに属しており、A期の年代が知られる。

さて、前記の条坊遺構に関する3点の仮定にしたがうと、二条三坊の坊間路と条間南小路との交点の座標値は、 $X = -145,877.226$ 、 $Y = -17,257.787$ となり、SD04と坊間路の心々距離は約3.2mである。したがって、坊間路の幅は、側溝心々距離で約6.4m（22小尺）に復原できる。一方、条間南小路とSD03の心々距離は約3.6mあり、条間南小路の幅は側溝心々距離で約7.2m（20大尺）に復原できる。なお、SD03は1984年度の第156～18次調査で検出したSD01とX座標がほぼ一致しており、一連の東西溝である可能性が大きい。

**B期（奈良時代前半～中頃）** 掘立柱建物SB10と井戸SE01は廃絶し、かわって3条の掘立柱塀SA07・SA08・SA09を築き、小さな南北溝SD05・SD06を掘る。これらの遺構は、いずれも六坪東南隅の区画関連施設である。

SA07はSD03の心から北へ約6m（20小尺）の位置にある4間以上の東西塀

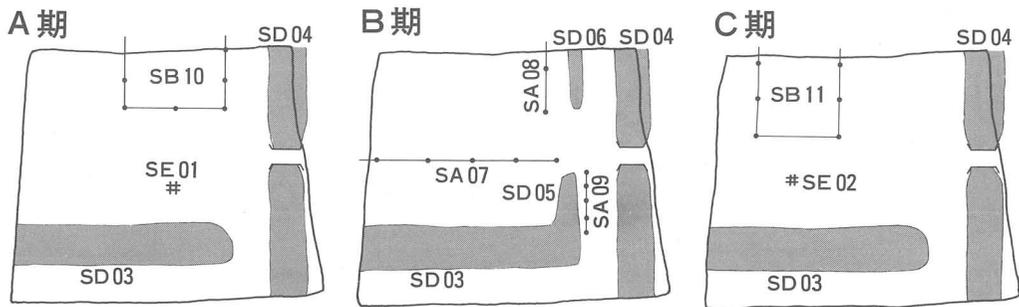


図37 遺構変遷図

で、柱間寸法は10尺等間である。これに直交するSA08は1間以上の南北塀で、柱間はやはり10尺である。SA08とSA07東端の柱では約60cmのずれがあり、またSA08南端の柱とSA07の間隔は塀の柱間より広く11尺あって、おそらくここが六坪東南隅の出入口であったのであろう。

条間南小路北側溝SD03に接続して掘られた南北溝SD05は、SA07の手前で途切れる。SA09は、SD05の位置、長さに対応するようにたてられた4間の南北塀で、仮設的なものとみられる。柱間寸法は北から3尺、3尺、4尺、2.5尺と一定ではなく、柱位置も正確な直線上にはない。SD06はSD05の延長線上にある南北溝で、こちらはSA08と対応関係を示している。以上のように、SD05・SD06は六坪の敷地東南隅の出入口をさけるようにして設けられた南北溝であり、それぞれ対応関係をもつSA09・SA08と一体化して、敷地の隔離性をより強固にしている。なお、SD05・SD06からの出土土器は、平城宮土器Ⅱのものを主体とする。

**C期（奈良時代後半）** B期の区画施設SD05・SD06・SA07・SA08・SA09はすべて廃絶し、六坪の区画施設は再びSD03とSD04だけになる。敷地のなかには、掘立柱建物SB11がたち、その南方に井戸SE02を掘る。空間構造としては、A期にきわめてよく似ている。

SB11は桁行2間以上×梁間1間の南北棟で、棟束を用いた妻入の建物であろう。柱間寸法は、桁行が8尺等間、梁間が17尺である。SE02は縦板組の円筒形

H=62.400m の井戸で、直径は約1m。杉の板

材を二重にまわしており、上端に大きな自然石を5つ残した状態で遺存していた（図38）。井戸底の砂混礫層から和同開珎、萬年通宝、神功開宝などの銅銭15枚が出土し、埋土上層からは10世紀初頭の土師器が出土した。（浅川滋男）

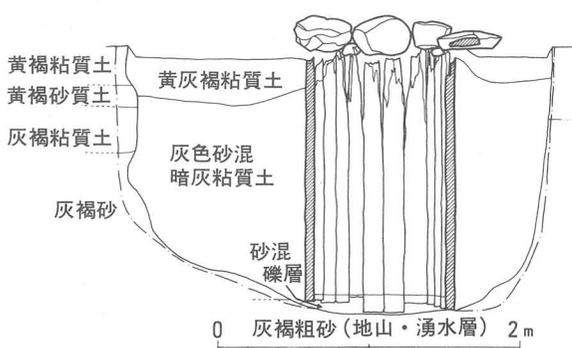


図38 井戸SE01断面図 (1:50)

### 3 遺物

土器 4条の溝と井戸SE01から、大量の土器が出土した。SE01の底から一括出土した土器（図39）には、土師器杯B、皿C（6）、碗C（7）、甕C（4）、羽釜（5）、須恵器杯A、杯B（9）、杯B蓋（8）、平瓶（1）、壺A（3）、壺B（10）、壺L、壺Q（2）がある。土師器甕Cは、小さな平底で、外面を粗い刷毛目で調整し、器壁を薄く仕上げる粗製の甕である。2個体出土した。近畿地方には類例が少ない。須恵器杯B、杯B蓋、平瓶、壺Bは、いずれも灰白色を呈し、濃緑色の自然釉が厚くかかる。美濃古窯跡群の製品と推定される。また、壺Qや杯Aなどには漆が付着する。小片のため図示は省略したが、土師器杯Bに螺旋暗文+二段斜放射暗文をもつものがあり、また、須恵器平瓶や壺Aの形態からも、平城宮土器Iに位置づけられる。

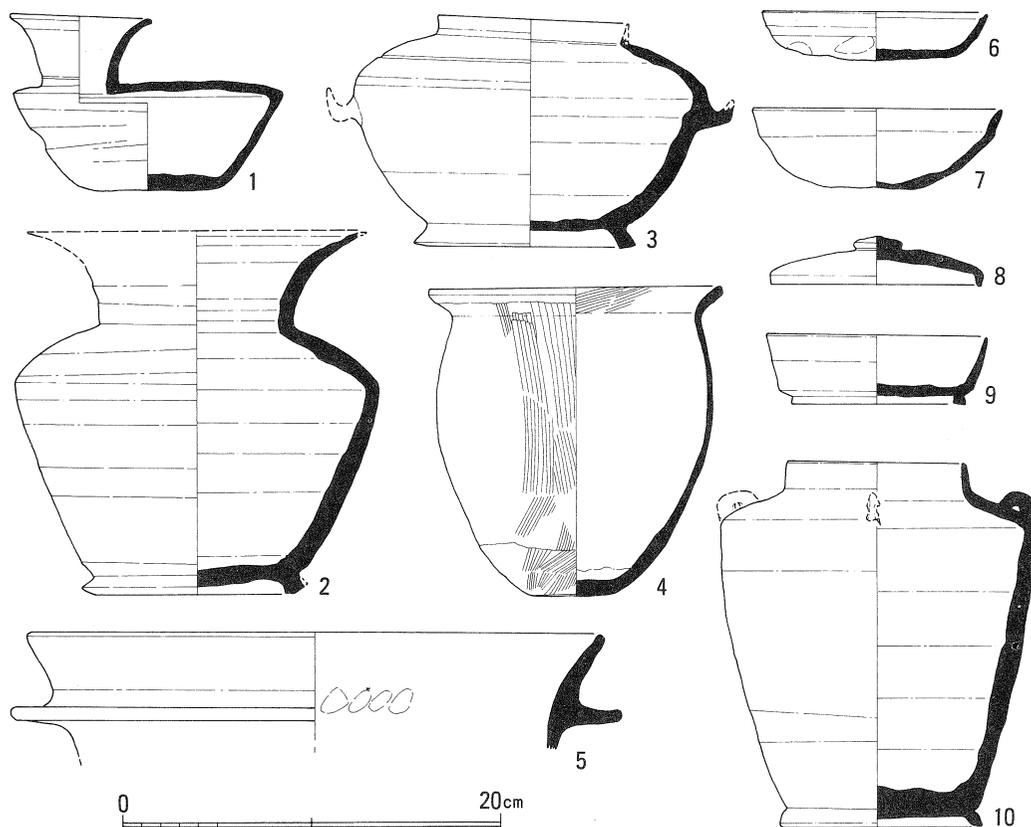


図39 SE01出土土器（1：4）

SE02の埋土上層からは、e手法で調整するほぼ完形の土師器杯Aと皿Aが2個体ずつ出土した（図40）。10世紀初頭に位置づけられ、外面へラ削りのc手法による東三坊大路東側溝上層（SD650B）出土土師器より後出する。また、天禄4年（973）の火災によって遺棄された薬師寺西僧房床面出土土器と比べると、皿Aの口縁部に屈曲がなく、両者の中に位置づけられる。なお、「新」もしくは「新田上」と記す墨書土器が坊間路西側溝SD04から出土した。（杉山 洋）

**木製品・金属製品** 溝と井戸から木製品、金属製品が出土した。木製品には竪杵、漆刷毛、曲物、蓋板、挽物皿、琴柱、加工棒、部材などがあり、ほかに漆塊、種子類なども出土した。これらはおもにSD03とSD04から出土し、井戸SE01からは曲物と部材が出土したにすぎない。いずれも腐食がすすみ、残りはよくない。これらのうち、竪杵は丸材の中央を粗く削って握りとした簡単なもの。中央で折れているがほぼ完形で、長さ43.9cm、直径4cm。漆刷毛は腐食のためほとんど原形をとどめないが、先端部に漆の付着した毛が残る。琴柱は、底辺の中央部を三角形に切り欠いて双脚としたもので、ほぼ完形。長さ3.8cm、高さ2cm。

井戸SE02からは木製品は出土しなかったが、鉄釘、銅鋌とともに銅銭が出土した。銅銭は和同開珎、萬年通宝、神功開宝の3種15枚で、いずれも完形品であり、井戸底の砂混礫層から出土した。和同開珎は「隸開和同」であり、萬年通宝には「年」の第4画を縦にする「縦点萬年」5点と、横にする「横点萬年」2点

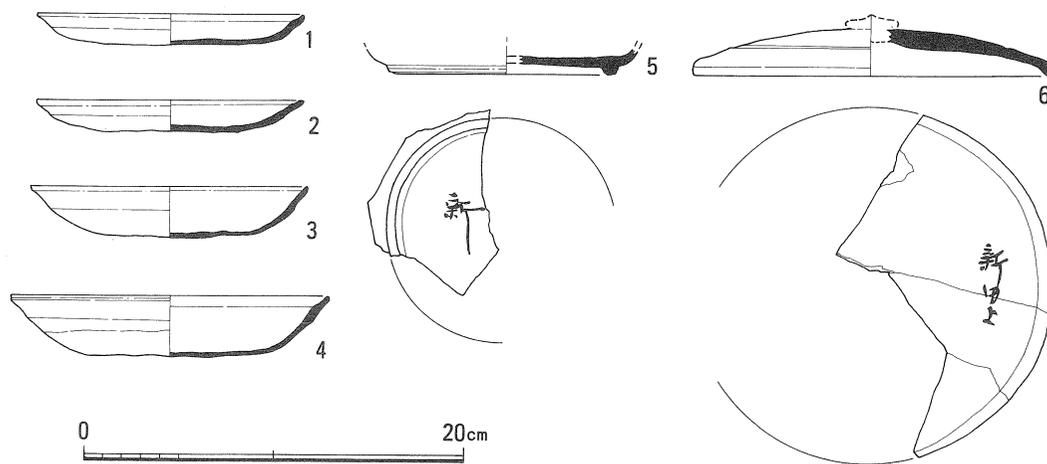


図40 SE02・SD04出土土器（1：4，1～4；SE02，5・6；SD04）

があり、神功開宝には「功」の旁を「刀」にして縦に長くのばす「長刀」と呼ばれるもの6点と、同じく旁が「力」で錢径が一回り大きい「力功大様」1点がある。平城京内の井戸出土の銅錢としては、1987年度の第186次調査で、左京三条二坊二坪の奈良時代後半の井戸から出土した和同開珎、萬年通宝、神功開宝の3種39枚がある。やはり完形品が多く（32枚）、井戸底の堅くしまった砂層に散在していた。今回発見した銅錢とよく似た出土状況を示している。（小池伸彦）

**瓦塼類** 軒丸瓦と軒平瓦が、あわせて7点出土した。軒丸瓦は6133A、6135A、6225A、6318Abの4種5点で、6135Aが2点ある。軒平瓦は6641I、6732Cの2種2点である。

#### 4 まとめ

面積300㎡あまりの小規模な調査ではあったが、発掘区が左京二条三坊六坪の東南隅という地点にあたることもあり、上記のような興味深い遺構と遺物をいくつか発見することができた。ここにその成果を要約しておこう。

- ①坊間路西側溝SD04と条間南小路北側溝SD03を検出し、坊間路と条間南小路の幅を側溝心々距離で、それぞれ22小尺、20大尺と復原できた。
- ②六坪の敷地は、その東南隅において、東側は坊間路西側溝に橋を架け、南側は条間南小路北側溝の途切れた余地を利用して、周辺道路と連絡していた。
- ③遺構は、大きくA～Cの3期にわたる変遷をしている。その中で、奈良時代前半から中頃にかけて最も長く存続したB期では、3条の塀と2条の南北溝を設けることによって、敷地の閉鎖性を強固にするとともに、道路に対する複雑なアプローチをうみだしていることが判明した。
- ④井戸のうち、SE01は平城遷都のごく初期に掘られてまもなく廃絶したが、SE02は765年を上限とし、平安時代（10世紀以降）まで存続した。
- ⑤4条の溝と2基の井戸からは、年代の判明する土器や銅錢など、多彩な遺物が出土した。その中で、奈良時代初頭の漆附着土器や漆篋、漆塊などがまとめて出土したことが注目され、付近に漆関連の作業所的なものが存在した可能性が指摘できる。（浅川滋男）

4 左京三条二坊四坪の調査 第215 - 16次

1 はじめに

本調査は、店舗付共同住宅建設に伴う事前調査である。調査地は平城京左京三条二坊四坪の東南部にあたるが、当該坪については、1986年に北辺部の発掘調査を実施している（第174 - 11次、『昭和61年度平城概報』所載）。今回の調査面積は約400㎡であるが、厚さ0.7~1.0mにおよぶ盛土が行なわれていたため、遺構面における実質的な面積は300㎡にとどまる。11月21日に重機による掘削を開始し、12月26日の遺構保護用の砂入れをもって調査を終了した。

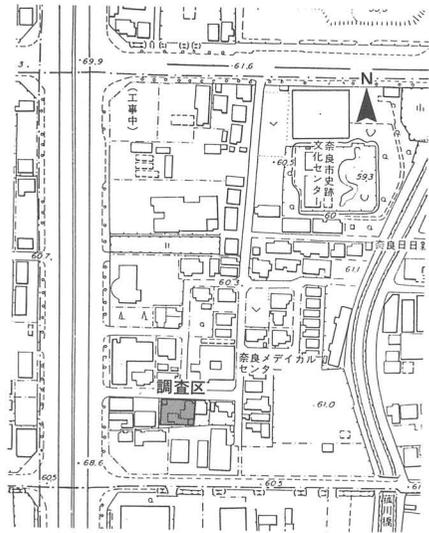


図41 第215-16次調査位置図 (1 : 5000)  
大和都市計画図1 / 2500から作製

**土 層** 調査区の基本的な層序は、盛土の下に厚さ15~20cmの灰黒色の水田耕土があり、次が10cm内外の淡灰黒色の旧耕土と厚さ数cmの床土となる。この下が基本的には奈良時代の基盤層（地山）である。上から灰色砂・黄灰色粘土・灰黒色砂質土・灰黄褐色砂質土……（以下略）の順で堆積しているが、遺構検出はほとんど灰色砂の面で行なった。基盤層（地山）上面の標高は、59.3~59.4mである。

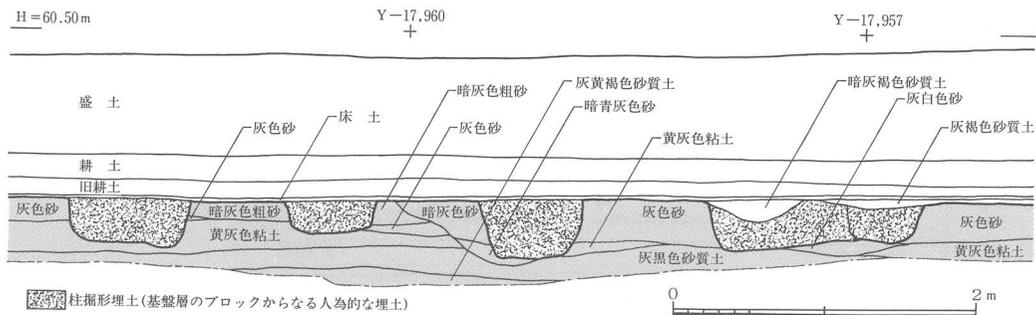


図42 調査区北壁土層図 (部分, 1 : 50)

調査区の東北部には、灰色砂の上に、奈良時代の遺物を含む層（灰褐色砂質土）が薄く広がるが、この上面では奈良時代の遺構は確認されなかった。なお調査区内には、部分的に暗褐色砂質土を埋土とする窪みが存在するが、これらも奈良時代以前のものと考えられる。

## 2 遺 構

検出した遺構は、平城京関係のもの、京廃絶後のものに大別される。前者の遺構としては、掘立柱建物6棟、掘立柱塀3条があり、後者に属するものとしては、素掘溝、土坑がある。

SB01 調査区の中央北寄りの部分で検出した、桁行3間・梁間2間の東西棟建物。桁行総長9.0m（30尺=10尺×3）、梁間総長4.8m（8尺×2）を測り、方位は国土方眼にほとんど一致する。柱筋をそろえて南側に2列の小柱穴列をも

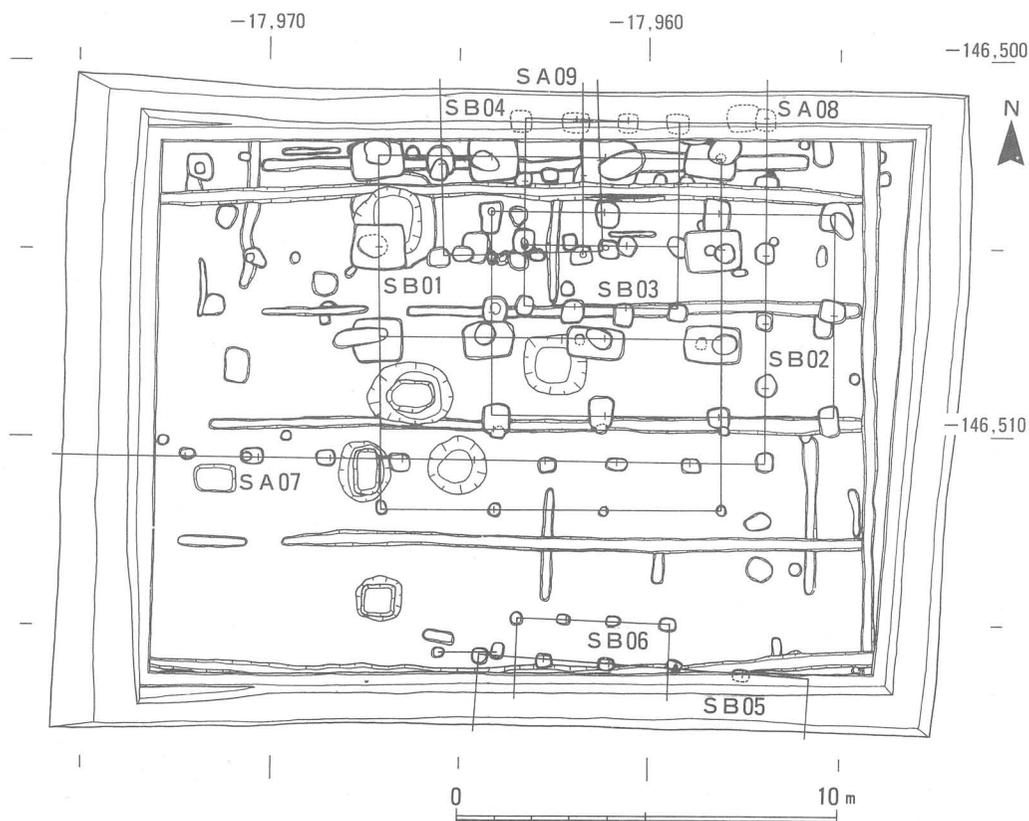


図43 第215-16次調査遺構図（1：200）

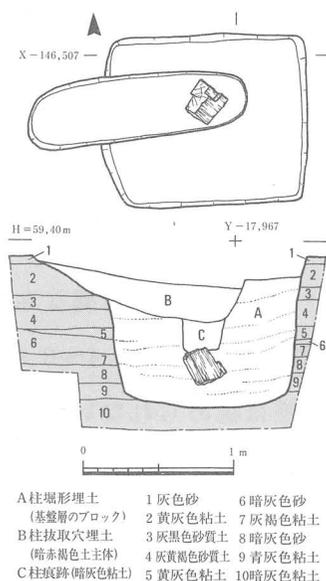
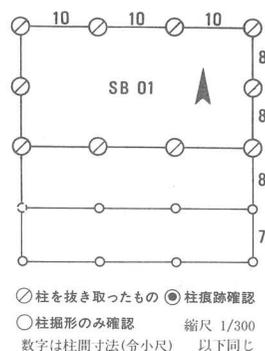


図44 SB01西南隅主柱穴 (1:50)

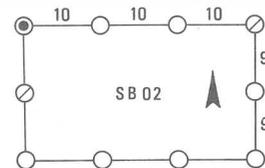
つことから、建物の南に広縁を張り出した構造であったと考えられる。南側柱列から北側の小柱穴列までの距離は2.4m (8尺)、そこから南側の小柱穴列までの距離は2.1m (7尺)である。主柱



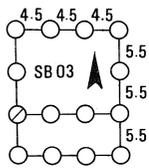
穴が遺構検出面から (以下、深さについては遺構検出面からの数値とする) 70~100cmにおよぶ深さを有するのに対して、これらの小柱穴は深さ5~15cmと浅く、消失したものもみられる。主柱穴の掘形は、東西がやや長い長方形を呈しており、長辺で1.3~

1.5m、短辺が0.8~1.2mとかなり大きい。建物本体の柱は全て抜き取られているが、下部の柱痕跡から推定される柱径は25cmほどである。西南隅の柱穴には、掘形の底部に建築部材を転用した礎板が残っていた (図44)。このほか、掘形の内部に、柱掘形より新しく、抜取穴に切られる小穴をもつものが、身舎の東南隅など3箇所を確認されている。縁の問題とも関連するが、床束の掘形と見てよいだろう。深さは30~35cmと、比較的浅い。柱穴の重複関係からみて、SB02・SB03・SB04・SA09のいずれよりも新しい。

**SB02** 調査区の東北部に位置する桁行3間・梁間2間の東西棟建物。桁行総長9.0m (30尺=10尺×3)、梁間総長5.4m (18尺=9尺×2)の規模をもち、方位は国土方眼にほぼ一致する。柱掘形は、正方形またはやや南北に長い

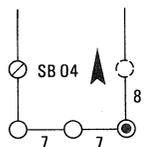


長方形で、長辺0.6~0.8m、短辺0.6m内外、深さ50~60cmと、柱間に比べるとやや小型である。柱は、抜き取られたものと、柱痕跡を残すものの両者が見られるが、掘形のみしか確認できなかったものが多い。柱痕跡から復原される柱径は20cm程度である。SB01と重複し、その掘形によって切られる。



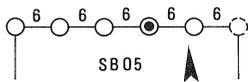
**SB03** 調査区北辺のほぼ中央部で検出した、桁行3間・梁間3間の東西棟建物で、南側に廂をもつ。北の側柱列は調査区の北壁にかかる形で確認されたもの（図42）で、南北長および北側の廂の有無については不確定要素が残るが、いちおう桁行総長4.05m（13.5尺

= 4.5尺 × 3）、梁間総長4.95m（5.5尺 × 2 + 5.5尺）とみることができる。桁行柱間が梁間のそれよりも短く、総長も桁行の方が短いという、やや特異なものである。方位は、1° 20′ ほど方眼北から東偏する。柱掘形は一辺0.4~0.6m、深さ25~35cmの略方形を呈し、身舎と廂とではとくに差は認められないが、妻の柱穴は小型で、深さも約15cmと浅い。柱穴の重複関係から、SB04・SA09よりも新しく、SB01より古い。



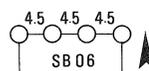
**SB04** 調査区の北辺中央部で検出した、桁行2間以上・梁間2間の南北棟建物。桁行柱間は2.4m（8尺）、梁間総長は4.2m（14尺 = 7尺 × 2）である。方位は、2° 近く方眼北から西偏する。柱掘形は、一辺0.5~0.7m、深さ30~45cmの方形ないし不整円形の平面をもつ。

柱を抜き取ったものと、切り取った後の柱痕跡をもつものの両者があるが、柱径は約16cmである。SB01・SB03よりも古い。



**SB05** 調査区の南端で検出した、桁行4間以上の東西棟建物。北側柱列以外は調査区外となる。確認した柱間は4

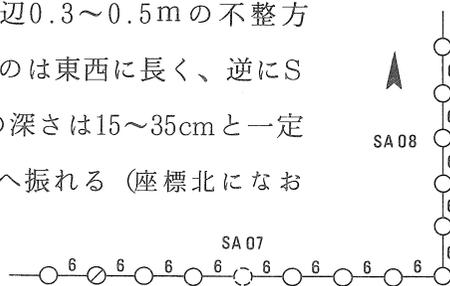
間分7.0m（24尺 = 6尺 × 4）であるが、排水構内にもう1本の柱を想定して、桁行5間（総長8.8m = 30尺 = 6尺 × 5）と考えておきたい。柱掘形は東西0.4m、南北0.3~0.4m、深さ10~25cmの不整形を呈する。径約11cmの柱痕跡を残すものがある。方位は、方眼北からかなり（約4°）東偏する。



**SB06** 調査区の南辺で検出した、桁行3間の東西棟建物。確認したのは北側柱列のみで、塀であった可能性も残るが、いちおう

建物とみなしておく。桁行総長4.0m（13.5尺 = 4.5尺 × 3）を測る。柱掘形は、一辺0.35~0.45m、深さ5~15cmの不整形を呈する。2° 20′ ほど方眼北から東偏した方位を示す。

SA07・SA08 調査区の中央やや南寄りを東西に走る東西塀（SA07）と、それから折れて調査区東部を北へのびる南北塀（SA08）。SA07は8間分15.2m、SA08は5間分9.0mを確認したが、いずれもさらに調査区外へと延びる。柱位置を知りうるものがほとんどないため、厳密な柱間寸法は確定できないが、柱間はかなりばらつきが大きい。したがって、SA07については6.5尺等間に設定された可能性も残るが、一応仕事斑とみて、ともに6尺等間に設定されたものと考えておく。柱掘形は、長辺0.4～0.6m、短辺0.3～0.5mの不整形を呈する。屈折点の柱穴を除き、SA07のものは東西に長く、逆にSA08のものは南北に長い平面を有する。掘形の深さは15～35cmと一定しない。方位は、SA07が0°40′ほど東で南へ振れる（座標北になおせば東偏）が、SA08は座標方眼にほぼ一致する。



SA09 調査区の北辺中央部で検出した南北塀。確認したのは1間分にすぎず、さらに北の調査区外に延びるとみられる。柱間は2.1m（7尺）である。柱掘形は一辺約0.5m、深さ約20cmの略方形を呈し、柱痕跡から柱径は17cmほどと復原される。SB01・SB03と重複し、その柱掘形によって切られる。



素掘溝 調査区のほぼ全域で検出したが、特記されるのは、調査区の北辺から南辺に至る間に規則正しく並ぶ、5本の東西溝である。これらは、西側こそ不規則にとぎれるが、東端は調査区東辺を走る南北溝付近に揃っており、かつその間隔が約3.0m（10尺）であることが注意される。この南北溝と東西溝は、幅30～50cm、深さ10～15cmの明らかに人為的に掘削された溝であり、側壁の立ち上がりも急である。埋土は暗灰色ないし暗灰褐色の砂質土で、少量の黄灰色粘土を交えるものもみられる。奈良時代の柱穴よりも新しく、次に述べる土坑よりも古い。平城京廃絶後の耕地に伴う遺構である。

土坑 おもに調査区の西部で検出したもので、明確なものとしては7基を数えることができる。さしわたし1.1mから2.6mにおよぶ、円形または略方形の平面

をもつ。深さは25～60cmであるが、40～50cmのものが多い。二段に掘削した例もみられる。埋土は暗灰色砂質土を主体とし、少量の黄灰色粘土ブロックを交えるものが一般的である。いずれも素掘溝および奈良時代の柱穴を切る。遺物はほとんど含んでいないが、中世の粘土採掘坑と判断される。

### 3 遺物

奈良時代の遺物がほとんどであるが、大半が包含層など遺構に伴わないかたちで出土したものである。須恵器・土師器はあわせて5箱にすぎず、小片のため図示しうるものはない。瓦は、丸瓦5点2.16kg、平瓦37点4.28kgが出土しているのみで、軒瓦はない。丸瓦に比べて平瓦の数量が多いこと、平瓦の多くが小片であることを勘案すれば、むしろ熨斗瓦が主体とみて、檜皮葺屋根の熨斗棟における使用を想定することができるかもしれない。SB01西南隅柱の礎板として用いられていた建築部材（図45）は、長い角材の一部で、一方の端は折損しているが、他端に切断痕が残る。片面に仕口が認められ、その形状から横架材を転用したものと考えられる。

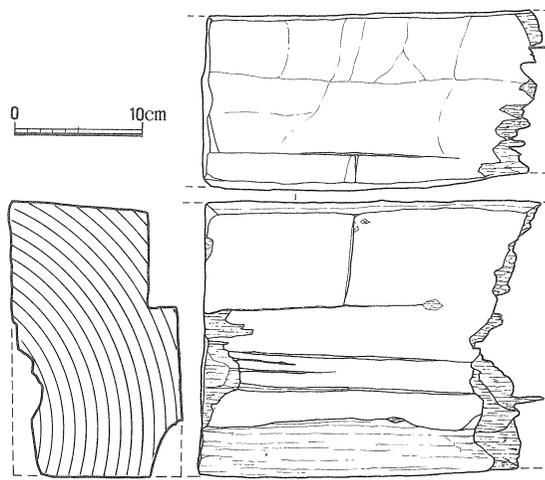


図45 SB01西南隅支柱穴の礎板実測図（1：6）

### 4 まとめ

**条坊復原と占地** 今回の調査地である平城京左京三条二坊四坪は、南が三条大路、北が三条条間南小路に面し、西を東一坊大路、東を東二坊坊間西小路によって画される。これらの条坊道路は、いずれも過去に発掘調査が行なわれており（図46、表9）、その成果から当該坪の四至を復原しておきたい。なお2箇所以上の調査例がある場合は、当該坪およびそれをはさむ形で最も近接するものを選んだ。復原に際しては、まず当該坪に接する側の道路側溝心2点を通る直線を求め、坪の西北（a）・西南（b）・東南（c）・東北（d）におけるそれぞれの交点を算

出した。続いて、幅員の知られる三条条間南小路・東一坊大路・東二坊坊間西小路については、 $a \sim d$  から各々の道路側溝の南北方向の延長線上に三条条間南小路の推定路心  $a_1 \cdot d_1$ 、東西方向への延長線上に東一坊大路の推定路心  $a_2 \cdot b_2$  および東二坊坊間西小路の推定路心  $c_2 \cdot d_2$  を求めた。この  $a_1 d_1$  を結ぶ直線と  $a_2 b_2$  を結ぶ直線の交点が A（三条条間南小路心と東一坊大路心の交点）、同じく  $a_1 d_1$  と  $c_2 d_2$  の交点が D（三条条間南小路心と東二坊坊間西小路心の交点）となる。

三条大路については幅員を直接知りうる資料がないため、 $c d$  を結ぶ直線上で、

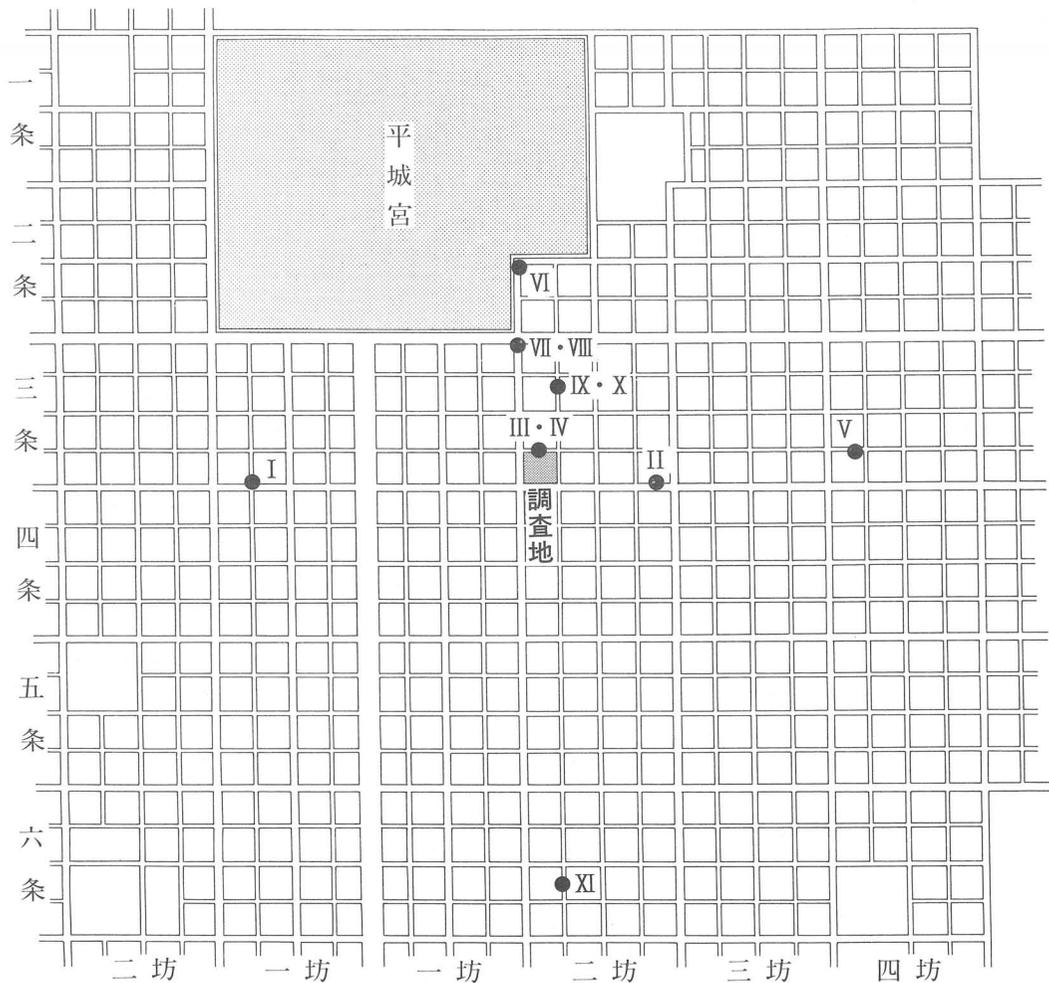


図46 関連条坊遺構調査位置図

三条条間南小路心  $d_1$  から南へ375大尺（133.2m、1尺=0.3552m）の位置に、三条大路路心  $c_1$  を推定した。したがって、三条大路の推定幅員（側溝心々間距離）は、この  $c_1 - c$  間の距離10.77mを2倍した21.54mとなる。次に、道路幅員は一定であるとの仮定に基づき、 $a b$ を通る直線上で、 $b$ から南へ10.77mの位置に、もう1点の三条大路路心  $b_1$  を推定する。この  $b_1 c_1$  を結ぶ直線と、 $a_2 b_2$  を結ぶ直線の交点がB（三条大路心と東一坊大路心の交点）、同様に  $b_1 c_1$  と  $c_2 d_2$  の交点がC（三条大路心と東二坊坊間西小路心の交点）となる。

なお、三条大路幅員復原に際してDを基点としたのは、ここで交わる2本の道路のみが、当該坪の交差点の両側で検出されており、かつ道路幅員自体が狭く、

表9 関連条坊座標値一覧表

点	条坊道路	種別	X座標	Y座標	文献	座標値の典拠
I	三条大路	北側溝心	- 146,545.30	- 18,987.344	1	文献1
II			- 146,537.165	- 17,576.850	2	文献2
III	三条条間南小路	路心	- 146,416.877	- 17,991.400	3	文献3
IV		南側溝心	- 146,420.43	- 17,991.40	3	実測図
V			- 146,417.92	- 16,879.00	4	文献9
VI	東一坊大路	東側溝心	- 145,763.24	- 18,043.13	5	実測図
VII			- 146,039.54	- 18,041.48	6	実測図
VIII		路心	- 146,031.77	- 18,053.52	6	実測図
IX	東二坊坊間西小路	路心	- 146,170.00	- 17,919.75	7	実測図
X		西側溝心	- 146,170.00	- 17,923.45	7	実測図
XI			- 147,940.000	- 17,914.390	8	実測図

文献

- 1 奈良国立文化財研究所「右京三条一坊三条大路の調査（第123-2次）」（同『昭和55年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』）1981年
- 2 奈良県立橿原考古学研究所『平城京左京三条二坊十三坪』1975年
- 3 奈良国立文化財研究所「左京三条二坊三・四坪の調査（第174-10次）」（同『昭和61年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』）1987年
- 4 奈良国立文化財研究所「左京三条四坊四坪の調査（第151-18次）」（同『昭和58年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』）1984年
- 5 猪熊兼勝・森 郁夫「第39次調査 東面南門推定地東側」（『奈良国立文化財研究所年報1967』）1967年
- 6 石井則孝・三輪嘉六「第32次調査 宮城東南隅」（『奈良国立文化財研究所年報1966』）1966年
- 7 本中 真「道路と敷地」（奈良国立文化財研究所編『長屋王邸宅と木簡』吉川弘文館）1991年
- 8 森下恵介「平城京左京六条二坊三坪発掘調査報告」（奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和56年度』）1982年
- 9 西崎卓哉「平城京左京三条四坊十坪の調査」（奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和59年度』）1985年

路心位置に大きな狂いがないとみられることによる。そのためDの座標は、坪の四至のうちでは最も安定した数値であると考えられる。これに比べると東一坊大路は、調査例が今次調査区からかなり隔たった北側に限られる点で、復原の基礎資料としては精度的に及ばない。

以上により、左京三条二坊四坪の四至が算出されたわけだが、

坪の大きさは計画上375大尺（450小尺）と考えられるものの、道路の振れが一定しないため、A-B間133.65m・B-C間132.67m・C-D間133.19m・D-A間132.77mというように、各辺の長さは異なる（対辺側溝心々間距離では、a-b間119.29m・b-c間116.93m・c-d間118.88m・d-a間117.03m）。

また、この作業を通じて得られた三条大路の推定幅員21.54mは、60大尺（72小尺）ないし70小尺にあたりと考えられる。前者の場合、1大尺=0.3590m（小尺に直すと0.2992m）、後方で1小尺=0.3077mという数値が算出される。なお、Cの有意性の検証として朱雀門心（X=-145,994.49、Y=-18,586.31）からの距離を算出すると、国土座標上で南北555.41m・東西668.51mという数値が得られる。

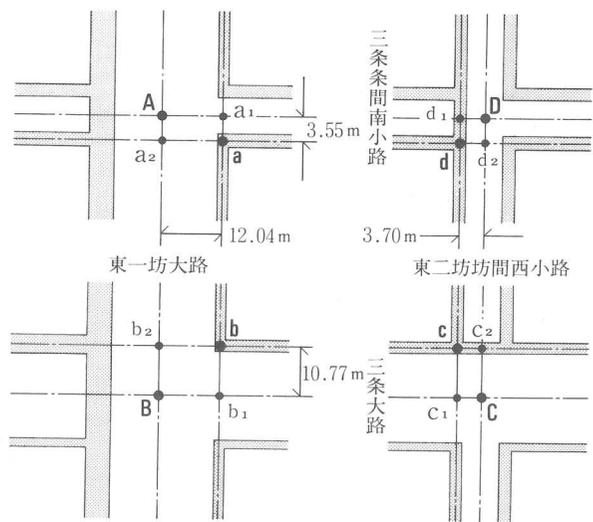


図47 坪四周の交差点模式図

表10 左京三条二坊四坪四周の復原座標値

点	X 座標	Y 座標	点	X 座標	Y 座標
A	-146,417.02	-18,051.26	a1	-146,416.99	-18,039.22
B	-146,550.67	-18,050.47	b1	-146,550.60	-18,038.43
C	-146,549.90	-17,917.80	c1	-146,549.92	-17,921.51
D	-146,416.71	-17,918.49	d1	-146,416.72	-17,922.19
a	-146,420.54	-18,039.20	a2	-146,420.57	-18,051.24
b	-146,539.83	-18,038.49	b2	-146,539.89	-18,050.53
c	-146,539.15	-17,921.56	c2	-146,539.13	-17,917.86
d	-146,420.27	-17,922.17	d2	-146,420.26	-17,918.47

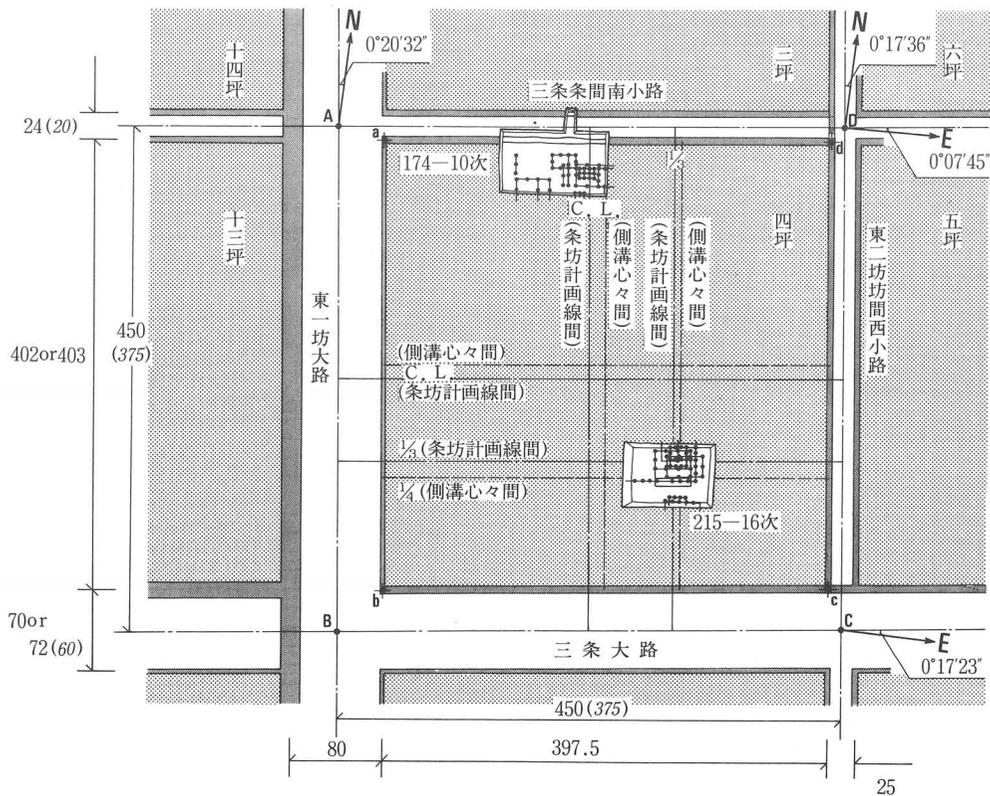


図48 条坊復原と占地概念図 (1 : 2000)  
数字は尺 (斜体は大尺)

これを朱雀大路の振れとして一般に用いられる  $0^{\circ} 15' 41''$  で造営計画上の距離に修正すると、南北558.45m・東西665.97mとなる。この数値を各々の造営計画1570大尺 (1坊分1500大尺+朱雀門心と二条大路条坊計画線間の距離70大尺)・1875大尺 (1坊分1500大尺+1坪分375大尺) で除すと、それぞれ0.3557m (小尺では0.2964m)・0.3552m (同じく0.2960m) という妥当な基準尺長が得られる。ちなみに条坊の振れを、朱雀大路ではなく、Cを通る2本の道路の振れ (三條大路  $0^{\circ} 17' 23''$ 、東二坊坊間西小路  $0^{\circ} 17' 36''$  とほぼ等しい) の平均値  $0^{\circ} 17' 30''$  とすると、造営計画上の距離は南北558.81m・東西665.67mとなる。これによって算出される基準尺長は、それぞれ0.3559m (小尺で0.2966m)・0.3550m (同じく0.2958m) である。

**建物の変遷** ここでは、遺構の先後関係・併存の可否から、建物の変遷について考えてみたい。まず柱穴の重複からは、SB04→SB03→SB01、SB02→SB01、SA09→SB03という先後関係を確認することができる。また平面的な重なりにより、SB01・SB02・SB03・SB04・SA09は、相互に併存したことはありえないし、SB01・SB02はSA07・SA08と併存しえない。したがって、今次調査区内においては、少なくとも5時期の建築遺構が重複していることが知られる。実態の不明確なSA09を除外しても、4時期である。ここでSB01に先行するSB02が、SB04→SB03→SB01という流れのどこに位置づけられるかが問題となるが、SB04が南北棟、SB03がとくに柱間の狭いやや特異な平面形の建物であるのに対して、SB01・SB02は桁行10尺等間の3間×2間の東西棟という点で共通する。SB01は、東西方向に関してSB02を1間西へ寄せた形となっているが、ここでは建て替えの可能性も考慮して、SB02がSB01の直前に位置づけられるものと考えておきたい。なおSA07・SA08は、SB04ないしSB03に（あるいは両者に）伴うものとみられるから、これを宅地内区画として重視すれば、それが撤去されたSB02およびSB01の時期は、少なくともそれが存在した時期に比べて大規模な区画の改変があったことになる。

また坪内の位置関係でいうと、SB01は、その建物心が正しく条坊計画線間での東から三分の一・南から三分の一（小尺でそれぞれ150尺）の位置に置かれていることが注意される。これは、きわめて周到的な配置計画をうかがわせるものといえよう。またSA07は、対辺側溝間心々距離における南から四分の一の位置にほぼ一致しており、またSA08は、その中軸線から東へ80小尺の位置にあたる。なおSA07・SA08は、その坪内の位置からみて、1町規模の宅地の中心部を限る堀であったと考えられる。一方、SB01も、坪内における位置関係と建物自体の規模を考えあわせると、1町規模の宅地に伴うものと見るのがふさわしい。したがって、これとほぼ位置的に重なる同格の建物SB02についても、同様の性格を想定することができよう。つまり、今回の調査成果による限り、左京三条二坊四坪の地は、奈良時代を通じて1坪全体を占める宅地であった可能性が高い。（小沢 毅）

## 5 左京三条二坊九坪の調査 第215—3次

調査地は、長屋王邸の所在地として有名となったそごう百貨店の東側、菰川の東に接する地である。左京三条二坊九坪の北西部に当たる。調査面積は約430㎡。層序は、約80cmの盛り土の下に、耕作土、床土、灰褐粘質土（厚さ約20cmの遺物包含層）、暗赤褐粘質土（整地土）、黄褐粘質土（地山）の順となる。遺構は、一部暗赤褐粘質土上面から掘り込んでいるが、大部分は黄褐粘質土上面で検出した。

**遺 構** 掘立柱建物6棟、井戸1基、古墳時代の溝1条などを検出した。SB01～03の3棟は、一辺約50cmの不整形の掘形を持つ掘立柱建物。SB02・03は桁行3間、梁間2間で方位を等しくする。SB04は、東に庇を持つ掘立柱南北棟建物。南北5間分を検出した。柱間は、桁行1.8m（6尺）、梁間2.4m（8尺）、庇の出3.0m（10尺）である。SB05・06は、1条の柱列を検出したのみであるが、柱掘形の規模などから、掘立柱建物になると考える。SB05の柱間は2.4m（8尺）等間。SB06は、東に庇のつく南北棟掘立柱建物と考えられ、庇と身舎の東側柱筋をSB04と揃える。SE07は、井戸枠を抜き取られた井戸。検出面から底まで2.0mを測る。SD08は、古墳時代の溝。幅約4.5m、深さ約40cmで、調査区内を一直線に流れ両端で屈曲する。布留式の土師器を大量に出土した。自然河川や用水路とは考えにくく、古墳の周濠の可能性も考慮される。

**遺 物** 暗赤褐粘質土やSE07から、奈良時代の土器が大量に出土した。SB04の東側柱筋を中心に部分的な整地土があり、「美濃国」刻印のある須恵器杯B蓋が出土した。瓦は、軒丸瓦7点、軒平瓦9点があり、6721Fの彫り直し6721Fbが新たに出土した。

（杉山 洋）

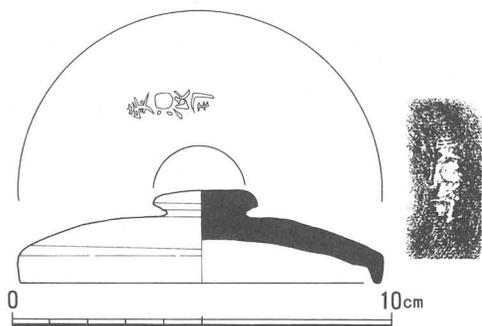


図49 「美濃国」刻印須恵器（1：2）



図50 軒平瓦6721Fb（1：4）

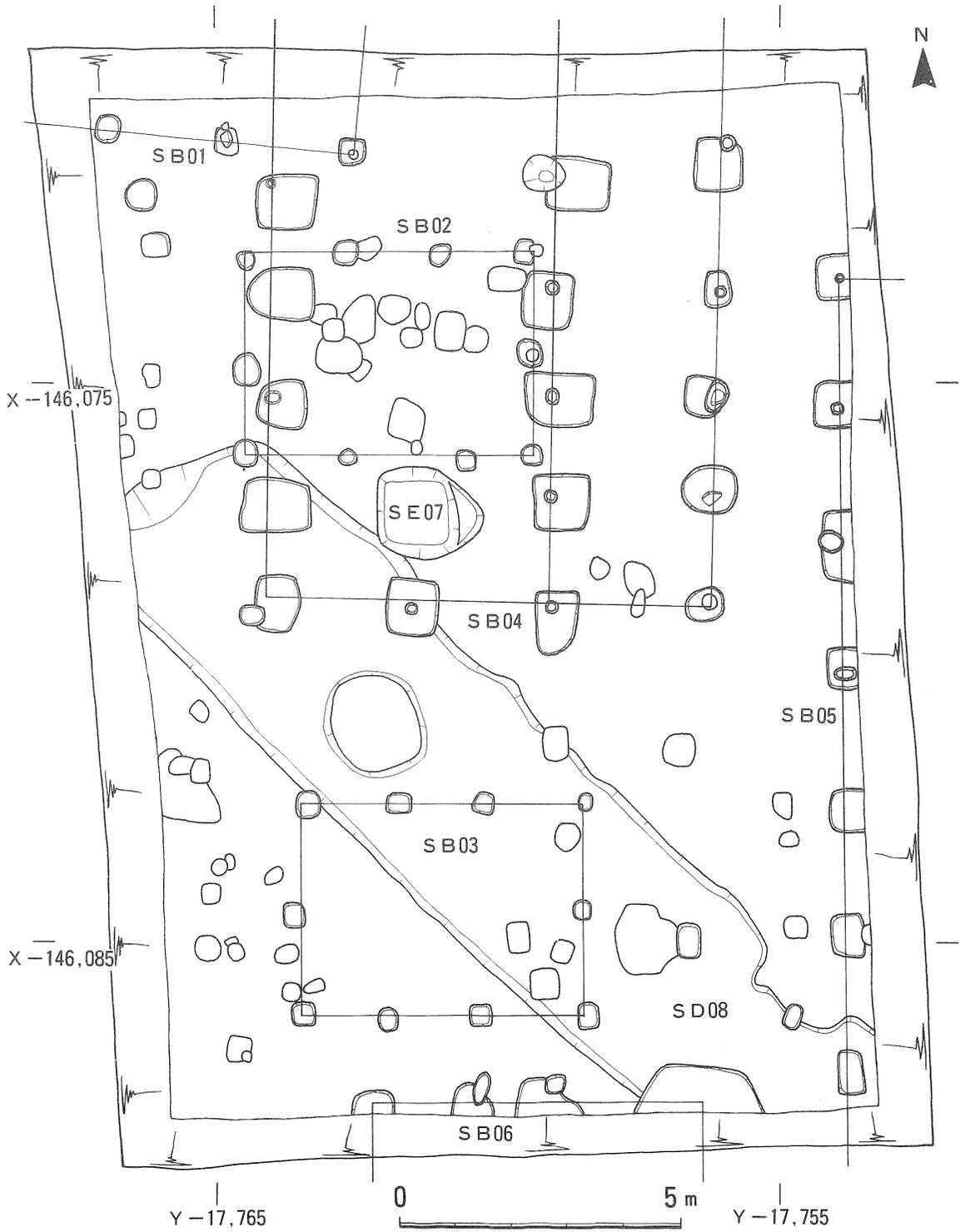


図51 第215-3次調査遺構図 (1:100)

## 6 西一坊大路の調査 第215-4次

店舗建設に伴う事前調査である。調査地は、奈良市二条大路南5丁目384-1、382-2にあり、阪奈道路と主要地方道奈良大和郡山斑鳩線との交差点に面する。調査は1990年7月7日から7月13日まで行なった。調査面積は142㎡。

調査地は平城京西一坊大路にあたり、右京三条二坊二坪の東側、三条条間路に近い。基本的な土層は上から①盛土、②耕土、③暗灰色砂質土、④黄灰色砂質土（炭、鉄滓混じり）⑤黄灰褐色砂質土（瓦器片を含む）、⑥紫褐色粘土（地山）の順に堆積する。地表下約1mで地山に達する。また、調査区西端から東へ2mの間は灰色の砂層が広がり、調査区西端付近から西へは秋篠川旧流路の堆積土層があるらしい。

この調査では、奈良時代、12～13世紀頃、および12～13世紀より新しい時期に属する遺構を検出した。奈良時代の遺構としては、西一坊大路SF01とその東側溝SD02がある。東側溝は西肩のみを確認した。大路西側溝は調査区内では見つからず、大路の幅員などは確認できなかった。

12～13世紀頃の遺構には、細い南北溝13条と井戸1基（SE03）がある。井戸は井戸枠が抜き取られていた。これらは埋土中に12～13世紀頃の瓦器等を含んで

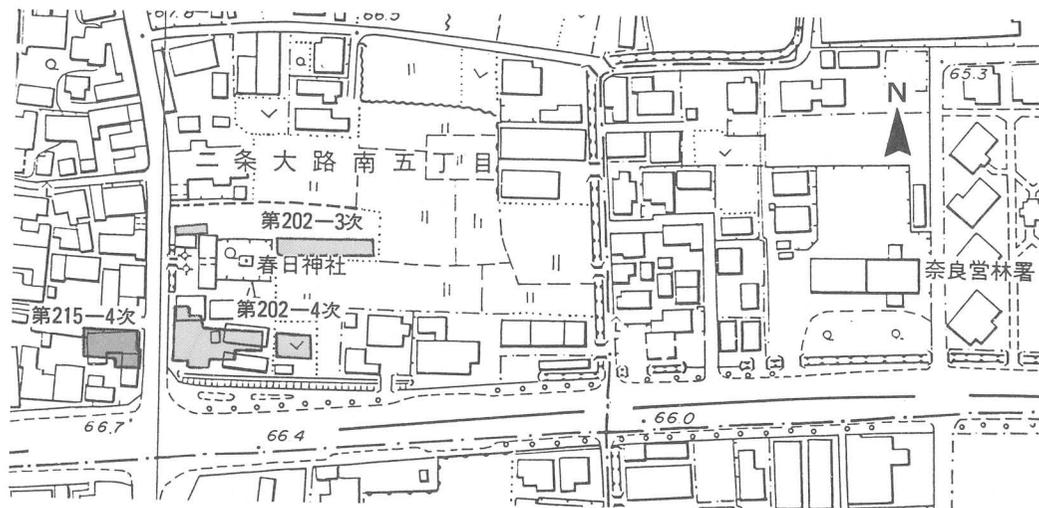


図52 第215-4次調査位置図（1：2500）

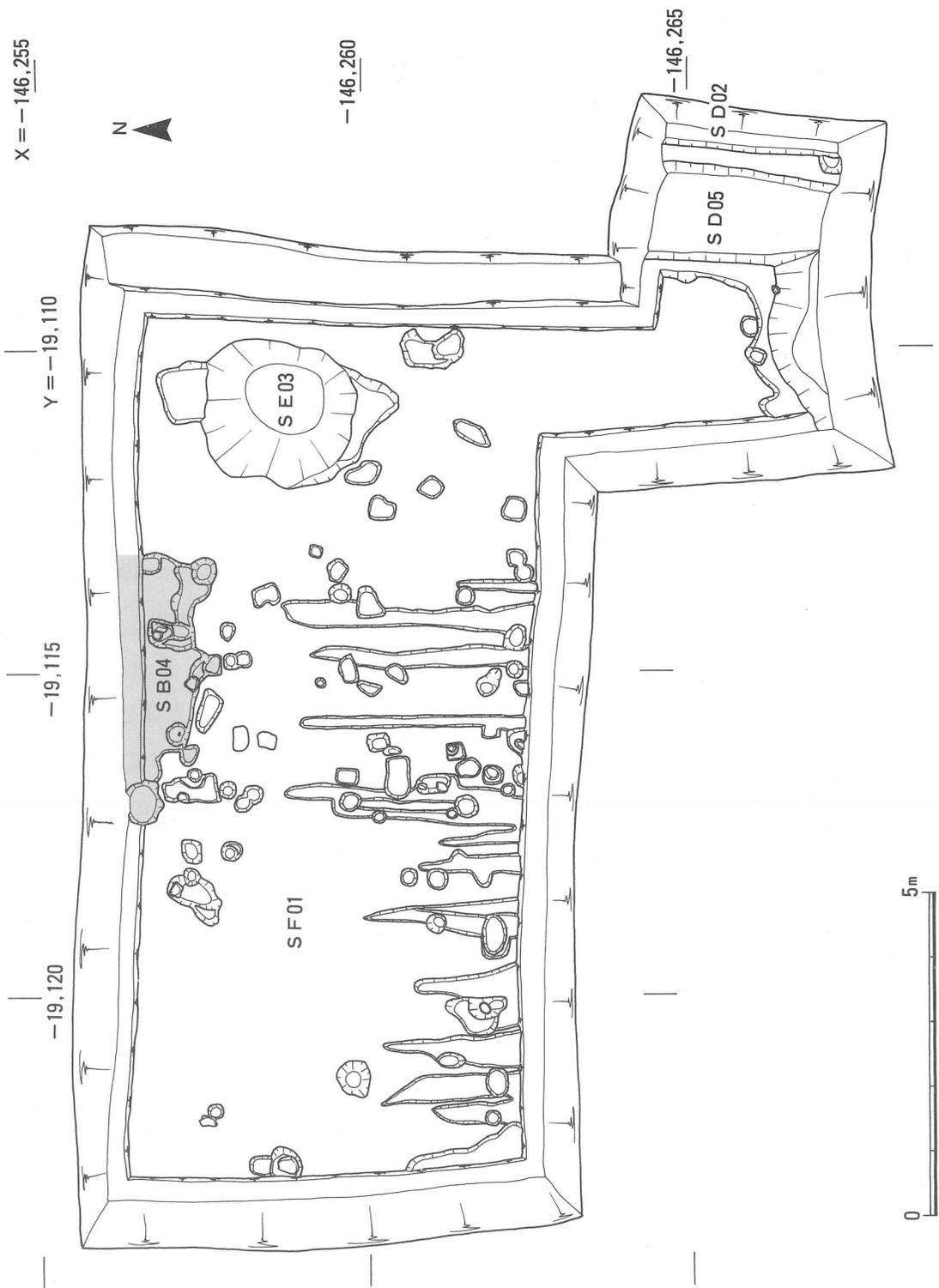


図53 第215-4次調査遺構図(1:100)

いた。これらの南北溝や井戸の上層で、小穴群や竪穴状の建物跡SB04、南北溝SD05を検出した。竪穴状の建物は大部分が調査区外のため全体の構造は不明であるが、円形ないし方形に竪穴を掘り、周囲に柱を数本ないし10本前後めぐらせるものである。簡単な差しかけ小屋程度のものであろうが、内部から鉄滓が出土し、床面が比較的堅くしまっていた。また、西一坊大路東側溝に重なるようにして鉄滓を多量に含む南北溝SD05がある。

出土遺物には奈良時代の軒平瓦（6711A）1点、丸・平瓦少量、瓦器少量、中世以降の軒丸瓦1点、<sup>ふいど</sup>鞆羽口数点、鉄滓などがある。鉄滓は、底部の丸い、いわゆる椀形滓も出土しており、ほとんどが木炭を噛み込んでおり、すべて鍛冶滓と見てよい。

平城京西一坊大路に関しては、少なくとも東半部では旧秋篠川の氾濫による破壊を受けていないことがわかった。調査範囲が狭いために大路路面と東側溝の一部が見つかっただけで、大路の幅員や西側溝の位置などは確認できず、今後の課題として残る。また、今回検出した竪穴状の建物跡SB04などは、出土状況からみて小鍛冶工房に関連するものと推定できる。1989年度に実施した第202-3・4次調査では、近世ないし近代の小鍛冶工房に関連する遺構、遺物が見つまっている（『1989年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1990年）。今回の調査区はこの202-3・4次調査区に近接しており、層位から見てもふたつの小鍛冶工房の遺構は、同時操業とは言えないにしても、強く関連していると言えよう。いずれにしても、小鍛冶の遺跡がこの付近一帯に広がっていることはまちがいない。

（小池伸彦）

## 7 薬師寺講堂・北面回廊の調査 第218次

### 1 はじめに

薬師寺では1954年以来、数次にわたる調査を行なってきた。これまでに、金堂、西塔、中門、回廊、南大門、僧坊、食堂、十字廊、経蔵を発掘調査し、創建当初の薬師寺の中心伽藍の様相が明らかになっている。そのうち、1985年までの調査の成果は、奈文研『薬師寺発掘調査報告』1987年（以下、『薬師寺報告』と略称）としてまとめ、公刊している。今年度は、北面回廊の柱配置の確定と講堂の規模確定を主眼として、調査区を現在の講堂の東側に図54のごとく設定した。調査面積は700㎡である。調査は1990年7月5日に開始し、8月25日に終了した。

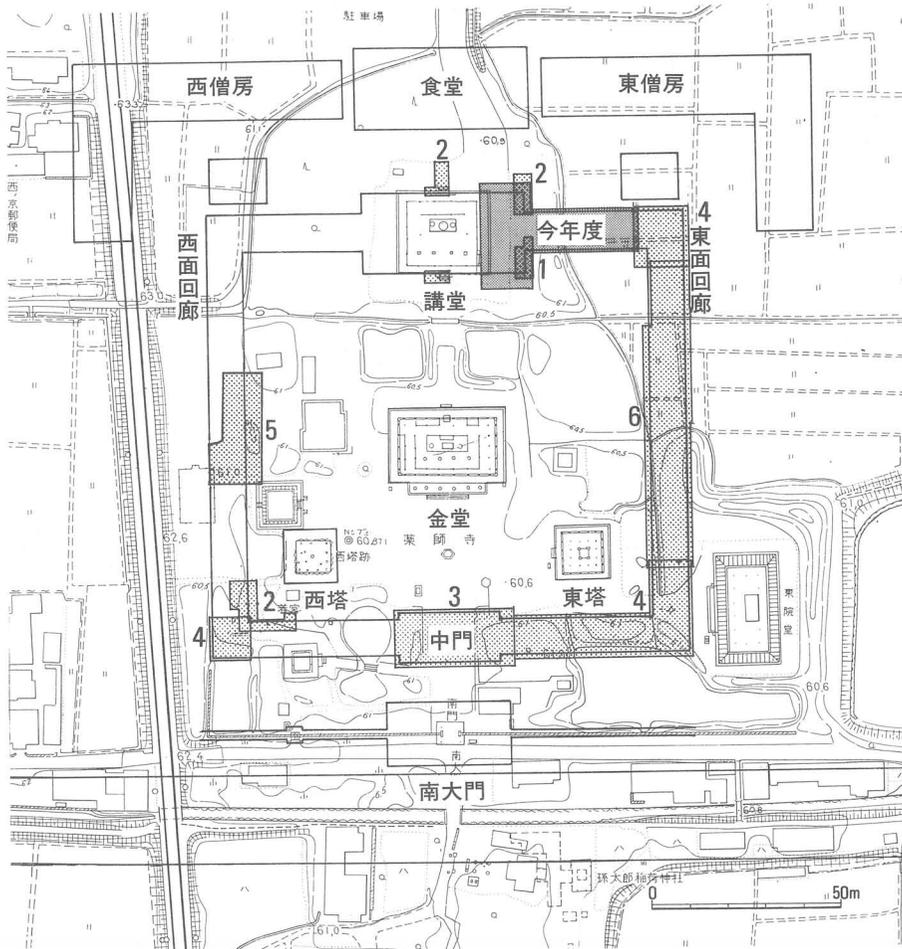


図54 第218次調査位置図 (1:2000)

講堂については1968・69年に調査を行ない（図54）、基壇規模が確定している。この調査では講堂基壇の東北隅、東南隅と北面中央部を検出しており、伽藍中軸線で折り返し、基壇は東西42.5m、南北22.2mと復原している。平面は桁行7間、梁間2間の身舎に庇、裳階が付き、身舎桁行中央5間を15尺、端間を12.5尺、身舎梁間柱間寸法を15尺とし、庇の出を12.5尺、裳階の出を6.25尺と推定している。なお、今回の調査区は1968・69年の調査区を含む形で設定した。

文献によると講堂は天禄4年（973）に火災のために焼失し、すぐに再建されたが、享禄元年（1528）には再び火災のため焼失した。その後講堂は長く再建されず、安政3年（1856）になって現在の講堂が再建されている。

回廊については、6次にわたる調査を行なっている。東北隅、東南隅、西南隅と東面回廊の全面、南面回廊の東半、西面回廊の一部を調査し（図54・表11）、以下の見解を得ている。

① 回廊は、当初、単廊で計画したが、礎石を据えた後に計画変更を行ない、同じ位置で複廊を造営している。単廊計画時の伽藍計画寸法は回廊心々間で、東西400尺、南北362.5尺である。複廊計画時の伽藍計画寸法は回廊心々間で、東西392尺、南北362.5尺である。

② 『薬師寺報告』では単廊の柱間寸法は桁行、梁間とも12.5尺であるとした。一方、『1989年度平城概報』では、東面回廊の桁行柱間寸法は、伽藍計画寸法の南北長を363尺と考え、363尺を29間で等間割した、12.52尺であるとしている。

表11 回廊調査一覧

区	年度	調査場所	文献
1	1968	東面回廊 北面回廊	1) 4)
2	1969	東面回廊 北面回廊	1) 4)
3	1982	南面回廊 中門	2) 4)
4	1985	東面回廊 西面回廊 南面回廊 北面回廊	3) 4)
5	1988	西面回廊	5)
6	1989	東面回廊	6)

1) 杉山信三・松下正司・阿部義平「薬師寺の最近の発掘調査」（『仏教芸術』74 1970） 2) 奈文研「薬師寺中門の調査」（『昭和57年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1983） 3) 奈文研「薬師寺回廊の調査」（『昭和59年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1985） 4) 『薬師寺発掘調査報告』（奈文研学報第45冊 1987） 5) 奈文研「薬師寺西面回廊の調査」（『昭和63年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1989） 6) 奈文研「薬師寺東面回廊の調査」（『1989年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』）

なお、北面回廊に関して『薬師寺報告』では、柱間数を、講堂取り付き部とコーナーを含めて11間と推定している。

③ 複廊の梁間柱間寸法は10尺等間とする。桁行柱間寸法は基本的には13.5～13.7尺である。東面回廊では南北伽藍計画寸法を単廊計画時の長さを踏襲しているため、等間で割り付けることができず、3間分の柱間寸法を長くして調節している。南面回廊では桁行柱間寸法は13.5尺であるが、中門取り付き部分の2間は12尺とする。基壇は凝灰岩壇上積基壇とし、基壇幅は34尺である。

## 2 遺 構

検出した遺構は北面回廊と講堂の東端部である。遺構面は全体に東が低く、西ほど遺構の残りがよい。とくに、発掘区中央付近（Y = 19,475）より東は一段下がっており、削平が著しい。一方、講堂部分の遺構面は浅く、現代の整地土直下である。また、現在の講堂基壇東部で基壇化粧石をはずして調査を行なった結果、現基壇土内に当初の基壇土が残っていることが判明した。

**講 堂** 講堂の遺構として、基壇地覆石、雨落溝、階段、身舎・庇・裳階の礎石据付掘形および抜取穴を検出し、北面では南北道路敷を検出した。

身舎・庇の礎石据付掘形は径約2mの隅丸方形で、一部には抜取穴がみられ、根石の残存する据付掘形もある。当初基壇土の残りの良い発掘区西北隅の掘形の断面を観察すると、礎石は基壇土構築の途中段階で据付掘形を掘って据え付け、その後、さらに基壇土を積んでいる状況がみられる。礎石据付掘形は根石据付位置より30cm～40cm深く掘り、土を充填しながら根石を据えている（図57）。裳階礎石据付掘形は、遺構面の最も残りのよい発掘区西北隅（現講堂基壇内北端）でのみ検出した。掘形は東西80cm、南北70cmと小さく、礎石は抜き取られているが掘形の底で根石を検出した。この掘形の底のレベルは身舎・庇の妻を検出した遺構面より高く、他の場所では削平されたと考えられる。なお、断割調査の結果、礎石据付掘形は一度しか掘られておらず、礎石を据え替えた痕跡はない。

柱間寸法は礎石が残っておらず正確には確定し得ないが、1尺を0.296mと仮定すると、身舎桁行方向柱間寸法を15尺等間、梁間方向を17尺等間、庇の出を10

尺ととることができる。裳階の出は、6尺、または6.5尺のいずれとも考え得るが、『薬師寺報告』で推定している6.25尺として考えておく。この成果を伽藍中軸線で折り返すと、桁行方向の不明部分は75尺となり、この部分は桁行5間、柱間寸法15尺等間となる。したがって、講堂の規模は桁行7間、梁間2間の身舎の四面に、出が10尺の庇が付き、さらに四面に裳階が付くと復原できる（図56）。

基壇に関しては、北面と南面で凝灰岩地覆石を検出しており、講堂基壇化粧は凝灰岩壇上積であった。地覆石は幅32.5cm、厚さ34cmで、長さは50~90cmと一定していない。最も残りの良い地覆石をみると、地覆石上面に幅16.5cm、深さ1cm弱の溝があり、この溝に羽目石を立てたと考えられる（図55）。南面・北面の地覆石外面間の距離が22.5mであるので、基壇南北幅は76尺と復原でき、庇柱筋からの出は11尺となる。基壇東端は正確に確定し得ないが、雨落溝等の状況より、庇柱筋からの基壇の出が南・北面と同じ11尺と考えられる。したがって基壇東西規模は147尺と推定される。

南・北面では、身舎端間の正面に階段の痕跡を検出した。北面では石階耳石下の地覆石の一部を検出し、南面では石階前面の踏石の一部を検出した。階段の出は南面が1.1m、北面が0.7mである。階段の東端は身舎妻柱筋に揃うが西端は不明である。おそらく身舎妻柱筋より一筋西の柱筋に揃い、階段幅は15尺と推定される。なお基壇地覆石は階段位置にも通っており、基壇本体を築成後に階段を取り付けたと考えられる。

雨落溝は総体的に残りが悪く、溝として検出し得たのは北面回廊取付部の南入隅部のみである。溝幅は約60cmとし、西肩に部分的に凝灰岩の残欠があり、東肩は凝灰岩で化粧していたと考えられる。庇妻柱筋・雨落溝心間は約4.5m

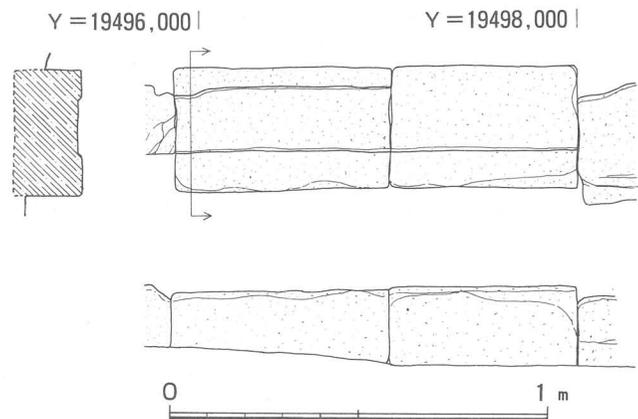


図55 講堂北面地覆石詳細図（1：20）

(15尺)と復原できる。また、北面では部分的に東西带状に広がる小礫敷を検出した。北庇柱筋から小礫敷の心までは15尺となり、妻側の庇から東雨落溝までの距離と等しくなる。したがって、この小礫敷は北雨落溝の底に敷いた小礫と考えることができる。なお、南面に関しては階段が推定雨落溝位置より若干外に張り出しているが、この部分での処理方法は後世の削平のため不明であった。また、北面でも雨落溝が後述する南北石敷通路と交差するが、この位置に小礫敷がなく、また集水管設置による攪乱のため、新旧関係もしくは処理方法は不明であった。

**講堂北面石敷通路** 講堂の北面で、南北に延びる石敷遺構を検出した。1969年の調査では、講堂北面中央で階段、および北方の食堂へ続く通路を検出しており、この遺構も食堂へ続く通路と考えられる。石敷通路は北面の階段の正面に位置し、東西10尺幅に人頭大の川原石を敷きつめており、東・西端には見切り石のごとくに石が一行に並んでいる。遺構の東端は北面の階段の東端、すなわち身舎の妻柱筋に揃う。しかし、西端は柱筋には揃わず、通路の中央と柱間の中央は揃わない。石敷通路の上面には、中古の整地土が覆っており、さらにその上層に焼土・炭化

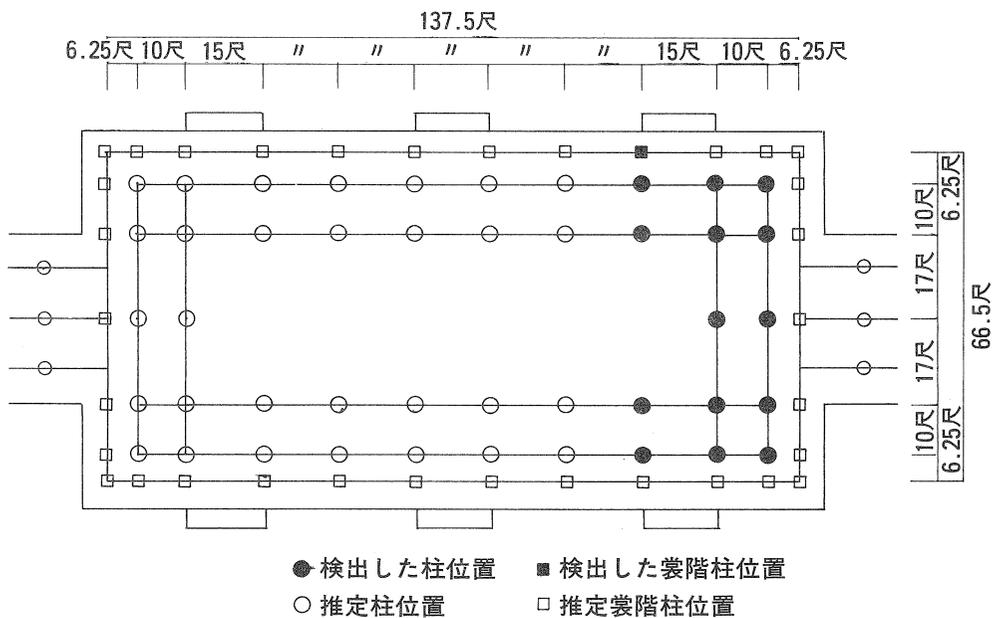


図56 講堂推定柱配置図

物層があった。焼土・炭化物層は享禄火災直後の投棄面、整地層は天禄再建時のものと考えられ、石敷通路は天禄再建後には使用されなかったと思われる。

**北面回廊** 北面回廊においても、単廊の礎石を据えた後に計画変更され、複廊を造営したことを確認した。図58中の $Y = -19,475$ より東側は前述のように削平が著しく、複廊、単廊双方の礎石据付掘形の痕跡がようやく残っている状況である。一方、西側は基壇土がある程度残存しており、単廊から複廊への計画変更時に単廊の礎石を抜いた後の積土に覆われているため、単廊の柱位置は検出できず、複廊の礎石据付掘形および抜き取り穴のみを検出した。ただし、講堂取付部で部分的に掘り下げて、単廊の礎石据付掘形を一か所検出している。単廊の柱間寸法は桁行、梁間とも12.5尺である。『薬師寺報告』で推定しているように、裳階妻柱から東北隅入隅までの10間を12.5尺等間で割り付けている。複廊の柱間寸法は梁間10尺等間とし、桁行方向は東北隅入隅から西へ7間分は13.5尺とする。ただし、講堂取付部分の1間は、裳階妻柱筋から、その東の複廊の柱までは26尺とする。

基壇の遺構として、発掘区東端の南面・北面と講堂取付部の北面で凝灰岩地覆石を検出し、講堂取付部の南面と北面で玉石列を検出した。基壇幅は南北両面の地覆石が残っている発掘区東端では、南北約10.0m、すなわち34尺となるので、回廊側柱心からの基壇の出は7尺となる。地覆石は幅21cm、高さ21cmとし、長さもほぼ60cmに統一している。講堂取付部南面の玉石列は礎石を抜き取った外側に並べており、雨落溝の側石の二次的な改修と考えられる。また、北面の玉石列は、凝灰岩の外面に合わせて、平坦な面を上に向けて並べており、従来の見解通り当初雨落溝化粧が凝灰岩であるとする、この石列は二次的な溝底石となる。なお、雨落溝化粧の外表面は、南面・北面とも集水管が埋設されており調査不能であった。

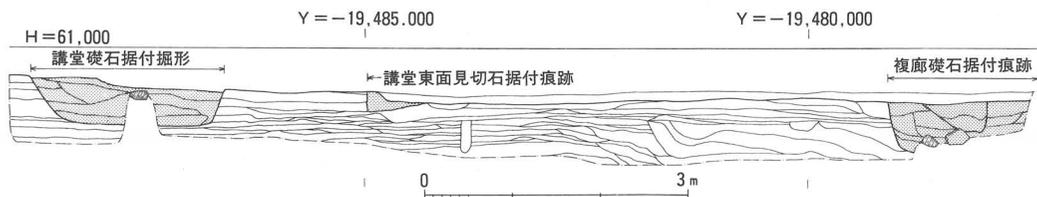


図57 講堂・回廊土層断面図

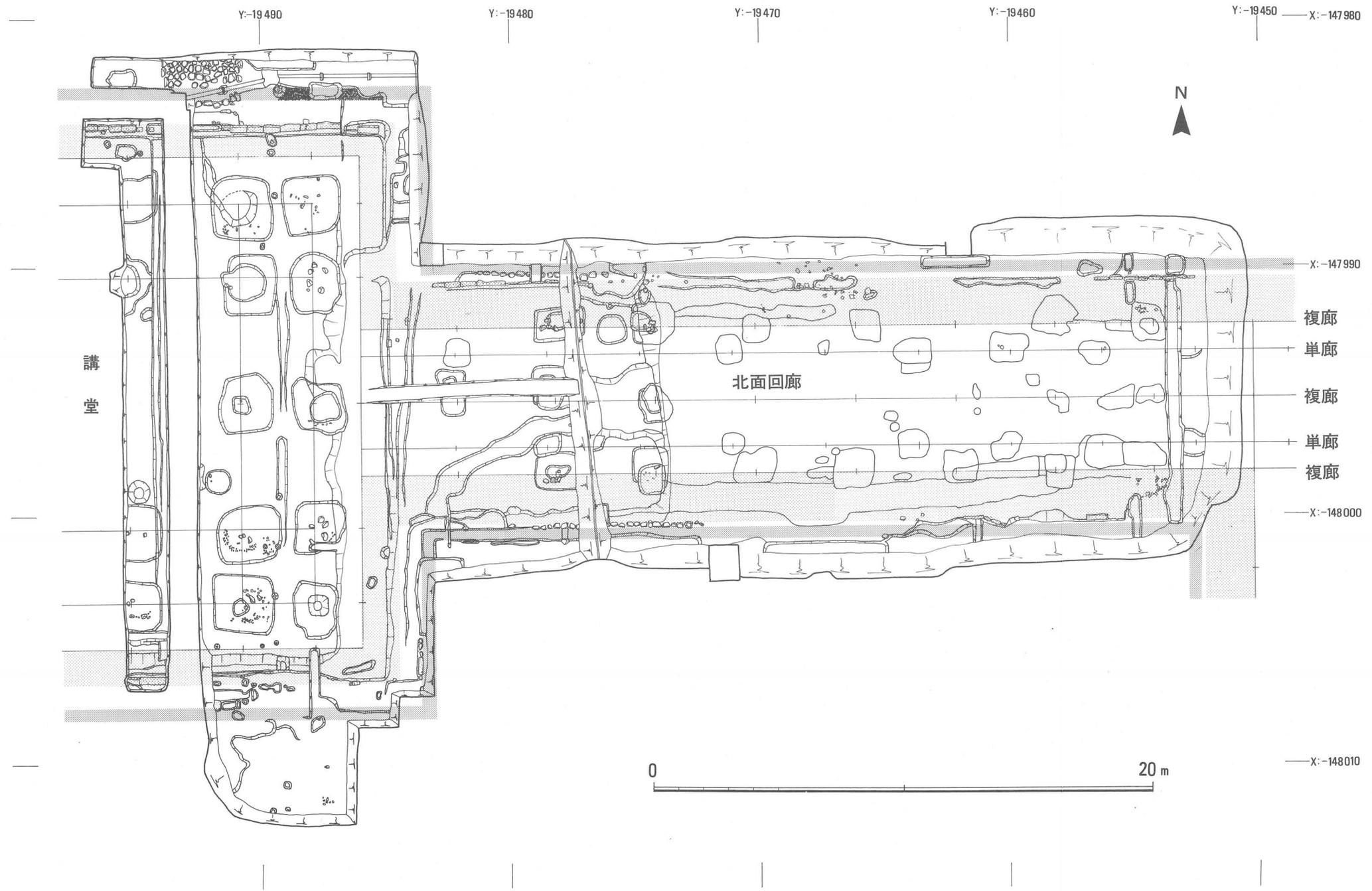


图58 第218次調査遺構図 (1 : 200)

講堂・北面回廊取付部 先述のように、複廊の柱間は講堂取付部で26尺と広い。南面回廊では、桁行柱間寸法は基本的に13.5尺であるが、中門取付部分では12尺を2間としており、北面回廊も講堂取付部では柱間寸法のやや狭い2間（13尺等間、または13.5尺と12.5尺）としたと考えられよう。しかし、この26尺の間には礎石を据えた痕跡は検出できなかった。複廊の礎石据付掘形の底は遺構面から約60cmの深さにあり（図57）、26尺の間に礎石を据えたとすれば、なんらかの痕跡が残るはずである。これは、講堂から1間目の柱をやや高い位置に据えたために、その痕跡が削平されたためと考えることができる。つまり、講堂取付部では、講堂から2間目の柱筋から講堂に向かって基壇上面が上がり、回廊と講堂の基壇高の差を、この位置で基壇面をスロープ状にして処理していた可能性がある。

また、講堂基壇東妻位置に凝灰岩を南北に据えた痕跡を検出し、凝灰岩1個体を原位置で検出した。講堂東の見切りの位置にあたるが、その高さは回廊地覆石の高さとあまり変わらず、本来ならば基壇内に埋もれるレベルにあり、当初のものとは考え難い。したがって、二次的な仕事、つまり回廊基壇が崩壊した時期に、講堂東端の見切石として据えたものと推定できる。

### 3 遺物

出土遺物のほとんどは、瓦埴類である。軒瓦は創建時の瓦が中心だが、講堂礎石据付掘形から小型軒丸瓦6307C 1個体がほぼ完形で出土した。この瓦の年代は、『薬師寺報告』では伽藍がほぼ整備された天平10年（738）以降としている。

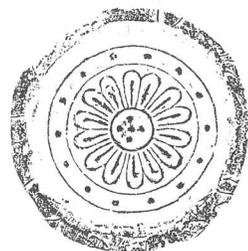


図59 軒丸瓦6307C  
(1:4)

表12 第218次調査出土瓦集計表

軒丸瓦			軒平瓦			道具瓦		丸瓦	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数	重量kg	551.30
6 1 3 5	A	1	6 6 4 1	G	9	隅切平瓦	1	点数	3,741
6 2 7 6	A	28		H	8				
	E	1		I	1				
6 3 0 7	C	1		K	1				
型式不明		2		M	1				
平安時代		13		不明	2				
平安末以降		38	6 6 6 3	F	1	平瓦		重量kg	2,073.75
			型式不明		1			点数	20,073
			平安時代		19	文字瓦		種別不明	
			平安末以降		36	刻印瓦	点数	重量kg	3.60
軒丸瓦計		84	軒平瓦計		81	—		点数	56

#### 4 まとめ

**講堂の平面形式** 講堂は四面庇にさらに裳階がつく形式で、身舎は桁行7間梁間2間、桁行柱間寸法は15尺等間、梁間柱間寸法は17尺等間である。庇の出は桁行、梁間方向ともに10尺とし、裳階の出は6.25尺である。したがって全体として裳階を含めると、桁行13丈7尺5寸、梁間6丈6尺5寸となり、裳階を含めないと桁行12丈5尺、梁間5丈4尺となる。『薬師寺縁起』には「重閣。七間四面 在裳階 高一丈三尺六寸。長十二丈六尺。廣五丈四尺五寸。」とあり、裳階を含めない平面規模は『薬師寺縁起』に記載された規模にほぼ等しい。桁行方向の柱間寸法については、『薬師寺報告』にあるように全体を12.5尺の倍数として計画したとすれば、図56で示した柱間寸法で整合する。なお、梁間方向に関してはさきに示したように17尺と考えることもできるが、柱の中心が確定し得ないので、『薬師寺縁起』の梁間規模に合わせて身舎梁間寸法を17.25尺とも、『薬師寺報告』の推定規模にあわせて17.5尺と復原することも可能である。今後、講堂西側の調査によって、妻側の基壇端が正確に確定すれば、庇妻柱からの基壇の出を算出し、その数値を南面・北面（凝灰岩地覆石によって基壇端が確定している）にも適用して、梁間寸法を決定することが可能であるが、今回の調査のみでは梁間規模は確定し得ない。梁間規模はとりあえず上記のように推定し、正確な数値は講堂全面調査の後に確定することとしたい。

今回の調査成果から復原される講堂平面の全体規模は『薬師寺報告』の推定とほぼ等しい。しかし、『薬師寺報告』では庇の出を12.5尺と推定しているが、今回の調査によって庇の出は10尺であることが判明した。つまり、講堂は推定よりも身舎が大きく、庇の出が極端に狭い建物であった。このように、庇の出が身舎の柱間寸法に比べて極端に狭い例は奈良時代以前の建築様式であるとの指摘もあり、平城京の建物としては前時代的な様式とも考えられ、講堂が何故このような形式であったかが注目される。

階段の位置は、今回の調査で身舎端間の正面で検出することができ、1968年の調査では北面中央間でも検出しているので、6ヶ所に設けていたと復原できる。

**講堂の創建年代** 薬師寺の平城京における造営時期については不明な点が多いが、『扶桑略記』には東塔が天平2年(730)に建立された記事があり、ほぼこの頃には造営が終了していたと考えられている。また、天平7年(735)には大般若経の転読が行なわれており、この頃には伽藍は整っていたと考えられる。しかし、今回の発掘調査では講堂の礎石据付掘形から軒丸瓦6307Cが出土し、『薬師寺報告』の瓦編年に従うと、講堂は天平10年以降に造営を始めたことになり、その完成はさらに数年後となる。また、基壇土の構築状況(図57)から、講堂と回廊は同時に基壇が築成されたと考えられ、回廊の完成も下がる可能性がある。瓦編年に従い講堂の完成時期を恭仁京遷都以降の時期と考えるのか、それとも瓦編年を再考すべきかは今後の検討課題である。

**講堂の沿革** 史料によると講堂は創建後、天禄4年(973)に火災のために焼失したがすぐに再建され、享禄元年(1528)に再び火災のため焼失する。その後講堂は再建されず安政3年(1856)になって現在の講堂が再建される。今回の調査では、講堂の礎石据付掘形は各柱位置に一つしかなく、礎石を据え替えた痕跡はなかった。したがって、天禄4年焼失後の再建講堂は、当初の礎石上に再建されたと考えられる。なお、現在の講堂は当初規模の梁間規模をほぼ踏襲しているものの、桁行規模は大幅に縮小しており、基壇は当初の基壇土の東西部分を削り、基壇土を積みたしている。

**北面回廊** 本年度の調査においても、回廊が単廊から複廊へ計画変更されていることを確認した。単廊に関しては、『薬師寺報告』で推定しているように、桁行柱間数は11間で、桁行・梁間とも12.5尺等間であった。

複廊の柱間寸法は13.5尺、梁間10尺等間とし、講堂取付部の2間を13尺等間もしくは13.5尺と12.5尺としている。そして、講堂と回廊の基壇高の差は、取付部分の2間の間でスロープ状に処理していたと推定される。(島田敏男)

## 1 はじめに

本調査は、百貨店の増床計画に伴う事前調査として計画した、4次にわたる調査の第3次に当たる。昨年度の調査では、西隆寺東面回廊の規模を明らかにすると共に、寺域の東北隅を確認し、西隆寺建立以前の遺構をも検出している(平城宮第209・210次調査)。今回は、回廊東北隅の検出を主目的に、第209次調査区の北に接する地に約600㎡の調査区を設定した。調査区南半部は、耕作土上面で北半部より約50cm

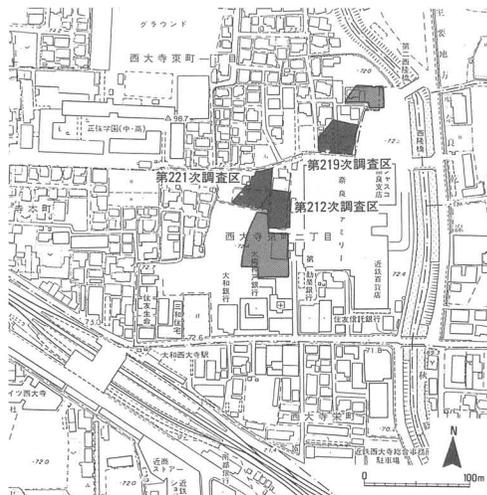


図60 第212・219・221次調査位置図

下がっており、この地下げのため遺構の残りは悪い。北半部では、百貨店建設工事に伴う攪乱が著しく、回廊SC01東側の土坑のほとんどは攪乱坑である。北半部では、深さ約40cmの旧床土下の黄褐粘土が遺構検出面となる。南半部には、北西から南東にかけて奈良時代以前の自然河川の流路があり、この部分の遺構検出面は、灰色粗砂である。

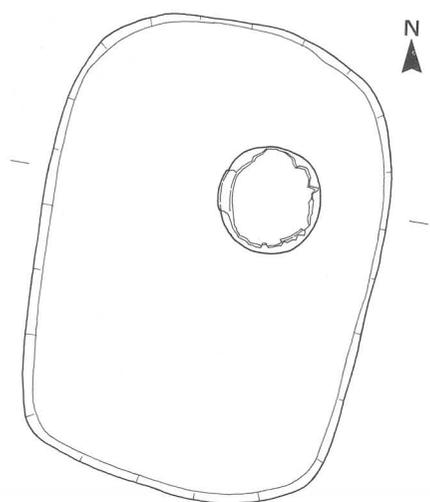
## 2 検出した遺構

西隆寺の回廊東北隅および雨落溝、掘立柱建物1棟、掘立柱塀3条、溝3条、井戸1基、土坑、および土器埋納遺構などである。これは、縄文時代、古墳時代、奈良時代に分けられる。以下、時期ごとに記述を行なう。

**奈良時代の遺構** SC01は西隆寺回廊の東北隅である。遺構の残りは悪く、礎石据付掘形の底が深さ約20cm前後でかろうじて残るにすぎない。基壇化粧は、その痕跡も検出できなかった。SD11は、東面回廊の東雨落溝。奈良時代の遺構面が西南隅に部分的にしか残っていないため、南北5mほどを検出したのみである。SX12は、東面回廊を横断する暗渠の東端部である。



図61 第212次調査遺構図 (1 : 200)



H = 71,000 m

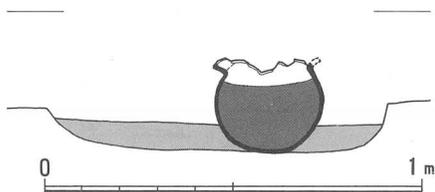


図62 土器埋納遺構実測図 (1 : 20)

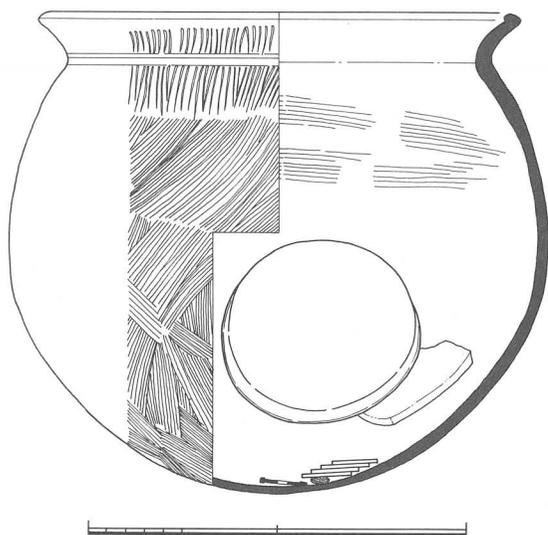


図63 錢貨の埋納状況 (1 : 4)

SD03と04は、東西方向の素掘溝。SD04は北肩のみが残る。SD03の心からSD04の北肩まで約6mを測り、西隆寺造営以前の右京一条二坊九・十坪の坪境小路の可能性が考えられる。

SA06・07は当初掘立柱建物と考えたが、方位を異にし、掘立柱塀と考える。SE08は小型の浅い井戸。横板組井戸枠一段の中に、平瓦を円形に並べ、中に削りもの桶を置き水溜とする。

**土器埋納遺構** 回廊SC01東北隅中央の礎石据付掘形の底から、土器器甕Aが正位の状態出土した(図62)。内部には土が充満していたが、慎重に内部の土を除去したところ、甕の底部で銅銭5枚と付着した布片、土師器皿C1個体、土師器甕の大破片3個を検出した(図63)。銅銭は、和同開珎、萬年通宝、神功開宝各1枚、銭文不明銭2枚である。

当初の埋納状態を復原すると、甕の内部に布に包んだ銅銭を置き、その上に土師器皿Cをかぶせ、土師器甕破片で蓋をしていたものと推定される。出土状況から判断して、これは回廊建立に当たって礎石据付掘形底部に置いたもので、その上に礎石を据えたと考えられる。

**古墳時代の遺構** SA09とSB10は、柱穴掘形から古墳時代の須恵器が出土した。方位も東西方向から振れているので、古墳時代のものであろう。

**縄文時代の遺構** 調査区北端の溝SD02は、北東から南西にかけての直線的な斜行溝で、埋土の底近くから縄文時代晩期の船橋式土器が出土した。溝の断面形態は逆台形で、弥生時代の同様の形態の溝（たとえば京都大学教養部構内A P 22区の溝。京都大学埋蔵文化財調査研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』1984年 9・10頁）の例からみて、人為的に掘削した溝である可能性が高い。

### 3 遺物

**奈良時代の遺物** 今回の調査区内には整地土や包含層がなく、出土遺物の量は少ない。軒瓦は、軒丸瓦3点、軒平瓦5点が出土したのみである。井戸SE08からは、水溜め外側に使用していた平瓦が12枚出土した。半裁したものが多い。

土器の出土は、きわめて少ない。楕円形の浅い土坑SK05からは、須恵器横瓶2個体、壺L 2個体、壺K 1個体が出土した。いずれも内面に漆が付着する。

金属器は、銅銭7枚が出土した。そのうち5枚は、土器埋納遺構からの出土。ほかに、井戸SE08から和同開珎が2枚出土した。

**古墳時代の遺物** 6世紀中頃の土器が出土したが、いずれも小片である。

**縄文時代の遺物** SD02から、突帯文土器の深鉢1個体が出土した。口縁部から胴部にかけての破片で、全周の約四分の一ほどが残る。口縁端部からやや下がった位置に1条、胴部に1条の計2条の突帯を施し、突帯上に篋状工具でD字形の

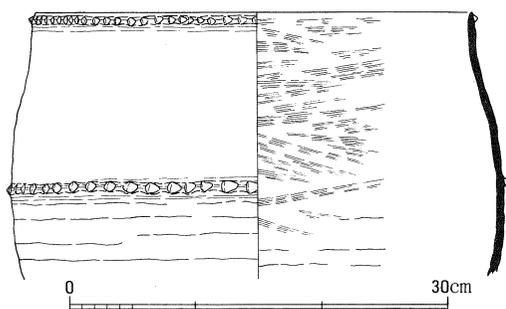


図64 突帯文土器実測図（1：6）

刻み目を入れる。口唇部に刻み目は入れない。外面は、2条の突帯間は、巻貝条痕を行なった上になでによる調整、胴部の突帯以下は不調製で、粘土紐の継目が残る。内面は巻貝条痕で調整。色調は暗褐色で、胎土に角閃石は含まない。晩期末葉の、船橋式土器である。

#### 4 まとめ

今回の調査では、回廊の東北隅を検出した。これによって、東面回廊の規模が推定されるとともに北面回廊の位置が明らかになった。なお、北面回廊は西接する第221次調査でも確認した。

また、土器埋納遺構を検出したことにより、回廊建立に伴ってなんらかの祭ごとが存在したことが推定できる。本土器埋納遺構は、Ⅲ-2に掲載したように、土師器甕内の銭貨周辺の土壌の脂肪酸分析の結果では胞衣壺と推定されている。しかし、出土状況等からみて、本土器埋納遺構は西隆寺建立時のもので、回廊建立に伴って埋納されたものであることは明らかであり、地鎮具と推定している。その性格については、脂肪酸分析の結果の理解も含めて、将来の本報告作成時に、慎重に検討しなければならない。（杉山 洋）

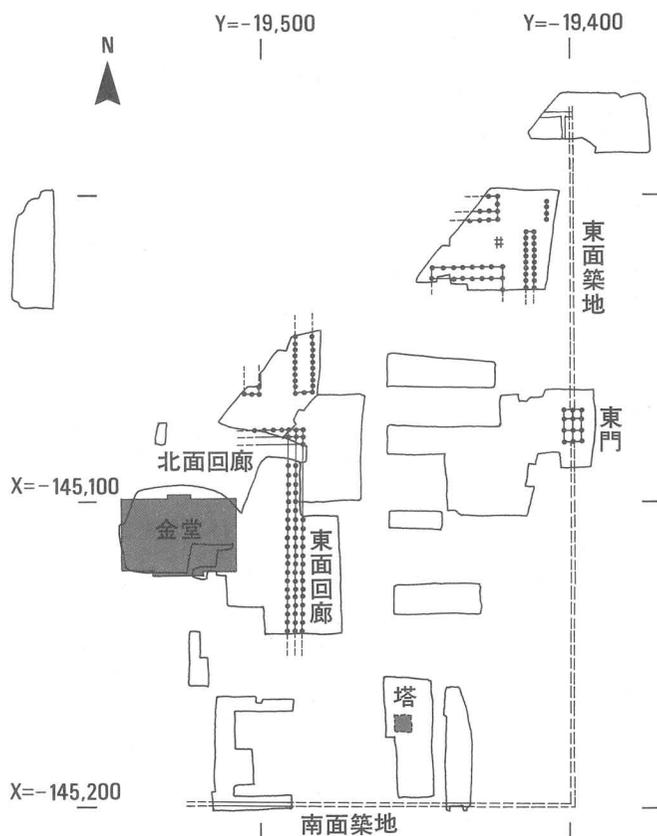


図65 これまでに検出した西隆寺の遺構（1：2500）

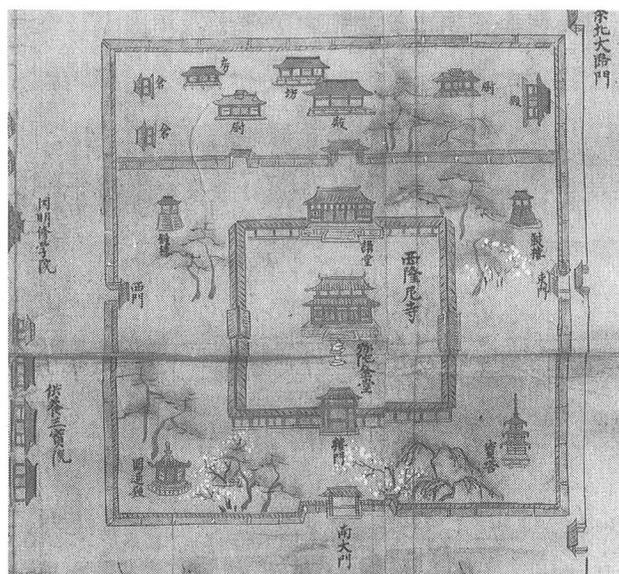


図66 西大寺伽藍絵図に描かれた西隆寺

## 9 西隆寺旧境内の調査（2） 第219次

第209次調査以来行なってきた、百貨店改築に伴う事前調査の最終区である。調査は、1990年11月16日に開始し、一時中断を経て1991年3月29日に終了した。調査面積は、1030㎡である。

調査地は平城京右京一条二坊九坪にあたり、西隆寺寺地としては東北隅部分になる。調査区は2軒分の宅地及び道路敷であったところで、その下水施設などによって部分的に深く掘削を受けた箇所があるが、おおむね遺跡の保存状況は良く、古墳時代から平安時代にまで及ぶ、相当数の遺構を検出することができた。奈良時代以降の遺構は、主として旧耕土・床土直下の古墳時代遺物包含層、及び調査区内を北から南東に通る旧流路の砂層上で検出した。

### 1 遺 構

**古墳時代** 調査区の南西から東北方向へ、幅3.2m、深さ0.4mの斜行大溝SD09が通り、埋土に多量の土器を含む。土器の年代は6世紀で、良好な資料がある。この溝に平行、あるいはほぼ直交する斜行溝があり、これも同時期のものであろう。また、周辺の小穴群も、この時期に属する遺構となる可能性が高い。

**奈良時代前半（A期）** 掘立柱建物2棟と、掘立柱塀1条がこの時期に属する。調査区東南の建物SB06は、南北棟で、桁行5間、2.65m（9尺）等間。梁間も2.65m（9尺）2間である。柱掘形は一辺1～1.2mのやや南北に長い長方形を呈し、深さは遺構検出面から35～50cmである。柱痕跡は直径25cm前後あり、東側柱はB期の長廊状遺構SC05と多く重複する。

調査区西方の建物SB10は、東西棟で、桁行4間以上、西半は発掘区外に延びる。柱間は桁行2.65m（9尺）等間、梁間2.65m（9尺）2間であり、柱筋は方眼方位より北で西へ2度弱振れる。柱掘形は一辺約1mの略方形を呈し、深さは60cm前後である。いずれの柱穴にも明瞭な抜き穴が認められ、その中に黄色土が混入しているのが一つの特徴である。これは、SB06にも認められることから、SB06・10は同時期と推定した。

SB10の東北方の南北塀SA13も、柱筋が同傾向の振れをもつ。SB06の北約4.2mをへだてて始まり、発掘区内では2間分を検出し、さらに北へ続くと推定される。柱間は2.7m（9尺）等間である。以上、この時期に属する遺構は、いずれも9尺の柱間を持つことで一致した結果となった。年代は、次期との関係から、西隆寺造営以前の奈良時代前半～中ごろにあてる。所用の遺構の特定はできないものの、後述の井戸SE08の廃絶時に投入された瓦に奈良時代前半のものがあり、西隆寺以前の遺構の存在を推定し得よう。

**奈良時代後半・平安時代（B期）** 西隆寺の造営と時を同じくして成り、同寺北東部に一院を形成していたと推定される遺構群である。発掘区東方の長廊状遺構SC05は、礎石建ちで梁間2.7m（9尺）、発掘区の南端から北に9間分を検出した。桁行の柱間寸法は1.9m等間で尺の完数值にはならず、6尺5寸と推定し得るほか、ある距離を等分した結果とも考えられる。遺構の形状、深さ共に一定せず、礎石据付掘形と抜取り穴を混合して検出したものと考えられる。9間目以北については、その場所が旧流路にあたり検出が困難であったこともあって、より長く延びていた廊であった可能性も否定し得ない。また一方で、検出遺構通りに完結した、梁間1間の住房のような建物となることも考えられる。もし単廊ということが今後の調査で確定をみれば、院の施設として重要な知見となる。

調査区の南端の東西棟建物SB07A・Bは桁行7間の建物で、北側および北入側柱を検出した。当初掘立柱の建物（A）を、同規模、同位置に礎石建ち（B）に改めている。桁行の柱間は2.95m（10尺）等間、庇の出も10尺である。身舎妻柱は東側のみが発掘区内にあるが、柱穴は他に比してきわめて浅く、遺構として疑問が残る。当初の柱掘形は一辺0.9～1.2mの略方形で、柱痕跡は径30cm。柱を抜き取った後に根石を置き、礎石を据えている。このような手法の実例として法隆寺伝法堂があり、一般的な住宅建築というより

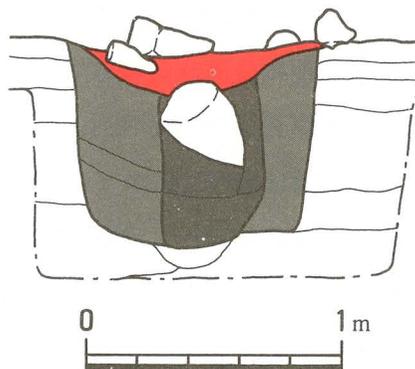


図67 SB10柱穴断面図（1：30）

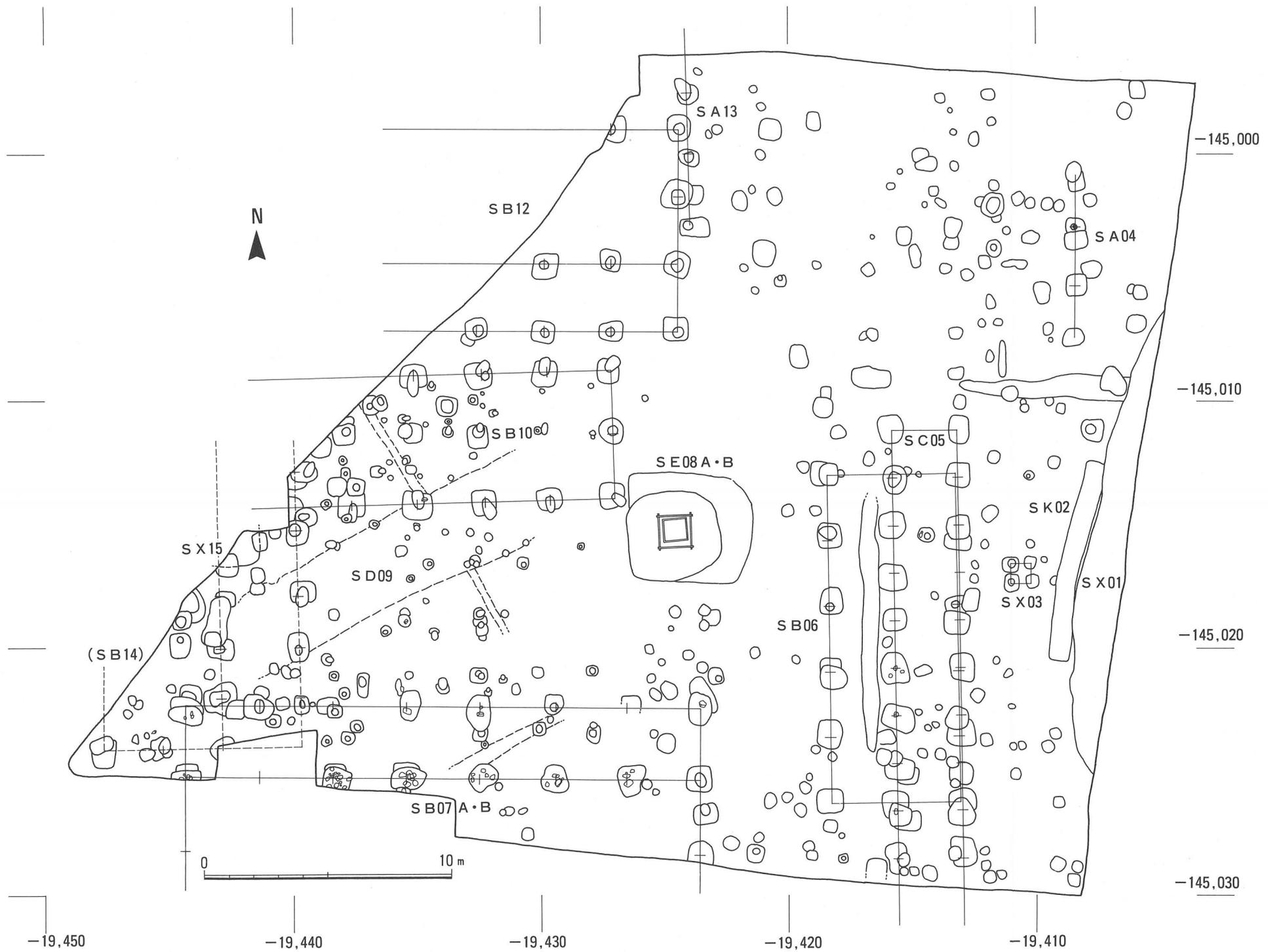


図68 第219次調査遺構図 (1 : 200)

むしろ仏堂的性格の濃いものと考えられる。これは、長期の存続のあかしであり、その規模からも院の中心的な建物と推定される。調査区北西のSB12は、桁行3間以上、東西棟南片庇付の掘立柱建物である。柱間は、桁行・梁間共に2.65m（9尺）等間であり、柱間10尺のSB07とは柱筋が一致しないが、仮にこれも桁行7間と仮定すると、建物の東西中軸線が一致する関係にある。また、両者の妻柱間の距離が26.7m（90尺）となることにも計画性が認められ、同時期と推定した。

SB07・12の東辺中間にある井戸SE08 A・Bは、当初横板の、いわゆるせいろ組と呼ばれる上質の構造であったもの（A）を、ある時期に内側に縦板を添え立てて改修している（B）。深さは2.4m。SE08Bの井戸枠に用いられた板材は、四面とも扉板の転用であることが判明し、西隆寺の建築の様相をうかがうに足る貴重な資料となった。また、調査区西端で、SB07の東西中軸線に対してSE08と東西対称の位置に、井戸とおぼしき深い掘形の一部SX15を検出しており、2棟の建物の間の広場に2基の井戸を東西対称に配している可能性が生じた。

B期の終末は、建物の柱抜き穴や井戸SE08の埋土から出土した土器の年代から、10世紀後半と考えられる。史料から知られる西隆寺の存続とほぼ時を同じくすることがわかり、およそ2世紀にわたって存続したと推定されるのである。

なお、調査区西南隅にSB14があり、現段階では桁行5間以上、南北棟掘立柱建物の東南部分と推定している。柱掘形はSB07・10の双方と重複し、時期的に

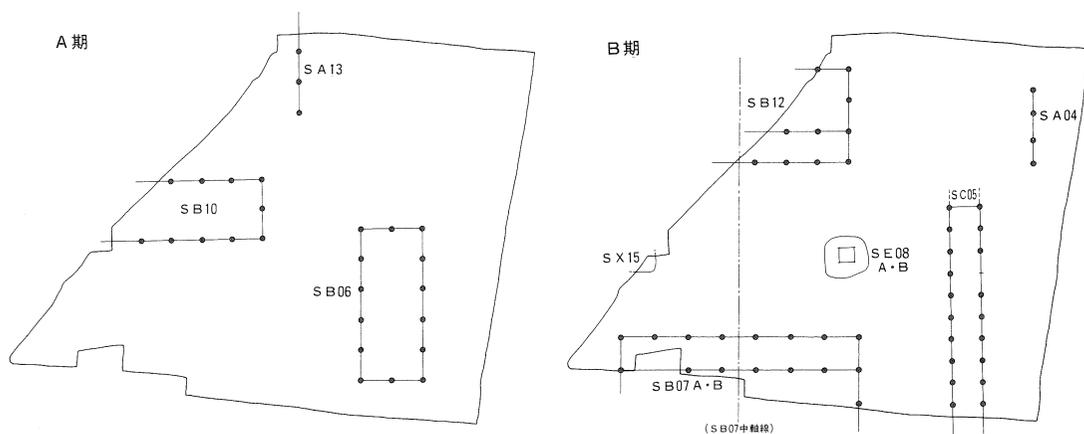


図69 遺構変遷図

はその中間の位置となる。しかしながら、発掘区の制約からこの遺構の解釈はまだ確定的ではなく、複数の遺構である可能性もあり、具体的な規模、性格については今後の調査の進展を待ちたい。この他に、発掘区の東辺に近世以降の大土坑SK01、時期不明で旧流路を横断するように幅1m、長さ8.3mにわたってある土坑SK02、4本の柱からなる小構造物SX03などがあり、また北東隅には3間の掘立柱塀SA04がある。SA04の掘形の一つには柱根が残り、また掘形に重複する土坑からは西隆寺式軒平瓦2枚が出土した。

## 2 遺物

遺物は瓦罫類、土器が主であるが、井戸SE08から若干の木製品および延喜通宝が出土した。遺構の項でも述べたように、SE08Bの井戸枠は扉板の転用であって、木製品として出色の資料であるので、項を設けて詳述する。（松本修自）  
土器 古墳時代から平安時代までの土器が出土した。ここでは、10世紀後半の良好な一括資料である、井戸SE08出土土器（図70）について述べる。

SE08Bの井戸枠抜取穴、井戸底、掘形から整理箱3箱ほどの土器類が出土した。掘形には遺物は少ないが、9世紀後半代の緑釉陶器片が出土し、井戸の上限を物語る。抜取穴と井戸底の土器類は、ほぼ同型式で、土師器の小皿（1～6）、杯（7）、罌釜（18～21）、黒色土器A類の椀（8～17）と、他に黒色土器B類の椀2個体分の破片がある。土師器の杯と皿は、すべてe手法による調整で2群に分かれる。I群（1～4）は、砂を多く含み、暗灰褐色を呈し、II群（5～7）は、緻密で砂をほとんど含まない胎で淡灰色を呈し、極めて薄く作られている。

黒色土器A類の椀は、口縁部外面上端のみをよこなでし、以下の部位は調整しないものが大半を占めるが、15だけは口縁部上端部に篋削り調整を施す。内面の篋磨きは雑で、口縁部の磨きを省略する例（14）もある。同様に、外面の磨きも雑で磨かないものもある。16・17は、底部外面に墨書があるが、判読できない。

井戸底からは、延喜通宝も出土しているが、これらの土器類は、銭貨の年代よりも新しく、天禄4年（973）の火災で焼失した薬師寺西僧坊床面土器よりやや新しい時期に位置付けられよう。（巽淳一郎）

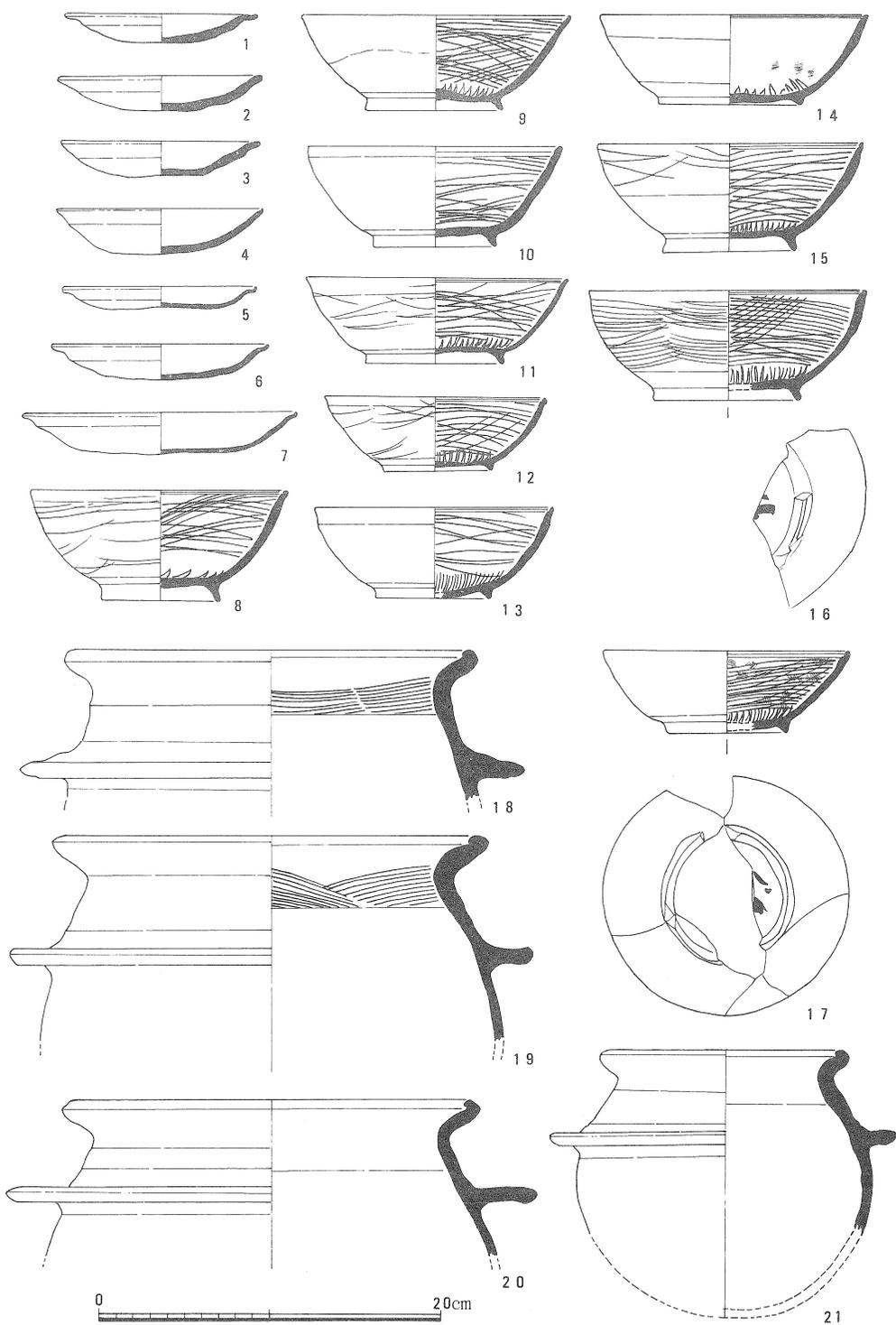


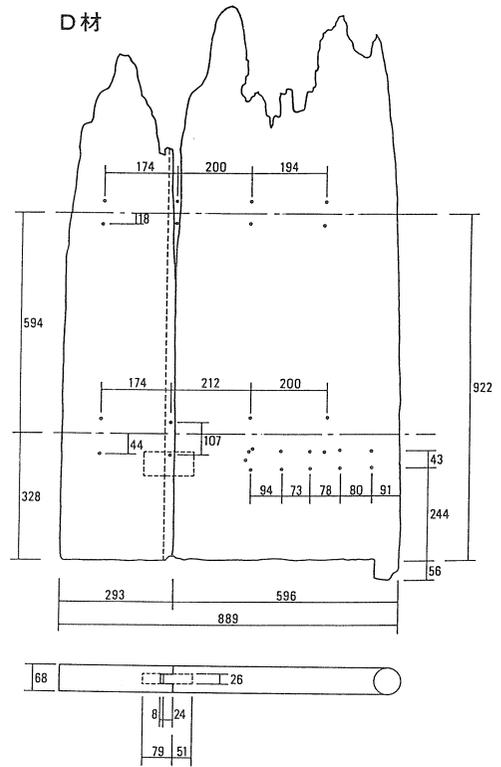
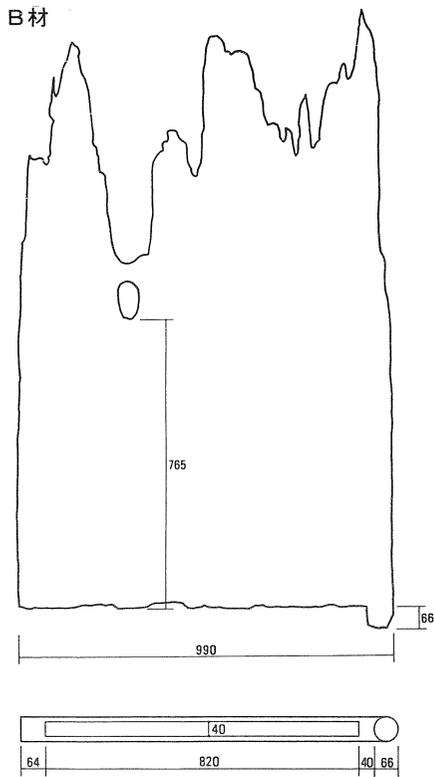
图70 SE08出土土器 (1 : 4)

扉板 井戸SE08Bの井戸枠に転用していたもの。材の上半は腐朽していたが、下半ではいずれも当初の幅を完存していた。各材は、片側を丸く仕上げ、下端に造り出しの軸を残す。幅の寸法からA～C材とD材の2種に分類できる。D材のみは他と細部手法も異なり、別の建物か違う部位に用いていたものと推定される。各材の所見を述べると、まずA・B材は同一規格で厚さ7cm弱の一枚板から成る。ただしA材は軸部分を破損したとみえ、その部分を切り取って後補している。木口に埋め込みの端喰<sup>はしぼみ</sup>をもつのは法隆寺五重塔所用の扉と同等の手法で、貴重な実例<sup>ほんざねはぎ</sup>を加えた。C材はA・B材と同幅であるが、ほぼ同一寸法の4枚の板を本実矧<sup>ほんざねはぎ</sup>で接合し、一枚の扉板に仕立てている。D材はやや幅がせまく、2枚の板をC材と同様に本実矧<sup>ほんざねはぎ</sup>で接合し、横棧<sup>さん</sup>と八双金物の釘跡を共に残す点も他と異なる大きな特色であるが、端喰はない。総幅889mmは3尺、2枚の板幅はそれぞれ2尺と1尺、また横棧の間隔も2尺に復原され、きわめて規格的な造りであることも注目<sup>な</sup>に値する。八双金物の形状は、法隆寺東院夢殿の旧扉金具や、唐招提寺金堂所用のものに類似した、おだやかな出八双に復原されるが、およそ扉板の半分にも及ぶ長さをもつ点は常識を覆すものであり、当代に扉の意匠として八双金物が活用されたことがうかがわれる。また、これらの扉板の他に、中方立<sup>なかほうだて</sup>とも呼ぶべき材の断片が出土しており、古代の扉口の工法の一例として貴重である。

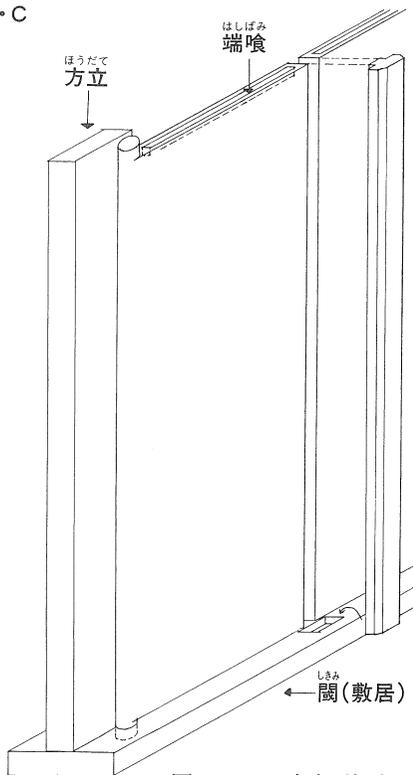
今回の発見は、井戸への転用材として平城宮内外を通じて初めての例である。法隆寺金堂、五重塔所用のものと、その規模や端喰の技法が一致し、一枚板のものとして年代的にもそれらに次ぐ古さをもつこと、さらに複数の材を集成する手法や、八双金物、横棧など細部技法の知見も得ることができたことの意義は大きいといえよう。また、その規模と意匠から、西隆寺内の堂に用いていたものであろうことはほぼ確実であり、往時の伽藍を偲ぶよすがともいべきものである。

表13 SE08出土扉板計測表

部材	位置	構成材数	残存長(m/m)	総幅(m/m)	軸	横棧	端喰	八双金物
A	北	1	1,780	995	(欠)	×	○	×
B	東	1	1,596	990	○	×	○	×
C	南	4	1,497	993	(欠)	○	○	×
D	西	2	1,475	889	○	○	×	○



A・B・C



D

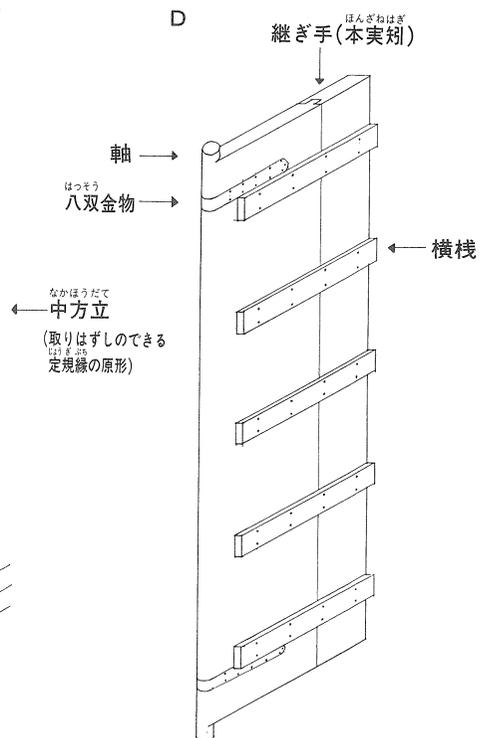


図71 SE08出土扉板実測図(上 1:20)、復原図(下)

表14 第219次調査出土瓦集計表

軒丸瓦			軒平瓦			道具瓦	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
6125	A	1	6652		2	面戸瓦	1
6134	A	1	6663	A	8	鬼瓦	1
6225	A	4		F	1		
6235	B	1		不明	1		
	C	11	6685	C	1		
	I	2	6691	D	1		
6236	D	1	6702	B	1	丸瓦	
	F	1	6732	K	1	重量kg	150.26
	不明	1	6739	A	2	点数	927
6273	B	1	6761	A	10		
6275	D	1	6764	A	5		
6291	A	1	6775	A	1		
6311	F	1	型式不明		1		
6348	A	2				平瓦	
型式不明		5				重量kg	923.41
軒丸瓦計		34	軒平瓦計		35	点数	6,733

瓦埴類 軒瓦はほとんどが井戸SE08の廃絶時に投入されたもので、表14のように西隆寺所用の軒丸瓦6235と軒平瓦6761が最も多数を占める。軒丸瓦6225と軒平瓦6663がこれに次いで多いのは注目されよう。また、長廊状遺構SC05の西辺の南北溝および北東の東西溝には瓦片が非常に多く、SC05が瓦葺であったことがうかがわせる。

### 3 まとめ

今回の第219次調査と周辺の調査の結果から、以下のことが指摘できる。

- (1) 礎石建物をはじめとする、西隆寺の一院を形成していたとみられる建物群を検出した。これは、中世以降の西隆寺絵図には明確な形で対比できるものは描かれていない。同様の建物は第221次調査でも検出しており、伽藍の中核部分以外は絵図が必ずしも正確な姿を伝えていないのではないか、という問題が生じた。
- (2) 井戸SE08の廃絶年代から、西隆寺関係の遺構の終末が10世紀後半と考えられることが判明した。これは、文献史料による知見とも一致する。
- (3) 西隆寺造営以前にさかのぼる、右京一条二坊九坪の宅地の遺構を検出した。周辺の調査ではこの時期の遺構はこれまで検出しておらず、平城京の宅地を考える上で、貴重な知見となる。
- (4) 井戸SE08から豊富な遺物が出土した。特に、井戸枠に転用していた扉板は、西隆寺の建物が現存しない今では、当時の建築を知るために重要なものである。また、土器は10世紀後半のもので、類例の少ない当代の資料に貴重な実例を加え、編年を行なう際に重要である。(松本修自)

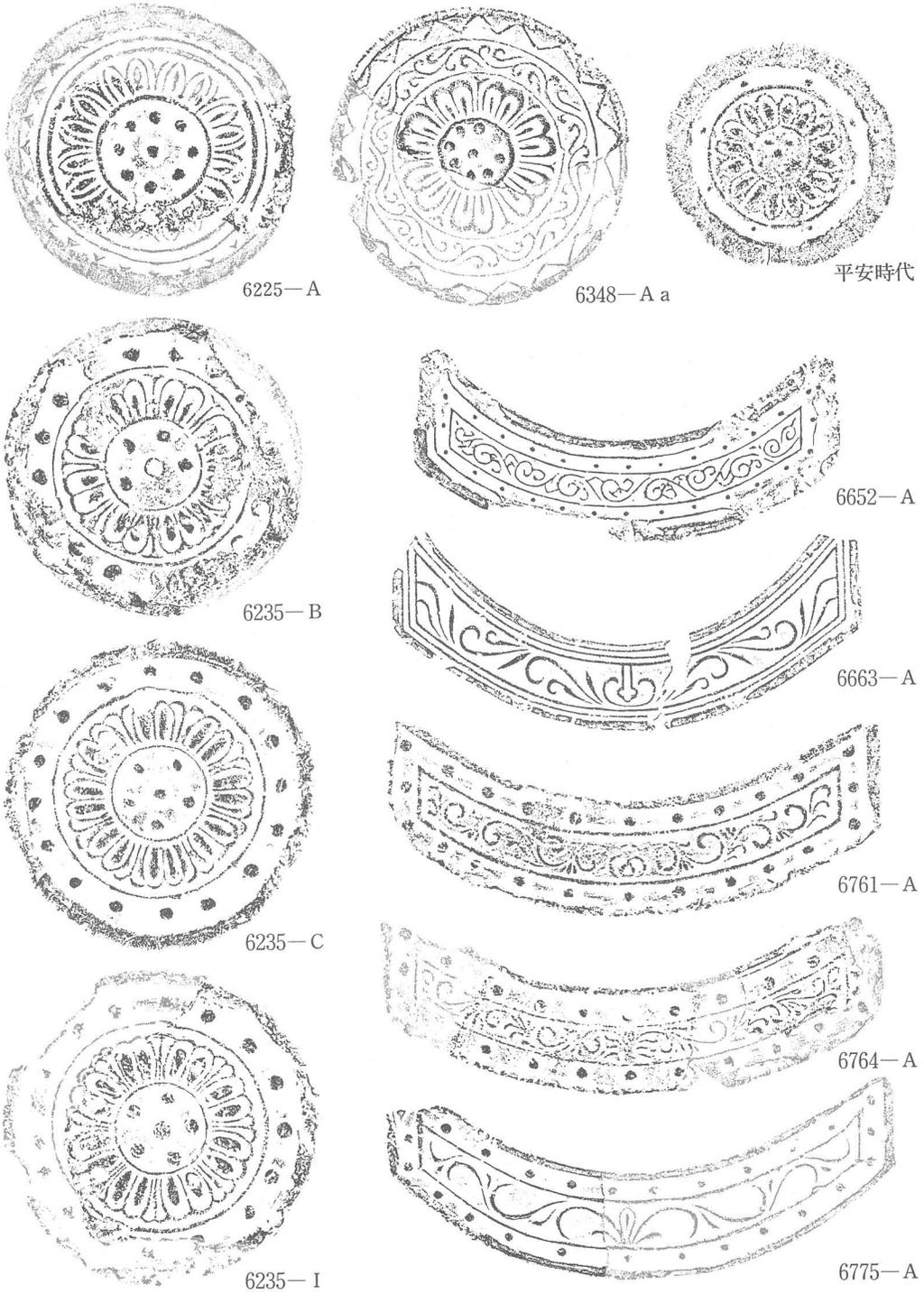


图72 第219・221次調査出土軒瓦 (1 : 4)

## 10 西隆寺旧境内の調査（3） 第221次

### 1 はじめに

本調査は、奈良市都市計画道路予定地の事前調査である。調査は、1991年1月22日に開始し、同年3月14日に終了した。調査区の所在は奈良市西大寺東町で、平城京条坊では右京一条二坊九坪西南部にあたる。また、奈良時代後半に造営された西隆寺の伽藍中心部付近でもある。これまでに行なわれてきた西隆寺関係発掘調査の結果及び西大寺伽藍絵図（元禄11年・1698に、宝亀11年・780の絵図流記を模写したと伝える）から、金堂を取り囲んで巡る回廊の北側部分（北面回廊）と講堂の一部の検出が予想された。調査の結果、調査区南部で北面回廊の北側の柱列を検出したが、講堂に関する遺構は検出できなかった。また、調査区北部では西隆寺に伴うと考えるのが妥当とみられる掘立柱建物等を検出した。さらに、調査区西南部で平安時代初頭とみられる井戸を検出したが、この井戸の存在は西隆寺伽藍中心部であるだけに、寺の盛衰を考えるうえでの重要な手がかりを提供したと言えよう。

### 2 遺 構

検出した遺構は、北面回廊、掘立柱建物6棟、掘立柱塀1条、井戸1基、大土坑1基、小穴多数と古墳時代の掘立柱建物、縄文時代の斜行溝などである。遺構検出面は縄文時代の斜行溝以外は現地表下約50～60cmであった。以下、奈良時代のものを中心に各遺構の概要を記す。

#### (1) 北面回廊SC1

西隆寺の回廊については、1989年度の平城宮跡第209次調査で、桁行方向柱間間隔10尺・梁間方向柱間間隔8尺、複廊の形式を持つ東面回廊を検出し、さらに1990年度の同第212次調査ではその東面回廊が西へ曲がる回廊東北隅を検出していた。今回の調査では、第212次調査で検出した回廊東北隅から西へ延びる北面回廊のうち、北側柱の礎石据付掘形5個を検出した（うち1個は第212次調査で一部検出済み）。桁行方向柱間間隔は10尺で東面回廊と同じであった。礎石据付



図73 第221次調査遺構図 (1 : 200)

掘形の形状は径150cm前後の不整円形もしくは長円形で、厚さ15～20cmの埋土がレンズ状に残るのみであった。

なお、北面回廊の北側に点々とある瓦溜りは北面回廊が廃絶した後に投棄されたものである。

(2) 調査区北部の建物等

SB 2 桁行8間以上梁間2間の掘立柱東西棟建物。桁行方向柱間間隔7尺、梁間方向柱間間隔8尺。

SB 3 桁行10間以上梁間2間の掘立柱南北棟建物。桁行方向、梁間方向とも柱間間隔7尺。柱掘形は1辺1m前後の隅丸方形。

SB 4 東西2間南北2間の掘立柱総柱建物。東西方向の柱間間隔は5尺5寸、南北方向の柱間間隔は6尺5寸。

SB 5 桁行3間、梁間2間の掘立柱東西棟建物。床付きまたは総柱で、桁行方向柱間間隔6尺、梁間方向柱間間隔7尺。

SB 6 東西方向柱間間隔7尺、南北方向柱間間隔7尺の掘立柱南北棟建物か。

SB 7 東西方向柱間間隔8尺の掘立柱建物か。

SA 8 柱間間隔9尺、4間以上の掘立柱東西塀。

存続時期等については、SB 2は出土遺物から西隆寺に先立つ時期の建物である可能性も残すが、東西に長い形状から西隆寺に伴う、例えば僧坊といった建物と考えたい。また、そのほかの建物等についても西隆寺が史料的に10世紀までは存続していたことが確認されることから、西隆寺に伴うものとするのが妥当であろう。

(3) 井戸及び大土坑

SE 9 調査区南部西端で検出した井戸。掘形の南北長約2m、井戸枠の横板を止めていたとみられる杭のうち検出できた東側の2本の杭の距離約90cm。奈良時代の緑釉陶器1点とともに平城宮土器Ⅶ（平城上皇の時期）の土師器・須恵器が出土した。このことから、西隆寺建立以前のものでないことは明らかである。しかし、おそらく平安時代の初頭には既に存在したものとみられる。

SK10 調査区西南部で検出した径2m強の不整円形の土坑。埋土から出土した遺物の中に、平城宮瓦編年I期後半の軒平瓦6664Gaが1点ある。このことからだけでは判断はできないが、西隆寺に先立つ時期の、宅地に伴う遺構の可能性もある。また、湧水が激しく掘り下げが十分できなかったが、井戸であった可能性も残る。

#### (4) 縄文時代の溝

今回の調査区の東側に隣接する第212次調査区では、斜行溝を検出し、縄文時代晩期の土器が出土している。その斜行溝の延長部を確認するため、調査区東部で奈良時代の遺構検出面からさらに約1m掘り下げた。その結果、斜行溝の北肩を検出したが、遺物は全く出土しなかった。

### 3 遺物

**瓦埴類** 調査区の全域から多量の瓦が出土した。軒丸瓦12点、軒平瓦20点、鬼瓦1点があり、平城宮瓦編年IV期のものが主体である。それ以外には、丸瓦が780点(111kg)、平瓦4918点(548kg)を数えた。軒丸瓦では6235Cが5点、軒平瓦では6761Aが5点出土したのをはじめ、西隆寺にかかわるものが大半を占める。なお、本調査で出土した軒瓦は、第219次調査出土の軒瓦とともに図72に掲載したので、参照されたい。

表15 第221次調査出土瓦集計表

軒丸瓦			軒平瓦			道具瓦	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
6 1 3 3	N	1	6 6 4 3	D	1	鬼瓦	1
6 2 3 5	C	5	6 6 6 3	C	1	丸瓦	重量 kg 111.45 点数 780
	I	1	6 6 6 4	G	1		
6 2 3 6	F	1	6 6 7 5	A	2		
	不明	1	6 6 9 1	A	1		
6 2 3 7	A	1	6 7 2 1	A	1		
型式不明		1		不明	1		
平安時代		1	6 7 3 9	A	1	平瓦	重量 kg 548.03 点数 4,918
			6 7 6 1	A	5		
			6 7 6 4	A	3		
			6 7 7 5	A	1		
			型式不明		2		
軒丸瓦計		12	軒平瓦計		20		

土器 SB 2 の柱穴掘形から平城宮土器編年Ⅲ以前の土師器杯底部、同抜取穴から平城宮土器Ⅲ・Ⅳの土師器皿及び土師器杯、SB 5 の柱穴掘形から 9 ～ 10 世紀の土師器杯が出土した。また、SE 9 の井戸掘形及び埋土から、平城宮土器Ⅶの土師器、須恵器数点と奈良時代の緑釉陶器 1 点が出土した（図 74）。1 は須恵器杯 B 蓋で、口径 16.6 cm、高さ 3.2 cm。灰褐色を呈し、口縁端部が強く屈曲する。2 は土師器皿 A Ⅱ。口径 17.5 cm、高さ 2.1 cm。a<sub>0</sub> 手法で調整し、口縁部直下を強くよこなでする。

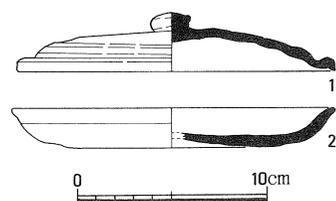


図 74 SE 9 出土土器（1 : 4）

#### 4 考 察

##### (1) 北面回廊と講堂

今回の調査では、西隆寺北面回廊の北側の柱列を検出した。第 209 次調査及び第 212 次調査の成果から、回廊の梁間の柱間寸法は 8 尺であることが判明しているので、北面回廊の中心の柱列の位置は北側の柱列より 8 尺南にくると考えてよい。この中心の柱列と 1971 年度の調査で明らかとなっている金堂の心との距離は 32.5 m 前後、ほぼ 110 尺となる。第 209 次調査では東面回廊の中心の柱列と金堂の心との距離は 130 尺であることが明らかになっており、回廊が東西、南北ともに金堂の心を基準に建設されていることが推定できる。

次に講堂は、前述したように西大寺伽藍絵図では金堂の北方で北面回廊に取り付く形で描かれているが、今回の調査では基壇あるいは礎石に関連する遺構は全く検出できなかった。調査区南部では、全体的に遺構の残存状況がよくなかったため、この位置に講堂が存在しなかったとはにわかに断定はできない。しかし、2 (3) でふれた井戸（SE 9）の存在時期から、もし存在したにしても比較的短期間で廃絶したものとみられる。また、この SE 9 の存在は、講堂のみならず伽藍中心部の荒廃がかなり早かったことを示している。

##### (2) 北面回廊北部の建物等の変遷について

北面回廊北部の建物等の並存及び前後関係については、調査結果から以下の事項が指摘できる。

① SB 2 は SB 3 ・ SB 4 ・ SB 6 とは並存しえない。

② SB 3 は SB 5 ・ SB 7 ・ SA 8 とは並存しえない。

③ 柱穴の切り合い関係から SA 8 は SB 3 よりも古い。

④ SB 2 の複数の柱穴の柱抜き穴から平城宮土器編年Ⅲ・Ⅳの土師器が、また SB 5 の柱掘形から平安時代（9～10世紀）の土師器が出土していることから、SB 2 は SB 5 よりも古いと推定できる。

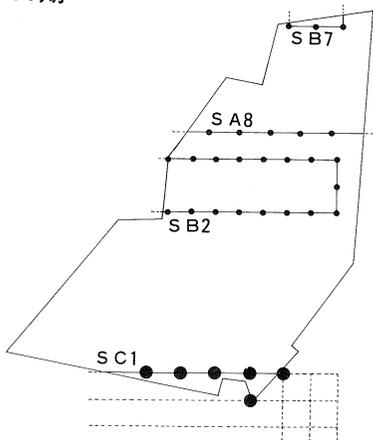
⑤ SB 3 と SB 6 は、桁行方向、梁間方向とも柱間間隔が7尺で南側の柱筋をそろえていることから、同時期の建物である可能性が高い。

以上のうち①、②から少なくとも3時期以上の変遷があることが明らかであるが、各建物等の前後関係については③、④、⑤以外の手がかりがないため確定できない。一応、一案を図75に示しておく。

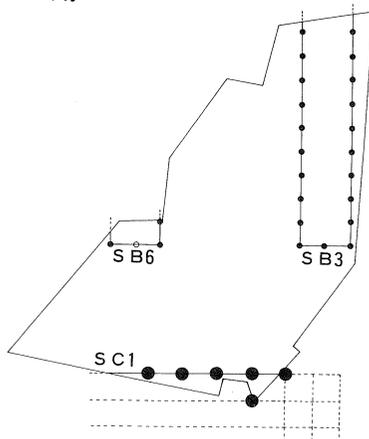
いずれにせよ、前述の西大寺伽藍絵図では北面回廊の北側は空地として描かれているが、今回の調査の結果、以上のように比較的多くの建物等が継続的に存在していることが明らかになった。このことは、西隆寺が存続しながらも、中心部の伽藍が荒廃し、それほど整然とした秩序をもたずに建物等が建設されていたことを物語るのかもしれない。

（小野健吉）

### A期



### B期



### C期

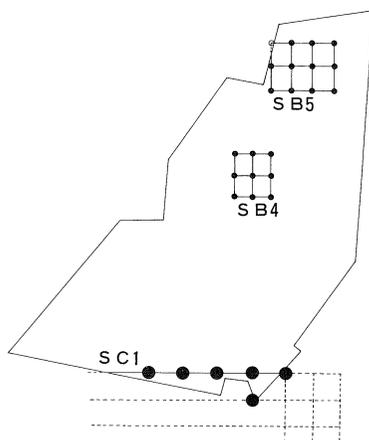


図75 遺構変遷図

## 11 法華寺境内の調査 第215—15次

法華寺の境内で、薬師堂の移転に伴う調査と駐車場を囲う築地塀の改築に伴う調査とを行なった。また、現在の南門に取付く南築地塀の改修に伴う立会い調査でも礎石列を発見しているのので、併せて報告する。

### 1 薬師堂の移転に伴う調査区

棟札によって1666年（寛文6）に建立したことがわかる現在の薬師堂を、北へ2mほど移して建てるため、建物撤去後に現基壇を中心に面積56㎡を調査した。前身建物の基壇と礎石据え付け掘形が見つかり、現在の薬師堂と同規模の前身建物があったことがわかった。前身建物の基壇は東西540cm、南北450cmで小さい三間堂であり、向拝はない。基壇は整地土上に高さ30cmほどを三層で築いている。基壇土に混入している瓦から建物は中世に建立したと考えられる。

現在の薬師堂の四隅にあたる柱位置の礎石は、他の礎石が人頭大であるのに、その倍ほどある。前身薬師堂も同様である。

### 2 築地塀の改築に伴う調査区

この調査は三ヶ所に分かれているので、西からⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区と呼んで記述する。Ⅰ・Ⅱ区は幅5m、長さ10m、Ⅲ区は幅3m、長さ10mの調査区である。

三区に共通するのは、室町時代初期にここに東西の築地塀が築かれ、何度かの改修を受けて現在に至っていることである。江戸時代の『大和名所図絵』にも、この位置に築地塀を描く。この築地の基底部は土を突き固めて築いた様子はなく、いわば土を積み重ねただけであり、したがって全体に柔らかい。

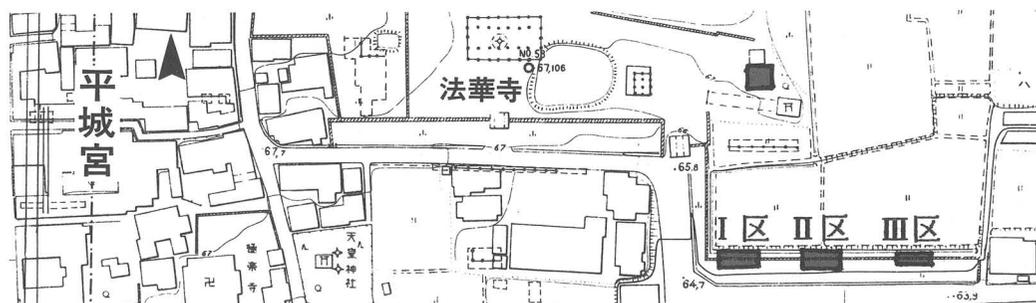


図76 第215—15次調査位置図

## I 区

層位は上から盛土、旧耕土、床土、遺物を含む茶褐土で、これらを取り除くと奈良時代の遺構面に達する。上層の遺構として発掘区南端部で室町時代の築地塀を検出し、発掘区西半分を掘り下げ奈良時代の遺構面で十字に交わる溝、掘立柱建物2棟を検出した。

### 奈良時代の遺構

溝SD03、SD04は調査区内で十字形をなしている溝で次に述べる掘立柱建物より古い遺構である。幅100cm前後で、深さは10cmほどと浅い。このうち東西溝SD04は、南一条大路の北側溝の位置にあたり、平城京造営時に掘削した可能性がある。ただし、南北溝SD03は条坊とは無関係の位置にあたるから、決定的ではない。発掘区南よりに検出した掘立柱建物SB01は東西棟建物と思われ、桁行は3間分を検出した。柱間数は不明であるものの、柱掘形が70cm～100cm、柱痕跡は30cmと大きく、規模が大きい建物を予想させ、桁行5間以上と考えられよう。柱間寸法は、1尺29.7cm前後で桁行10尺等間、梁間9尺と考えられる。建物の南側に建物が広がる余地がないから、検出した一部は建物の南底に当たる。また、発掘区北に掘立柱柱穴2つを検出し、塀SA05とするが、建物の可能性もある。II区で検出した奈良時代の築地は、I区では検出できなかった。

下層遺構として検出した奈良時代の遺構と、上層遺構として検出した室町時代の遺構の間に、瓦が散乱する面があったが、遺構を伴ってはいない。

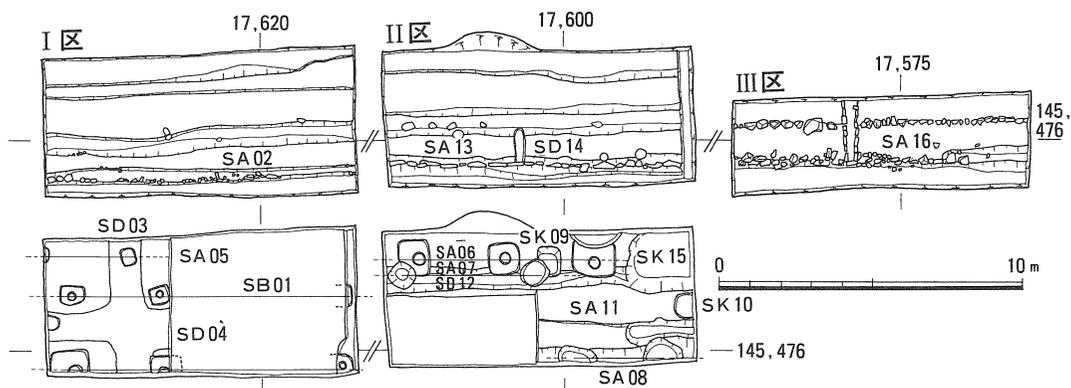


図77 第215-15次調査遺構図(1:250 上3図上層, 下2図下層)

## 室町時代の遺構

築地塀SA02は基底部で幅150cmほどがのこり、基壇南側を白粘土で固定し玉石あるいは瓦を数段重ねて化粧とする。瓦には軒瓦が混じり、その文様から室町時代初期のものであり、築地もその頃であろう。

## Ⅱ 区

層位はⅠ区と同じで、上から盛土、旧耕土、床土、遺物を含む茶褐土ないし灰褐土があり、これらを取り除くと奈良時代の遺構面に達する。東西に並ぶ掘立柱穴列を3条、土坑2基、東西築地2条を検出した。上層の遺構である南端の築地1条を除いて奈良時代の遺構と思われる。

## 奈良時代の遺構

掘立柱穴列である3条は建物にまとまるか塀の柱列かは不明である。いずれも東西列で、北の一系列SA06は桁行2間分を検出した。柱間数は不明であるものの、柱掘形が100cm～140cm、柱痕跡は36cmほどと大きく、建物にしても塀にしても、相当大きい規模であろう。1尺は29.7cmで、柱間寸法は10尺等間と考えられる。北の一系列SA06に重複してそれより新しいSA07があり、調査区の南にSA08がある。掘立柱穴列SA07とSA08の柱穴は丸味を帯びている。

築地塀SA11は地山を削り出して基底部をつくっている。基底部の北には肩幅70cmほどの東西溝SD12があり、築地の雨落溝と考えられよう。Ⅱ区の東端の築地中央に方形の穴SK10があり、門の西柱穴かもしれない。

## 室町時代の遺構

室町時代の築地塀SA13は、奈良時代の築地塀の南にある。Ⅰ区の築地塀の東延長部にあたるが、ここでは基壇化粧の玉石や瓦はなく裏込にあたる白粘土がブロック状になって基壇を固めていた。築地上には発掘区ほぼ中央に幅30cm、深さ5cmの南北小溝SD14がある。築地基底部を貫く、暗渠の痕跡であろう。

## 時期不明の遺構

発掘区の北東隅に大土坑SK15がある。枿などの施設は残存しないが、井戸であるかもしれない。

### Ⅲ 区

層位は、上から旧耕土、床土で、これを取り除くと中世の遺構面に達する。発掘区中央には、室町時代の東西築地塀SA16がある。この基壇の化粧石が良好に残っていたので、Ⅲ区では基壇を壊して掘り下げることせず、したがって奈良時代の遺構面に達していない。東西築地塀SA16のほかには遺構はない。

東西築地塀SA16はⅠ区、Ⅱ区で検出した東西築地塀SA02、SA13の東延長部に当たるが、Ⅰ区、Ⅱ区と異なりⅢ区では玉石で化粧している。築地の内外では地面に高低差があったらしく、内側である北が40cm高い。基壇化粧は、外側にあたる南で人頭大の石を二段に重ね、所々に瓦を併用している。基壇幅は150cmあり、北側には土層断面の観察の結果、雨落溝があったと判断される。

#### 3 その他の調査

現在の南築地塀の改修に伴う調査を部分的に行なった。現在の築地の基底部を取り除くと東西に並ぶ礎石があり、これらの礎石は築地には無関係であり、中世から近世にかけての建物跡と考えた。現本堂を中軸線としてほぼ対称の位置で、東に3個、西に1個の礎石を確認したに留まるが、現在の南門と本堂を結ぶ中軸線の対称の位置に礎石建物があったと考えられよう。礎石は長軸80cmほどの自然石で、柱間は3mで10尺となろう。建物全体の様子は不明である。(上野邦一)

#### 4 Ⅰ区、Ⅱ区出土の遺物

土器 奈良時代から近世にいたる土器が出土した。ここでは、下層の掘立柱塀SA06の柱抜取穴から出土した土器を示す。1は土師器皿Aで、a<sub>0</sub>手法で調整する。暗文はない。2は土師器鉢B。内面に放射暗文がある。3は須恵器皿B。いずれも平城宮土器Ⅲ～Ⅳである。(玉田芳英)

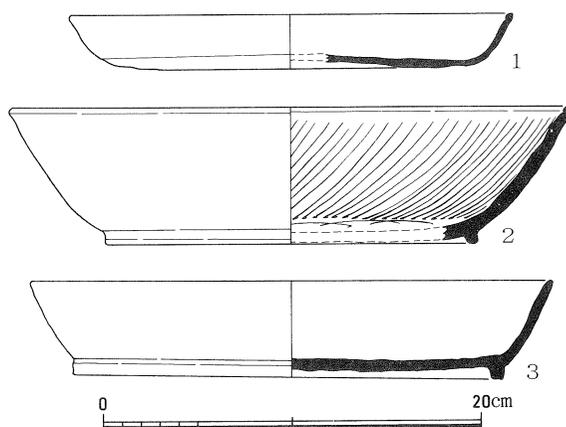


図78 下層塀SA06柱抜取穴出土土器(1:4)

軒瓦 白鳳時代から江戸時代までの各種の瓦が出土した(表16)。法華寺の前身である皇后宮所用軒平瓦6667A(図79-1)の顎の作り方には3種がある。第1は粘土板に顎用粘土を付加する段顎で、最も古式である。第2は瓦当部分が厚い粘土板に顎後縁用の若干の粘土を付加する段顎である。第3は瓦当下縁に面取りのない曲線顎で、新期の作り方である。今まで法華寺境内で出土した6667Aの顎の作り方や、範傷の検討が望まれる。出土量の最も多い軒瓦は室町時代前期(14世紀)のものであり、薬師寺との同范例が2例ある(図79-2・3)。3はすべて『薬師寺報告』の軒平瓦346の、瓦範切り縮め後の生産品であるが、焼成は両寺出土品とも軟質である。また、法華寺例は瓦当上縁と顎後縁に面取りをもつが、薬師寺例にはない。(佐川正敏)

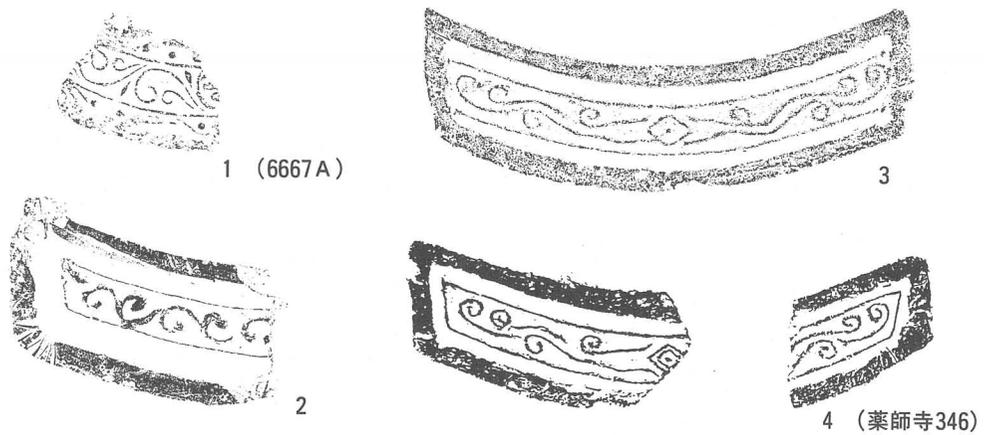


図79 第215-15次調査出土軒瓦(1:4)

表16 第215-15次調査出土瓦集計表

軒丸瓦			軒平瓦			道具瓦		
時代・型式	種	点数	時代・型式	種	点数	種	類	点数
白鳳・姫寺式		1	白鳳	重弧	2	古代	面戸瓦	1
奈	6126	A	6641	C	1	中世	面戸瓦	3
	6138	B	6664	R	1	江戸	面戸瓦	1
		I	6667	A	4	中世か近世	面戸瓦	1
良	6276	Aa	6671	Aa	1	古代	熨斗瓦	2
	6285	A	6714	A	2	江戸	鬼瓦	2
	6348	Aa	6767	A	1	中世か近世	鬼瓦	1
鎌倉	巴	1	6768	B	2	中世	種類不明	9
室町	巴	10	平安	安	1	江戸	種類不明	1
中世	巴	10	鎌倉	倉	5	道具瓦計		21
江戸	巴	9	室町		36	丸瓦		
江戸	菊	8	中世		4	重量	kg	519.48
中世か江戸	巴	5	江戸		12	点数		2,560
文字瓦		1				平瓦		
型式不明		1				重量	kg	1675.90
軒丸瓦計		57	軒平瓦計		72	点数		10,695

## 12 長屋王邸および二条大路出土の木製品

### 1 はじめに

1987年から1990年にわたる長屋王邸および二条大路、藤原麻呂邸の調査では夥しい量の木製品が出土した。その一部は、1986年度～1990年度の『平城宮跡発掘調査概報』、奈良国立文化財研究所編1991『平城京長屋王邸と木簡』（吉川弘文館）に報告している。ここでは、その後の整理に伴って実測した遺物の一部を報告する。なお、遺物は膨大な量にのぼり、今後も機会を得て整理、実測を終了したもののから順次報告したい。

### 2 木製品の類

井戸SE4770の木器（1～5） 平城京左京三条二坊のうち、一・二・七・八坪の4町をしめる長屋王邸では、正殿域に接して東西の外郭がある。井戸SE4770は、この東外郭の東北外側にある井戸跡である。井戸といっても実際には井戸枠を抜き取っており、そのあとごみ穴として木簡、木器、土器等を投棄していた。木簡には「長屋皇宮倭一石舂人夫」と記したものがあり、これによってこの地が長屋王邸と判明したことは記憶に新しい。木製品には人形（1）、マリオネット（2）、独楽（4）、陽物（5）、舟形、刀形、および曲物、糸杵などがある。ここでは祭祀具を主に紹介する。

人形は全長7.6cmの小さなもの。頭を圭頭に作り、肩と腰の両側面に切り欠きをいれるタイプで、手を表わす切りこみはない。いわゆるマリオネットは体部と、手か足の一部と思われる部品がある。体部は側面形を表わし、肩と腰の位置に手足の軸をいれる小孔を穿つ。顔には墨描などの表現はない。保存状態はやや不良。独楽は広葉樹の心特材を加工したもので、一部には樹皮が残る。陽物は、針葉樹の心去り材を加工し、亀頭や鈴口を表現したもの。他端部は欠損し、これらの加工状態は不詳。舟形は丸木舟の形であるが、甲板には長軸に直交する刻みがあり、あるいは丸木舟に甲板を張った準構造船の模造品か。半分に切断している。

SE4770から出土した木簡には霊亀、養老の紀年銘があり、このうち年代が降

りるのは「養老元年十二月廿二日」の日附である。木簡の投棄は、この養老元年（717）末前後と考えるとよく、木製品の年代も同じ頃に位置づけられよう。ところで、人形は手の切込みがないやや特殊なタイプで、平城宮壬生門の調査で初めて明らかになった。最近では静岡県元宮川・神明遺跡での類例が増しており、日本における偏平人形の出現時期にからんで注目されている（静岡県埋蔵文化財研究所1991『大谷川』Ⅳ）。この形の人形は、数は少ないながら平城宮では壬生門前の二条大路北側溝（『木器集成図録』No.5304）や、平城宮東大溝SD2700（『昭和61年度平城概報』P.21-8）に類例があり、本例はこのうちで最も実年代が遡る。8世紀初頭の人形が、地方によって実際に形や作りが違ったのか否かの問題や、この型を写した可能性が強い銅製人形の年代をめぐって、今後論議を呼ぶことになる。

**井戸SE4225の漆器（17）** 井戸SE4225は、奈良末のF期に属す。長屋王邸は王の死後、再び四つの坪に分割されるがこのうちの七坪の南西隅近くに位置する。この井戸の埋土からは漆器が出土した。器種は杯Aに属し、推定口径16~17cm、高さ3cm。口縁部と底部の一部を欠く。木胎の上に布着せをし、黒漆塗りとする。底面のほぼ中央に針書き「少川」がある。

『関市令』出売条には「それ横刀、槍、鞍、漆器の属は各造る者の姓名を題しえ鑿らしめよ」とある。『日本令』のもとになった『唐令』には似た規定があり、また実際に中国では漆器に工房名や工人名などの記載をみる。しかし、令の規定にかかわらずわが国古代の漆器（容器の類）に、製作者名などをみることはあまりない。その稀な例に属する平城京左京一条三坊の東三坊大路側溝SD650の漆器には、2例がある。1例は高台を作りだした杯Bの底面中央に「東」と針書きがあり、いま1例は椀の外面に朱漆で2字ないし3字の文字（判読不可）がある。しかし2例とも9世紀代以降のものであり、本例はそれらより遡る。この「少川」が製作者を示すのか、所有者なのか、あるいはその他の意味なのかは明らかにしがたく、今後の課題といえよう。

**東西溝SD5300・5100の木器（6~16・18~26。24のみSD5100、他はすべて**

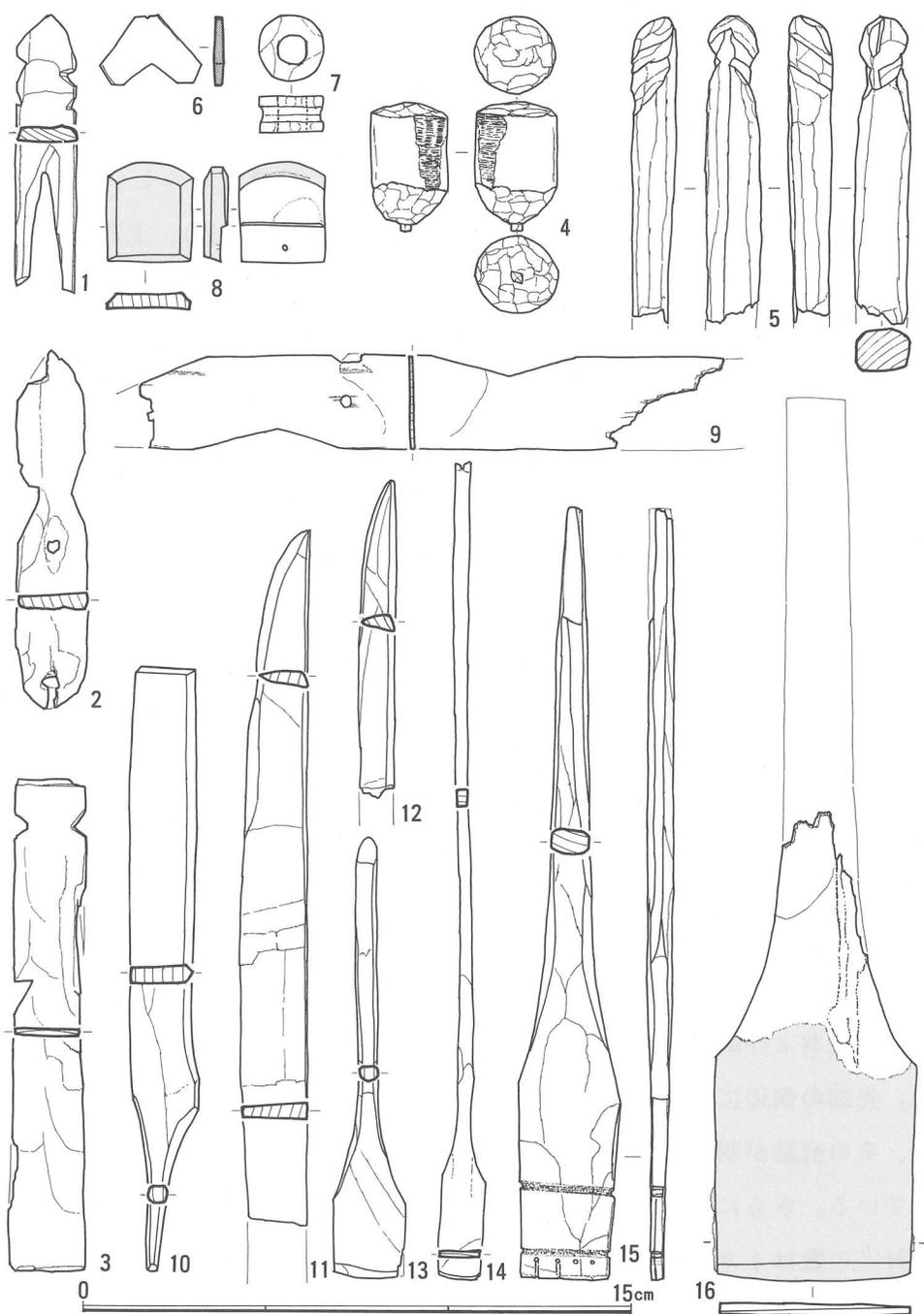


図80 SE4770・SD5300出土の木器（1：2）

SD5300) 長屋王邸の北には幅35mの二条大路がある。この大路の両側には幅約3m、長さ130mと約70mの東西溝SD5100とSD5300があり、ここから膨大な遺物が出土した。伴った木簡には天平8~10年(736~738)の紀年銘、墨書土器には天平12年(740)の紀年銘があり、この頃に投棄したらしい。ここに報告する木製品には器物の一部(6~8)、木製模造品(9~12)、工具(13~16)、容器(18~20)、曲物(21~24)、その他(26)などがある。

**器物の一部** 6は琴柱。琴の弦を張り音程を整える琴柱は、長屋王邸と周辺から3点が出土している。これは平面形を六角形に造り、上底には弦を受ける溝をつけ、下底は三角形に切り欠く。高さ1.9cm、最大幅2.8cm。小さく薄いところから、模造品の可能性もあろう。同じSD5300からは墨書のある琴柱が出土しており、これと類似する。同じ琴の部品か。8は帯金具の鉞尾に似た木製品。長方形の板の一端を弧状に削り、表の縁は3辺を面どりする。裏面は長辺の中央付近で段をつける。器物の一部であろうか。表には墨の痕跡があり、裏面全面には剥離痕跡があり、また木釘が一部残る。長さ2.7cm、幅2.4cm。7は、いわゆる浮袋の口に類似した環状の木製品。直径1.7cm、高さ1cm。

**木製模造品** 11・12は刀子形である。9は鳥形ないし馬形的一种か。現状では両端を欠き、上面に2カ所、下面に1カ所の切り欠きがあり、中心部の左寄りには穿孔がある。10は、一端を直角に裁ち落とし、他端部を莖状に削り細めたもの。一側辺を刃状に削り出しており、あるいは一種の刀形であろうか。

**工 具** 篋<sup>へら</sup>および刷毛がある。15は刷毛の完形品。全長21.2cm、最大幅2.8cmの刷毛。先端の側辺に切りこみをいれて毛を挟み、紐で結縛する形。紐は現存しないが、その痕跡が明瞭で、側辺には紐づれを防止する切り欠きを上下各2カ所にいれている。さらに、毛のずれを防ぐために先端に針穴を穿ち、糸で固定している。針穴の数は4カ所。16は漆篋<sup>へら</sup>。柄の部分<sup>へら</sup>を欠く。最大幅5.5cmを測り、先端部は片刃に削る。全体に漆が厚く付着する。

**容 器** 曲物以外の容器には、皿および杯がある。19は皿A。破損が著しいが、口径29.8cm、高さ1.6cmに復原できる。底面の中央にはロクロの軸部にとりつけ

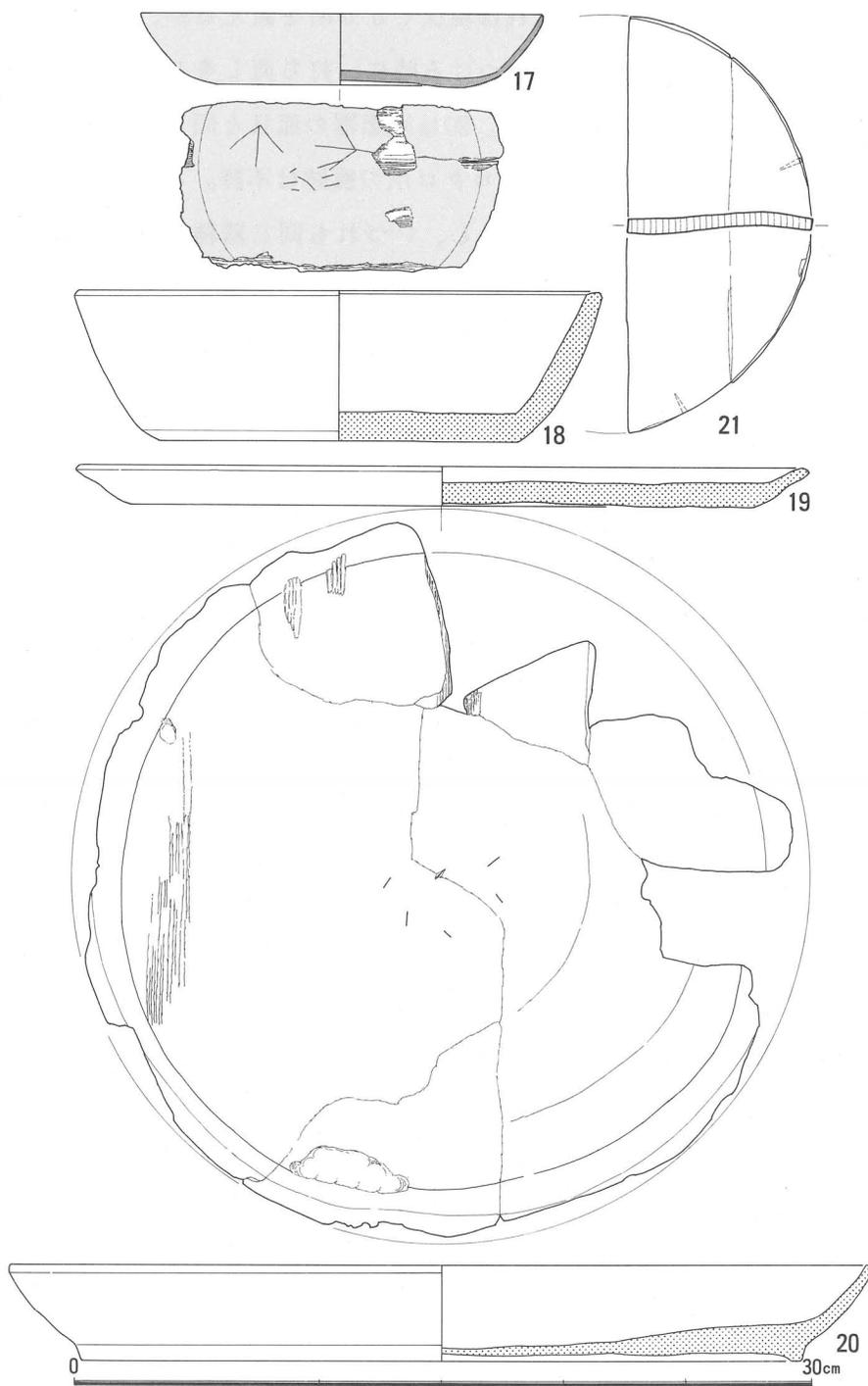


図81 SE4225・SD5300出土の漆器・木器（1：3）

た鉄爪の跡が、かすかに残る。これは現状で6カ所を数えるが、爪形の方には規則性がなく、あるいは軸部にとりつける時に、打ち直しをしたのであろうか。18は杯A。口径21.5cm、高さ6.2cm。20は須恵器の皿Bと同じ器種。現存するのは約半分。口径35cm、高さ4.0cm。ロクロ爪の痕跡は不詳。この3点ともに白木造りで、漆を塗った痕跡はない。しかし、いずれも同じ器種の漆器があり、類例の少ない漆器の大きさなどを知る上に、貴重な例といえよう。木取りは3点ともいわゆる横木どりである。25は容器の把手。いわゆる槽の類か。把手に接した縁の上面には鉄釘がのこる

**曲物** 側板を含め完存しているのは22の1例のみ。他は底板のみ。22は口径が16.4cm、高さ6.1cmの小型の曲物。23は底板のみ。底面の中央には大きく「益人」の刻字がある。ただし、新しいキズなどがあり、刻字の一部は欠損している。この刻み方は、字の輪郭に沿って刀子の刀をいれてゆくそうこうてんぼく双鉤鎮墨の手法をとっているが、墨は点じていない。この字が底板の内（つまり底面）にあるのか、外側にあるのかは問題であるが現状では不詳。刻字の周辺には刀子の切り傷が無数にのこる。この東西溝SD5300の南には、やはり時代・性格ともSD5300と同じ東西溝SD5100があり、ここからは「奉身万歳福」、「益万呂」、「万呂」と刻字がある曲物が出土している。本例も、これらとともに、一連のある行事の中で使われたのであろうか。

24は曲物の底板。直径18.2cm。4箇所に側板を留めた樫とじの痕がのこり、内側には側板が接していた痕跡がある。これをもとに復原した側板の直径は、17.4cmとなる。底板の外側（この曲物が蓋になるとすると、蓋の上面）には、「建部建部部□」の墨書がある。SD5100の出土品。

**その他** 八角形の板がある。厚さ6mmから7mmの板材（板目板）を、八角形に切断したもの。八角形の四辺の中央から「十字」状に墨線をひく。これは四辺の中央に小さな刻みをいれ、それを目印にして墨線をひくが、筆ではなく、墨糸で行なったようである。この墨線は一面にのみあり、他面にはない。この板の性格については不詳である。

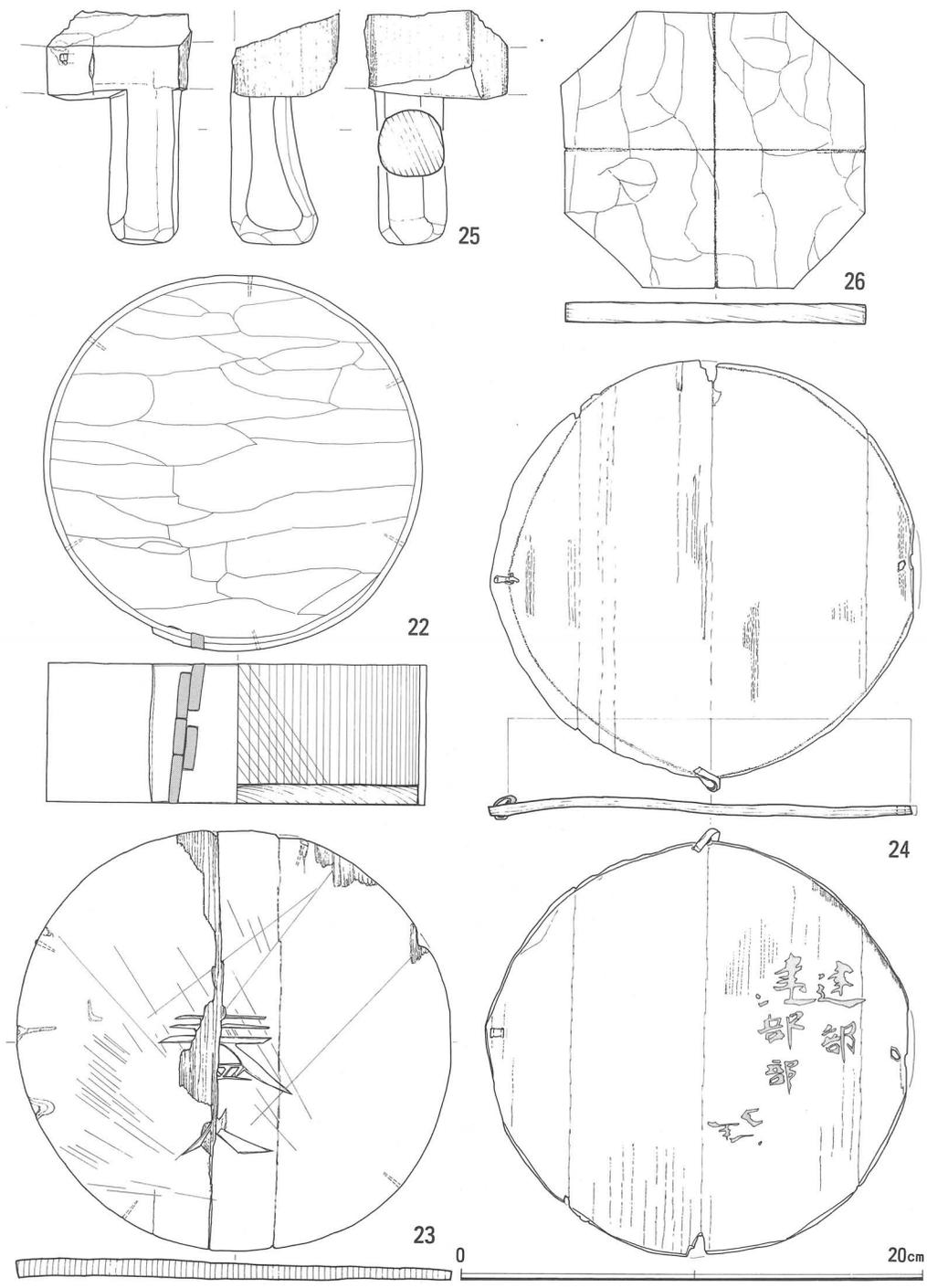


図82 SD5300・5100出土の木器（1：3）

### 3 建築部材

奈良時代の建築物はそのほとんどが滅び、その実態は法隆寺など今日に遺る数少い建築と、地下に残る建物遺構とから復原している。稀には、掘立柱の礎板や井戸枠、暗渠や排水溝の側板などに建物の部材を転用していることがあり、古代建築を復原する上に貴重な資料となっている。ここでは礎板に転用した構造材の一部と、井戸枠に転用していた流板とを紹介しておく。

**礎板 (27)** 一端に筏穴がのこる1辺が13cmの角柱で、全長78cmを測る。もとは建物の構造材だったようで、一面には当初材の風化した面がのこる。礎板に転用する際に、材の両端を斧で切断し、三面を手斧削りしている。手斧の刃のあたりは7.5cmと大きい。この手斧削りの後に「大」字を刻印している。印の直径は約3.3cm。刻印は4カ所にある。

建物SB 5250出土。SB 5250は二条大路の北、左京二条二坊五坪の東辺にある二面庇の長大な南北棟建物。桁行は確認した範囲で20間ある。藤原麻呂の時代の建物と推定している。

(金子裕之)

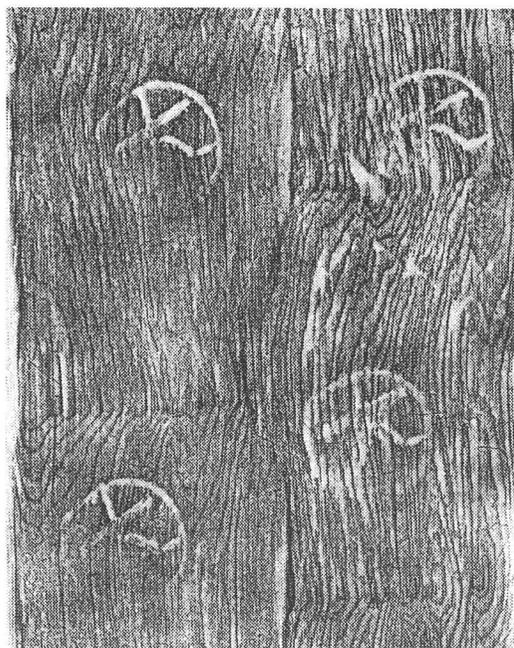
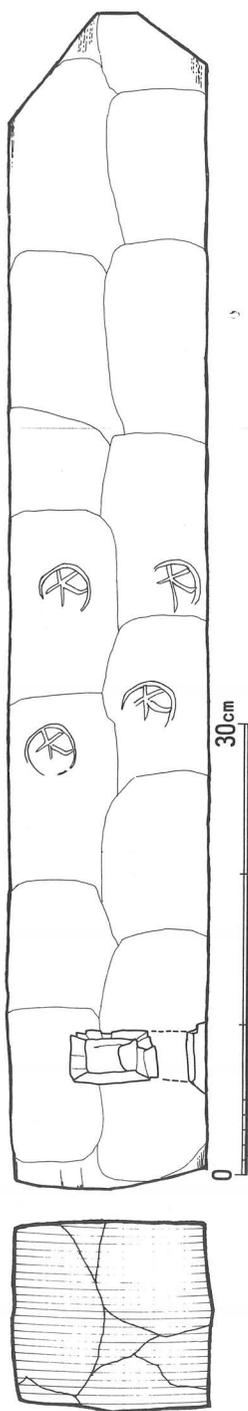


図83 SB5250の礎板に転用した構造材 (実測図1:5, 拓本1:2)

**大和葺下材** いわゆる大和葺に用いる流板の下材である。

2枚出土した。1は、1986年度の第178次調査で検出した方形縦板組の井戸SE4116の側板に転用されていたもの（『昭和61年度平城概報』）。全長2235mm×幅227mmで、しのぎの高さは45mm。両側のひっかかり部分は、右側ではほとんど破損しているが、右側の下端近くで本来の形をとどめており、高さ42mmで上面の幅が20mm前後である。SE4116は、左京三条二坊七坪の東南隅近くの井戸。時期は奈良時代末である。2は、1989年度の第202-13次調査で検出した、東二坊坊間路西側溝から二条二坊五坪に導水する斜行溝（『1989年度平城概報』）の北側板に転用されていたもの。全長592mm×幅242mmで、しのぎの高さは44mm。両側の突起部分は左右ともに残るが、上面はすでにまるみを帯びている。また、左右でやや寸法が異なり、高さ×上面幅は左が38mm×16mm、右が53mm×22mmである。参考までに、法隆寺五重塔裳階の大和葺に用いている流板の葺き方を、図84に示しておく。下材の幅は0.98~1.00尺（約30cm）あり、今回出土した2材よりも一まわり大きいようである。（浅川滋男）

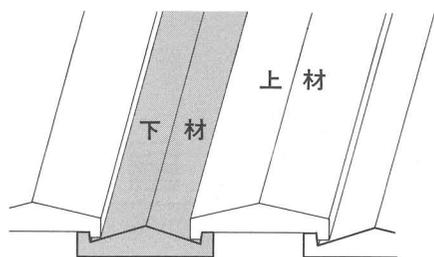


図84 大和葺上下材の納まり模式図

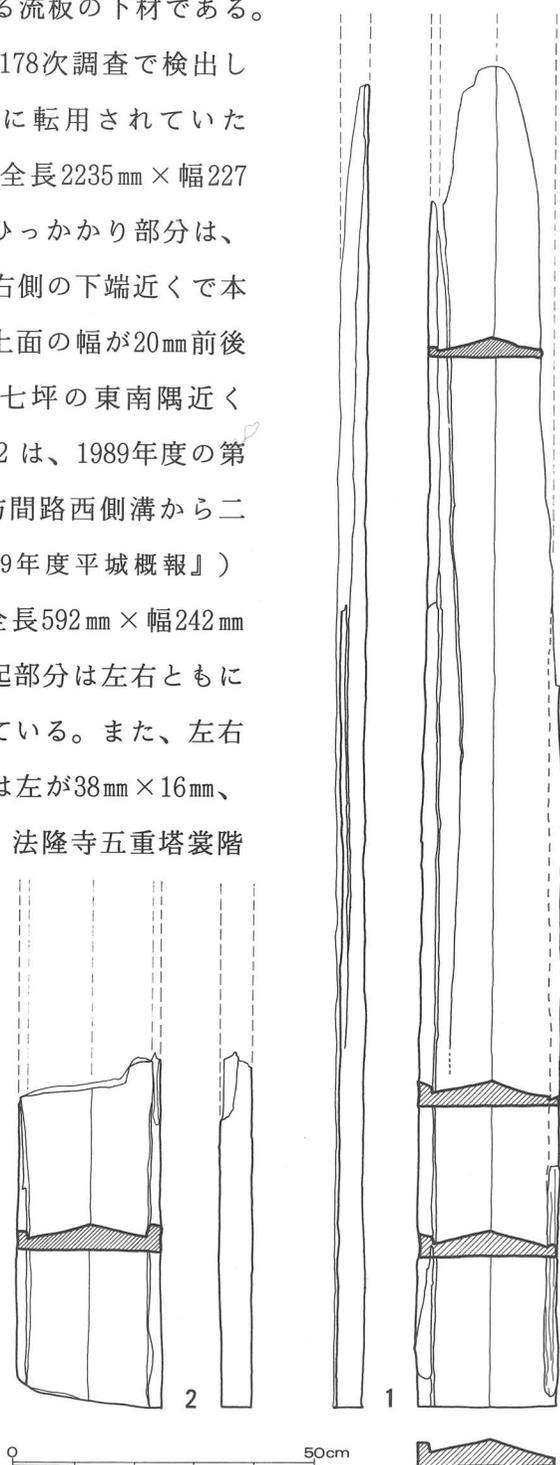


図85 大和葺下材実測図（2：25）